527-16
1200501495052

- 5 -

岡本綺堂著

綺堂戲曲集

第十三卷

東京 春陽堂版

527-16

第十三卷　目次

相馬の金さん……一
水滸傳……八三
雁金文七……一六七
長柄の人柱……二五九
おさだの仇討……二九一
雷火……三五五
江戸子の死……三九七

相馬の金さん

昭和二年六月作。

昭和二年十一月。歌舞伎座初演。

初演當時の主なる役割――相馬金次郎（市川左團次）石澤寅之助（中村吉右衛門）相馬半三郎（市川壽美藏）常磐津文字若（市川松蔦）文字若の母（澤村源之助）伊勢屋の亭主、中間（市川左升）番頭長兵衛（中村吉之丞）など。

登場人物――徳川の御家人相馬金次郎。金次郎の弟半三郎。おなじく御家人石澤寅之助。伊勢屋千右衛門。伊勢屋の番頭長兵衛。おなじく若い者富八、久七。常磐津文字若。文字若の母、おとく。稽古の娘およし。ほかに職人。長屋の女房、子供。料理茶屋の女中。料理番。青山の僧。上野の僧。農家の娘、子供。質郎の小僧。燈籠賣。町家の女房、娘、女中、若い者、小僧。車力。荷持の男。中間。官軍の兵士など。

第一幕

（一）

江戸の末期。慶應三年、七月初旬の午後。

神田明神下の質屋、伊勢屋の店先。正面の上のかたは戸棚。まん中は奥への出入り口。下のかたの相馬の金さん

壁には賀帳を澤山にかけてあり。店の上の方には土藏の白壁。下のかたには格子戸。店の外は忍び返しの附きたる板塀にて、木戸あり、用水桶あり。表は往來の體にて、町家つゞきと知るべし。

（店の帳場格子の中には番頭長兵衛が帳面を繰つてゐる。若い者富八は帳面を前にして十露盤を彈いてゐる。職人岩吉は店の上のかたに腰をかけて煙草をのんでゐる。下のかたには長屋の女房おくまが赤兒を背負ひ、小さい女の兒を連れて腰をかけ、若い者久七を口説いてゐる。塀の外には小僧が水をまいてゐる。角兵衛獅子の太鼓の音きこゆ。）

おくま。　ねえ、お前さん。後生だから、もう一度よく見て、百五十ばかり附けてお呉んなさいよ。

（女の帶を突き付ける。）

久　七。　（帶をひろげて見る。）幾度見ても同じことで、四百と云つたら關の山で、その上は文久一つも附けられませんよ。

おくま。　文久一つも附けられない。（呆れたやうに。）お前さんも若いくせに隨分邪慳な人だねえ。まあ、おとなしく云ふことを肯いてくださいよ。不斷の月とは違ふんですからさ。

久　七。　盆でも暮でも、こんなに耳の切れた帶で五百も六百も貸せるものですか。そりやおかみさんが無理ですよ。

おくま。　なに、あたしが無理をいふものか。お前さんの方がよつほど無理だよ。

久　七。　いゝえ、おかみさんが無理ですよ。

おくま。　いゝえ、おまへの方が無理だ、無理だ。（泣聲になる。）女だと思つて馬鹿にするんだよ。

女の兒。　おつかあ、もう歸らうよ。

おくま。　どうして歸れるものか。今こゝに大事の用があるんだよ。

女の兒。　歸らうよう。（泣く。）

おくま。　えゝ、强情な餓鬼だねえ。（女の兒のあたまをぴしやりと撲つ。）

（女の兒はわつと泣き出す。背中の赤兒も火の付くやうに泣き出す。）

おくま。　どいつもうるさいねえ。

（おくまは起つて赤兒をいぶり付ける。赤兒はいよ〳〵泣く。女の兒も泣く。よき頃に水をまき終りて、小僧は木戸に入る。）

岩　吉。　いや、どうも大變だな。この暑いのにぎやあ〳〵泣き立てられちやあ、そばにゐる者までが逆上せあがつてしまふぜ。おい、久さん。なんとかして遣らねえか。

久　七。　だつて、お前さん。こんな帶で五百も六百も貸せるわけが無いぢやありませんか。

相馬の金さん

おくま。　こんな帶といふけれども、このお正月に一分二朱で買つたんだよ。

久　七。　冗談云つちやあいけません、こんな帶が一分二朱で……。

おくま。　二口目にはこんな帶、こんな帶と、あんまり馬鹿におしでないよ。

女の兒。　（又泣く。）おつかあ、歸らうよう。

おくま。　又泣きやあがる。（再び撲つ。）

長兵衞。　（見かれて。）どうも困るな。（帳場から出る。）まあ、おかみさん。靜にしてください。これ、久七。おかみさんが折角あゝ云つて口說きなさるのだ。もう百も附けてあげるがよからう。

久　七。　ぢやあ、おかみさん。きつちり五百といふところで我慢してください。

おくま。　（舌打ちして。）仕樣がないねえ。ぢやあ、まあ、それで我慢して歸りませうよ。

長兵衞。　（帳場から緡の錢を持つて來る。）さあ、これが一本、ほかに百ありますよ。（長兵衞は四百文の緡のほかに、廿文十五文などの錢を取りまぜて渡せば、おくまは數へて受取る。）

女の兒。　歸らうよう。（泣く。）

おくま。　あゝ、歸るよ、歸るよ。なんといふ泣蟲だらう。皆さんどうもおやかましうございました。

（背中の赤兒は又泣く。おくまはそれをいぶりながら、女の兒をつれて下の方へ立去る。）

岩　吉。　やれ、やれ、これで世の中がおだやかになつた。

長兵衞。　子供や赤ん坊や、色々の責め道具で嚇かされちやあ全くこつちが降參してしまひますよ。

岩　吉。　それぢやあ、おれもこれから責め道具を用意して來るかな。そこで、富さん。おいらの方はどうだね。

富　八。　岩さんの利分は二朱と六十四文になります。

岩　吉。　二朱と六十四文……。めつぽう高いぜ。間違つてゐやあしねえかえ。

富　八。　二度も彈いてみたのですから大丈夫です。

岩　吉。　六十四文なんていふ端下は面倒だ。それ、二朱置いて行くぜ。

富　八。　あとは此次に頂きます。

岩　吉。　それはまあ其時のことだ。なにしろ利上げをしたのだから流しちやあいけねえよ。

長兵衞。　わたしも承知してゐますから、決して流すやうなことは致しません。

久　七。　岩さんは景氣がいゝとみえますね。

相馬の金さん

岩　吉。　景氣が好ければ受けに來るが、泣きの涙で利上げをして、やう〳〵流れを扼ひ止める始末だ。

長兵衞。　横濱へ仕事に行つて、大層儲けなすつたといふぢやありませんか。

岩　吉。　横濱へ行きやあ金でも轉がつてゐるやうに云ふが、さて蹈み出してみると噂の半分にも行かねえ。往きと復りの路用を差引くと、江戸で稼ぐのも大した違ひはねえのさ。ぢやあ、番頭さん、賴んだぜ。

長兵衞。　はい、はい。

（岩吉は下のかたへ去る。）

富　八。　あんなことを云つてゐるが、岩さんも横濱へ行つて隨分かせいで來たさうだ。

長兵衞。　稼ぐには稼いだらうが、あの人のことだから神奈川あたりでみんな吐き出して來たらうよ。それでも利あげに來ただけが見つけものだ。

（長兵衞は笑ひながら帳場に戻る。下の方より盆の燈籠の荷をかつぎたる商人出づ。）

燈籠屋。　燈籠や、燈籠……。（呼びながら向ふへ立去る。）

久　七。　（表をみる。）あゝ、燈籠を賣りに來た。お盆ももう目の前だな。

富　八。　盆前にしちやあ不思議なくらゐに商賣が暇だぜ。

久　七。　それもやつぱり不景氣のせゐだ。なにしろ世間がさう〳〵しいからね。

長兵衞。　世間のさう〳〵しいのが何より困る。かういふ物騷な時節には、こゝらの家なぞは猶さら氣をつけなければならない。日が暮れたら大戸をしつかり卸して、商賣を休んでしまへ。

富　八。　このごろは斬取りや押込みが無暗に流行るといふから、まつたく險呑でならない。

久　七。　番頭さんのいふ通り、かういふときには質屋なんぞが一番先に眼をつけられるから氣味が惡い。

長兵衞。　商賣がひまな上に、押込みや押借りにお見舞ひ申されては泣つ面に蜂だ。くれ〳〵も用心しなければならないぜ。

二　人。　あい、あい。

（向ふより相馬金次郎、廿七八歳、道樂肌の御家人にて、風呂敷につゝみたる刀箱をかゝへて出づ。）

金次郎。　（格子をあける。）どうだ、番公。べらぼうに暑いな。

（長兵衞等三人は金次郎の顏を見てうんざりする。金次郎はずつと這入りて店さきに腰をかける。）

富　八。　（よんどころなく。）これは相馬の旦那樣、いらつしやいまし。

相馬の金さん

金次郎。　（笑ふ。）こゝの家で正直に相馬の旦那様と云つてくれるのはお前ばかりだ。あとの奴等はみんな相馬の金さんと云つて、人を友達扱ひにしてゐやあがる。おい、番公。忌に他人らしく顔を背けるなよ。お友達の金さんが來たぢやあねえか。

長兵衛。　（帳場を出る。）これは金さん。どうも嚴しい殘暑でございます。

金次郎。　世のなかに連れて、陽氣もなんだか番狂はせになつて來やあがつた。六月は馬鹿に冷々して袷を着るやうな始末だつたが、七月になつてから殘暑が滅法界にひどくなつて、この二三日はまるで釜うでだ。おまへ達はよく無事に生きてゐるな。石川五右衛門よりよつぽど強いぞ。あゝ、暑い、あつい、（扇を使つてゐる。）

長兵衛。　（奥にむかつて。）小僧や、お茶を持つて來な。

小　僧。　（奥にて。）あい、あい。

長兵衛。　この暑いのにどこへお出かけでございました。

金次郎。　おまへ達も知つてゐる通り、おれの先祖は相馬小次郎將門だから、月に一度はかならず神田明神へ參詣に來る。けふも明神へ參詣して、型のごとくに武運長久をお祈り申した上で、それからこつちへ出かけて來たのだ。

長兵衛。　あなたの御先祖が將門様といふことは豫てうけたまはつて居りますが、よく毎月かゝさずに御參詣をなさいますね。

金次郎。　先祖の將門は神に祭られてゐるが、その子孫の相馬の金さんは百俵取りの貧乏御家人だ。あんまり格式が違ひ過ぎるので、先祖に對しても申譯のない次第だが、なんと云つても先祖は先祖だ。月に一度ぐらゐはお參りをして置かなければ、人間の義理が濟むめえぢやねえか。（富八と久七を見かへる。）やい、やい。おれが將門を云ふと、いつでも笑やあがる。うそだと思ふならおれの家へ來て、系圖の一卷をしらべてみろ。

（奥より小僧は茶を汲んで出づ。）

小　僧。　お茶をおあがりなさいまし。

金次郎。　（小僧に。）どうだ、此頃は少しは白雲が癒つたか。用がなければ表へ出て、ちつと水でもまけ。幾らか涼しくなるだらう。

小　僧。　水はもう撒きました。

金次郎。　骨惜みをするなよ。もう一度、撒け、撒け。

小　僧。　あい、あい。（奥に入る。）

相馬の金さん

金次郎。　ことしは本祭の筈だが、神田は景氣よく出來さうかえ。

富　八。　ことしは御神輿が渡るだけで、なんにも催しはないと云ふことでございます。

金次郎。　本祭に山車も踊家臺も出さねえのか。神田つ子も意氣地がねえな。

久　七。　御時節柄で御遠慮申すのださうでございます。

長兵衛。　御承知の通り、一昨年の本祭に山車や踊家臺をひき出してお叱りを受けましたので、ことしは一切遠慮といふことになりました。

金次郎。　ちげえねえ。公方様上洛のお留守中にどんちやん騒ぎ立てたといふので、一昨年はひどく叱られたつけな。今年も叱られる積りで威勢よく遣ればいゝのに……。それだから意氣地がねえといふのだ。いや、神田つ子ばかりぢやあねえ、一體に江戸つ子と云ふものゝ意氣地が無くなつた。なあ、番公。さうぢやあねえか。

長兵衛。　へえ。

金次郎。　だが、おれはおめへは大好きだよ。

長兵衛。　（烟にまかれて。）へえ。

金次郎。　おめへの名は長兵衛といふぢやあねえか。長兵衛はいゝな。いかにも江戸つ子らしい名前だぜ。おれは實に嬉しくつてならねえ。

長兵衛。　まことに有難うございますと申したいのですが、金さんにあんまり油をかけられると、いつでもあとが怖ろしうございますからね。

金次郎。　なにも怖がることはねえ。長兵衛は長兵衛らしくすればいゝのだ。

長兵衛。　いや、その長兵衛といふ名は親が附けましたので……。

金次郎。　親が附けても公方様が附けても、長兵衛は長兵衛だ。そこで、長兵衛さん。この權八が些つと折入つて頼みがあるから、一番大親分の氣前をみせて呉れねえか。

長兵衛。　大方そんなことだらうと思ひました。

（長兵衛は他の二人と顔をみあはせて、いよ〳〵うんざりする。）

金次郎。　（笑ひながら。）と云つて、別にむづかしいことを頼むわけでもねえ。貧乏の方ぢやあ金箔附きの金さんも、この盆前はどうにも斯うにも凌ぎが付かねえ。なにぶん義理のわるい借金があるので、うか〳〵してゐると御身分にもかゝはると云ふ一大事だ。くどいことは云はねえから、ぐつと一番呑み込んで、長兵衛をおたのみ申すよ。

（迷惑さうに。）申すまでもなく、あなたのお屋敷は青山でございますから、御近所にお顔な

相馬の金さん

じみの同商賣も澤山ございませうに、兎角わたくし共の店へ來て、なにか御無理をおつしやるのは……。

金次郎。　はゝ、野暮をいふなよ。近所で用が足りるくらゐなら、この暑いのに重い物をかゝへてわざ〳〵こゝまで繰出して來やあしねえ。近所の麻布や赤坂ではあんまり顔が賣れ過ぎて、金さんの睨みも利かなくなつたから、そこでおめへを口説きに來たのだ。いつもながら無理ばかり云つて濟まねえが、けふばかりは眞劍におれの話をきいて貰ひたいな。

長兵衛。　では、まあ、折角でございますから、どんなお話か伺ふだけは伺つてみようぢやございませんか。

金次郎。　さう來なければ長兵衛ぢやあねえ。（風呂敷をあけて箱を出す。）けふ持つて來たのはこの一品だ。

長兵衛。　（のぞく。）お腰の物でございますか。

金次郎。　むゝ。刀には相違ねえが、おれたちが腰にさしてゐるやうなガタ光ぢやあねえ。由來を話せば長くなるが、おれの家に先祖の將門から傳はつてゐる北辰丸といふ名刀は卽ちこれだ。これは相馬の家の當主が家督を相續したときに、家例として中身を一度あらためてみる。併しわが物とは云ひながら、一代に二度とは見ないことに決まつてゐるので、おれも十年前に一度見たぎりだ。さういふ因緣つきの寶物だから、今までどんなに困つたことがあつても、身に替へ、家にかへて大切にしまつて置いて、お前のところは勿論、どこの質屋の暖簾もまだ潛らせたことはなかつたが、今もいふ通り、今度といふ今度ばかりはどうにも仕樣のない瀨戸際にせりつめたので、思ひ切つて抱へ出して來たといふわけだ。そこを察して、たんとの無心ぢやあねえ。十兩ばかり用立てゝ吳れゝばいゝのだ。

長兵衛。　あの、十兩でございますか。

金次郎。　十兩でいゝのだ。ほかの品とは違つて、家重代の寶物だから、なんぼおれのやうな人間でも、こればかりは決して流すやうなことはしねえ。そんなことをしたら相馬の家にも瑕が付くことだ。遲くも一月ばかりのうちには屹と受出しに來るから、どうかそれまでの所を融通してくれ。それも大金ぢやあねえ、指一本でいゝのだ。これだ、これだ。（指をみせる。）どう致しまして、指一本とおつしやるが、十兩と申せば大金でございます。どんなお品か兎も角も拜見をいたした上で……。

（長兵衛は刀箱に手をかけようとするを、金次郎はあわてゝ遮る。）

相馬の金さん

金次郎。　いや、いけねえ、いけねえ。むやみに箱を明けられちやあ大變だ。

長兵衛。　なにが大變でございます。

金次郎。　それには少し譯があるのだ。おれがこれほどに賴むのだから、中身を見ねえで此のまゝに受取つて貰ひたいな。

長兵衛。　それはいよ〳〵御無理といふもので……。手前共も商賣のことでございますから、お品を拜見いたした上ならば相當の御相談も致しますが、いくら大切な御寶物でも、中身をなんにも拜見いたしませずに、たとひ一分でも御用立て申しますのは、質屋の法に缺けたことで、わたくし共が主人に叱られます。

金次郎。　それはいかにも尤もだが、そこを偏にお願ひ申すのだ。まあ、なんにも云はずに受取つてくれ。

長兵衛。　たとひ何とおつしやつても、品物をあらためずにお貸し申すことは……。

金次郎。　どうしても出來ねえと云ふのか。

長兵衛。　いくら金さんのお賴みでも、それは堅くお斷り申します。

金次郎。　どうも困つたな。それだからおれが手を下げないばかりに賴むのだよ。

富八。　もし、相馬の旦那樣。番頭が申すのに決して無理はございません。お品を拜見しないで御用立て申すなどと云ふのは、商賣の法に無いことでございます。

久七。　さう云ふことは何から何までよく御承知でありながら、けふに限つてなぜそんな御無理をおつしやるのでございます。

金次郎。　みんなにさう云はれると、まつたく困る。おれもまんざらの木然人でもねえから、無理は萬々知つてゐるのだが……。こいつはどうも困つたな。

（金次郎はかんがへてゐる。）

長兵衛。　たゞ困る困るとおつしやつてゐないで、鳥渡あけて見せて下さるわけには參らないのでせうか。

金次郎。　勿論見せればいゝのだが……。どうも困つたな。

長兵衛。　わたくし共も商賣柄で、これまでにも方々のお屋敷樣から御大切のお品をおあづかり申したこともございますが、どちら樣でもみんな其のお品を一度は見せて下さるのに、あなたに限つてどうしても見せないと仰しやると、わたくしの方にも何だか疑ひが起ります。よもやそんな事もございますまいが、萬一その箱のなかに大切のお品が無いと致しますと…

相馬の金さん

……。

金次郎。　馬鹿をいへ。なんぼおれでもそんな騙りのやうなことをするものか。かうなつたら見せて遣りたいのは山々だが、當主のおれでさへ一代に二度は見ないことになつてゐるのだからな。（又かんがへる。）併しさう云つてゐたら果しがねえ。いつそ思ひ切つて明けて見せるかな。（箱に手をかけようとして又躊躇する。）いや、いけねえ。どうも惡さうだ。

長兵衛。　（笑ふ。）金さん。いつまでも焦らしてゐちやあいけません。あなたはいつでも駈引がうまいので、こつちが困つてしまひますよ。

金次郎。　けふばかりは駈引も糸瓜もねえ、おれは本氣で云つてゐるのだが、おめへ達には呑み込めねえのかな。ぢやあ仕方がねえ。ほかへ行つて賴んでみるとしようか。

金次郎。　（金次郎は箱を手早く風呂敷につゝんで引抱へ、二足ばかり行きかけて立ちどまる。）これから汗をふきながら、又方々をかけ摺りまはるのも難儀だ。やつぱりこゝの家へ荷をおろすより外はねえ。（引返して再び腰をかける。）おい、番公。一生に一度のお願ひだ。なんとか達引いてくれねえか。どうしても肯かれねえのかよ。

長兵衛。　どうしても肯かないと云ふわけぢやあございませんが、幾度云つても同じことで、何分にも中身を拜見しませんでは……。それを素直に見せられるくらゐなら、こんなに口を酸つぱくして賴みやあしねえと云ふのに……。

金次郎。　長兵衛。　でも、拜見しませんでは……。

長兵衛。　どうもお前も因業だな。

金次郎。　わたくしよりもあなたが無理でございますよ。

長兵衛。　（ふたりは同じことを押合つてゐる内に、下のかたより石澤寅之助、廿五六歳、これも道樂肌の御家人にて出で、内を鳥渡のぞいて用水桶のかげに隱れる。奥より伊勢屋の亭主千右衛門出づ。）

千右衛。　これは金さん、お暑いことでございます。あらましのお話は奥で伺ひましたが、これは番頭が申します通り、お品を拜見いたしませんでは、とても金子を御用立てるといふわけには參りません。併し折角お出でになりましたものを、唯お歸し申すといふのも失禮でございますから、なんとか別に御相談の致し方はございますまいか。

金次郎。　これ、御亭主。なんだか忌なことを云ふぢやあねえか。別に御相談の致し方といふのはどういふことだ。痩せても枯れても御家人の相馬金次郎だ。出來ない相談の無理を云つて、

一分や二分の煙草錢をいたぶりに來たのぢやあねえぜ。この通り、歴然とした質物を持參して金を借りようといふのだ。

千右衞。　では、その歴然とした質物を一應拜見させて頂きたいもので……。

金次郎。　又か。（舌打ちして。）さつきから諄く云ふ通りのわけで、おれでさへも一代に二度とは見ない大事の寶物だ。まして相馬の家の血筋でない者がむやみに箱をあけてみると、刀は蛇になつてしまふといふ云ひ傳へになつてゐる。

長兵衞。　刀が蛇になる……。本當でございますか。

金次郎。　それは昔からの云ひ傳へで、ほんたうに蛇になるか、ならないか、おれも確かには知らねえ。併し他人には決して見せるな、他人が見れば蛇になるといふ堅い戒めがある以上は、めつたな事も出來ねえので、おれも實はさつきから澁つてゐたのだ。さあ、これだけの仔細を正直に打ち明けたら、おめへの方でも疑ひを晴らして、この箱のまゝで預かつて呉れてもよからうぢやあねえか。

（金次郎は再び風呂敷をあけて、刀箱を亭主の前に出す。）

千右衞。　（笑ふ。）人が見たら蛙になれとか云ふことは聞いて居りますが、人が見たら蛇になる……とは少々恐れ入りますね。わたくし共も多年この商賣をいたして居りますが、箱のそとから中身の見透しは出來ません。質物としておあづかり申す以上は、どうしても中身を拜見いたさなければなりません。後日に何かの間違ひがございますと、わたくし共ばかりでなく、あなたの御迷惑にも相成ります。兎もかくも念のために鳥渡覗かせて頂きませんでは……。（箱をひき寄せる。）

金次郎。　いけねえな。おめへはどうしても見たいのかえ。

千右衞。　拜見いたしませんでは、何分御相談が出來ません。

（千右衞門は箱に手をかけるを、金次郎はだまつて見てゐる。刀箱はけんどん蓋になつてゐるを、千右衞門は引きあけると、箱の中からは眞黑な蛇が出る。千右衞門もおどろいて箱を落せば、長兵衞、富八、久七もびつくりして騒ぐ。そのうちに蛇は這ひ出して縁の下に入る。）

富　八。　ほんたうに蛇が出た。

久　七。　蛇が出た。

（金次郎は店へ飛びあがりて、いきなりに千右衞門を蹴倒す。）

金次郎。　それだから云はねえことぢやあねえ。こんなことになりやしねえかと思ふから、あれだけ

に譯を話したのだ。かうなつちやあ金を借りる、借りねえの論ぢやあねえ。おれの家の寶物は云ひつたへの通りに蛇になつてしまつたぞ。

千右衞。　どうも飛んだことで……。

金次郎。　えゝ、貴樣たちが好んで飛んだことを仕出來したのぢやねえか。たとひ質に置いたところで、無事に受け出せば濟むことだが、蛇になつてしまつてはもう取返しが付かねえ。さあ、亭主。家重代の刀を元の通りにして返してくれ。

千右衞。　まことに恐れ入りましてございます。

金次郎。　たゞ恐れ入つて濟むと思ふか。おれの刀をどうして呉れるのだよ。

（この時、表に窺ひゐたる石澤寅之助はわざと忙がはしく格子をあけて入る。）

寅之助。　おゝ、相馬。こゝにゐたか。

金次郎。　石澤か。なにしに來た。

寅之助。　さつきお前の家へたづねて行くと、弟が頻りに心配してゐる。どうしたのだと聞いてみると、兄きが盆前の遣り繰りに困つて、家重代の北辰丸をかゝへ出して、明神下の質屋へ持ち込んだと云ふのだ。

金次郎。　弟め、飛んだことをしやべりやあがつたな。

寅之助。　それを聞いておれも驚いた。いかに融通に困るからと云つて、重代の寶を質入れするなどとは以ての外のことで、そんなことが世間へきこえると、おまへばかりか組中の外聞にもかゝはると思つたので、早速に金の都合をしてお前のあとを追つて來たのだ。弟の話では、十兩あればいゝと云ふことだが、本當にさうか。

金次郎。　まあ、さうだ。

寅之助。　（ふところから金包みを出す。）その金はこの通り都合して來たから、質入れはまあ止めにしろ。

（金次郎はだまつてゐる。）

寅之助。　おまへだつて好んで質に置くわけでもあるまい。十兩の金の都合さへ出來れば、それでいゝのだらう。さあ、これを受取つてくれ。（金を渡さうとする。）

金次郎。　（力なげに拂ひのける。）折角だが、その金はもう要らねえ。

寅之助。　なぜ要らない。

金次郎。　なぜと云つて……。おれも途方に暮れてしまつた。（溜息をつく。）

寅之助。　（不思議さうに。）それは一體どうしたのだ。

相馬の金さん

（金次郎は再び默つてゐる。）

寅之助。　どうも可笑いな。（人々をみまはして。）こゝで何事か起つたのか。

（長兵衞等も默つてゐる。）

寅之助。　そこに刀箱がほうり出してあるやうだ。なんだか變だな。おい、番頭。どうしたのだと云ふのに……。はつきり云へ。

長兵衞。　實はその、お刀が紛失いたしましたので……。

寅之助。　刀が紛失した……。

長兵衞。　箱の蓋をあけますと、お刀が蛇になりまして……。

寅之助。　刀が蛇になつた。（かんがへて。）誰が箱をあけたのだ。

千右衞。　中身を一應拜見いたさうと存じて、わたくしが明けましたのでございます。

寅之助。　相馬の家の北辰丸は、當主でも一代に一度しか見ることは出來ない。その血筋でない者がめつたに箱をあけると、刀は蛇になるといふ云ひ傳へがある。おれもよもやと思つてゐたが、やつぱりそれが本當であつたのか。これ、金次郎。おまへは飛んでもないことをしたな。

（再び嘆息する。）まつたく飛んでもない事をしてしまつた。先祖に對しても重々相濟まない。

金次郎。　みんなおれが惡いからだ。

寅之助。　そこで、お前はどうする。

金次郎。　今さら誰を怨んでも仕方がない。家重代の寶物をうか〳〵持ち出して來たのが、おれの不覺だ。不斷からおれの身持が惡いので、先祖の罰が中つたのだらう。かうなつては、もう世間に顏向けも出來ない。相馬金次郎、百俵取りの小身でも武士の端くれだ。これからもう一度神田明神へ參詣して、身のあやまりを詫びた上で、島居の前で潔よく切腹する覺悟だ。

（長兵衞等は顏をみあはせる。）

寅之助。　むゝ、これはさうなくては成らないところだ。家重代の寶をうしなつて、お前もおめ〳〵と生きてはゐられまい。先祖への申譯、世間への申譯に、尋常に切腹しろ。朋輩のよしみにおれが介錯してやるぞ。

金次郎。　友達のよしみに介錯してくれるか。

寅之助。　併し金次郎。おまへは今、百俵取りの小身でも武士の端くれだと云つたな。武士ならば武

相馬の金さん

士らしく、當のかたきを仕留めた上で、お前も切腹するがいゝではないか。

（人々は又おどろく。）

金次郎。　成程さういふのも尤もだが、それも無益の殺生だ。元の起りはみんなおれが惡いのだから、何事も不運とあきらめて、おれ一人が自滅すればいゝのだ。

寅之助。　いや、お前がおとなしくあきらめても、おれが勘辨出來ない。先づ第一にこの亭主の首を取つて、それを明神の前に供へて、それから切腹するのが武士の法ではないか。

金次郎。　その武士ももう廢つたのだ。

寅之助。　えゝ、意氣地のない奴だ。さあ、おれが證人になつてやるから、立派に相手を成敗しろ。亭主は勿論だが、何奴も這奴もみんな係り合ひだ。（長兵衛等を睨みまはして。）そこらに轉がつてゐる唐茄子野郎も、片つ端からばたゝ斬つてしまへ。

（人々はいよ〳〵驚く。）

金次郎。　まあ、さう云ふなよ。こゝで五人や三人斬つてみた所で、おれの面目が立つといふわけでもない。却つて恥の上塗りだ。

寅之助。　なにが恥の上塗りだ。町人のために身をほろぼし、家を亡ぼされて、たゞ默つてゐられると思ふか。さあ、金次郎。刀をぬけ。えゝ、何をぐづ〳〵してゐるのだ。そんな腑甲斐ない根性だから、こんな大事も出來するのだ。さあ、早く拔け。早く斬れ。

千右衛。　あ、もし、もし、暫くお待ち下さいまし。大切のお刀を紛失させましたのは、わたくし共が重々の不調法、なんともお詫の申上げ樣もございません。併しこゝで相馬の旦那樣が御切腹なされましては、却つてお上に對して申譯のないことになりは致しますまいかと存じられますが……。

寅之助。　えゝ、餘計なことをいふな。貴樣たちに武士のこゝろが判るか。第一、これが世間へきこえたら何うするのだ。

千右衛。　世間へきこえると仰しやつても、これを知つてゐるのはあなた樣ばかり。なんとか御内分にして置いて頂く工夫はございますまいか。

寅之助。　だまれ、默れ。さあ、金次郎。早く斬れ、斬つてしまへ。（じれる。）えゝ、齒がゆい奴だ。貴樣が斬らなければ、おれが斬つてやるぞ。さあ、亭主、そこへ直れ。

（寅之助は刀に手をかけて店へあがらうとするを、金次郎は支へる。）

金次郎。　まあ、はやまるな。待つてくれ、待つてくれ。

相馬の金さん

（寅之助は肯かずに店へ押上らうとするを、長兵衛、富八、久七等も怖々ながらに支へる。）

（二）

青山、長者が丸。上のかたに寄せて、小さい古寺の門。左右は頽れかゝりたる練塀。門前に松の大樹。路ばたには秋草など茂りて、下のかたには田畑がつゞいて見ゆ。すべて今日の青山邊とは全く違ひて、江戸の場末の蕭條たる景色。寺内にて木魚の音。そこらにて蟬の聲もきこゆ。

（下のかたより農家の子供ふたり、一人は竿に附けたる袋を持ち、ひとりは鵜竿を持ちて出で、蟬の聲をたづねながら松の下にあつまる。上のかたより若い僧ひとり出づ。）

子供一。　坊さん。蟬が高いところに止まつてゐて、竿がとゞかないんだ。

子供二。　後生だから捕つておくれよ。

僧。　（迷惑さうに。）ほかの事と違つて、蟬捕りの手傳ひはどうも困る。誰かほかの人に頼むがよからう。（云ひ捨てゝ下のかたへ去る。）

子供一。　意地の悪い坊主だなあ。

子供二。　そんなことを云つてゐるうちに、蟬は逃げてしまつた。

子供一。　仕方がない。ほかへ行かう。

（二人は竿をかついで上のかたへ去る。入れちがひに農家の娘ひとりが手拭をかぶり、大きい風呂敷包みを背負ひ出で、下の方へゆき過ぎる。向ふより相馬金次郎と石澤寅之助が話しながら出づ。）

金次郎。　質屋の奴等も驚きやあがつたな。

寅之助。　なにしろ民谷伊右衛門が二人づれで、辨天小僧を極めたのだから、奴等のおどろくのも無理はねえのさ。

金次郎。　こっちの手妻は向ふでも大抵察してゐたらうが、あゝなつちやあ何うにも動きが取れねえ。おれに十兩、おめへに口どめの五兩、〆めて十五兩で目出たく納まりやあ、向ふも仕合せといふものだ。相手が悪けりやあどんなことになるか判るものか。

寅之助。　（笑ふ。）おれ達よりも悪い相手があるかな。

金次郎。　廣い世間だもの、どんな奴がねえとも限らねえ。おれ達なんぞはまだ〳〵善人の部だよ。

寅之助。　その積りで、もう少し修業を積むかな。それにしても刀箱から蛇を出すとは考へたものだぜ。

相馬の金さん

金次郎。　刀箱から蛇が出るのも不思議はねえ。灰吹からは大蛇が出るといふぢやあねえか。

寅之助。　ちけえねえ。あはゝゝゝ。

金次郎。　はゝゝゝ。

（ふたりは笑ひながら舞臺に來かゝると、寺の門内より常磐津の師匠文字若、廿歳ぐらゐ、寺まゐりに來りし姿にて、日傘を持ちて出づ。）

文字若。　おや、お二人さん。お揃ひですね。

金次郎。　やあ、赤坂の師匠。なんだつてこんな所をうろ付いてゐるのだ。晝日中、狐に化かされたわけでもあるめえ。

文字若。　このお寺へ來たんですよ。

寅之助。　この寺へ來た……。こゝにやあ吉三さんといふお小姓でもゐるのかえ。

文字若。　冗談ぢやあない、こゝはあたしの家のお寺なんですよ。お盆が來るから、ちよいとお參りに……。

寅之助。　やれ、やれ、お若いのに御奇特のことだな。

（このあひだに金次郎は傍を向いて、小判一枚を出す。）

金次郎。　そりやあ全く御奇特のことだ。常磐津の師匠の文字若さんが親の寺參りをしようとは思ひも付かなかつた。御褒美をやるから手を出しねえ。

文字若。　なにをお吳んなさるの。

（不安心らしく手を出せば、金次郎は小判をそつと握らせる。）

文字若。　（びつくりして。）あら、小判ぢやありませんか。なんだか氣味が惡いねえ。

金次郎。　氣味が惡いは御挨拶だ。それはおれと石澤の二人がお盆のおしるしだよ。

文字若。　まあ。（再び小判をながめる。）これこそほんたうに狐に化かされてゐるんぢやないかしら。狐でも狸でも金をくれゝば有難えぢやあねえか。うつかりしてゐないで、禮をいへ。禮を云へ。

文字若。　ほんたうに頂いてもいゝんですか。どうも有難うございます。金さん、この頃は忙がしいんですかえ。

金次郎。　忙がしくもねえが、閑でもねえ。まあ、中ぶらりの所だ。近いうちに遊びに行くから、おつかあにも宜しく云つてくれ。

文字若。　きつと來て下さいよ。おまへさんはこの頃、品川へ凝つて行くといふぢやありませんか。

相馬の金さん

金次郎。うそをつけ。おれはそんな道樂者ぢやあねえ。

文字若。道樂を看板にかけてゐる癖に、隨分勝手なことを云ふねえ。

金次郎。さういふお前こそ浮氣を看板にかけてゐるぢやあねえか。

文字若。あたしがいつ浮氣をしましたえ。

寅之助。おい、おい。往來なかで好加減にしろ。金さんひとりぢやねえ。傍には寅さんといふ立派なお武家様が附いてゐるのを知らねえか。失禮のないうちに早く行け、行け。

文字若。まつぴら御免なさい。どうも子供でございますから。（笑ふ。）それぢやあ寅さんもお近いうちに……。

寅之助。知らねえ、知らねえ。（わきを向く。）

金次郎。（笑ひながら。）なんでもいゝから早くお歸りよ。

文字若。（おなじく笑ひながら。）はい、はい。

（文字若は金次郎に眼で挨拶して、向ふへ去る。）

寅之助。（笑ひながら。）おい、こゝらは畫間でもさびしい所だ。町家のあるところまで送つて遣つちやあどうだね。

金次郎。へん、それほど鈍くもねえ積りだ。

寅之助。自分は鈍くねえ積りでも……。

金次郎。えゝ、よしてくれ。男にかゝはらあ。

（ふたりは笑ひながら上のかたへ行きかゝれば、荷持の男ひとり、長い紺かんばんに木綿の帶をしめて出づ。）

男。（叮嚀に。）皆さん、お暑うございます。

金次郎。やあ、御苦勞。（かんがへて。）あしたはおれの當番だな。

男。左樣でございます。

金次郎。さうすると、いつもの通り、本多さんへ行つてな。毎々御無心ながら、明日もまた社杯を拜借いたしますと頼んで置いてくれ。

男。かしこまりました。どなたも御免ください。（會釋して下のかたへ去る。）

寅之助。いつも〳〵人の物を借りるのも幅が利かねえ。社杯なんぞは一つ拵へて置けばいゝぢやあねえか。

金次郎。おまへは感心に持つてゐるな。

相馬の金さん

寅之助。持つてゐるとも……。社祢はおれたちの商賣道具だ。それがなけりやあ勤めが出來ねえ。

金次郎。なに、誰かのを借りて置けば濟むことだ。かうして懐ろに金を持つてゐても、どうも社祢なんぞをこしらへる氣にやあなれねえ。

寅之助。いゝ心がけのお侍だ。拙者ほと〳〵感心いたしてござるか。あはゝゝゝ。

（下のかたより金次郎の弟半三郎、廿一二歳、講武所風の髪、竹刀と劔術道具をかついで出づ。）

半三郎。兄さん。今お歸りでございますか。石澤さんも御一緒でどこへお出でになりました。

金次郎。なに、ちよいと其處まで行つて來たのよ。

寅之助。けふも講武所か。なか〳〵勉強だな。どうだ、此頃はよつぽど上達したか。

半三郎。まあ、どうにか人並みには働けさうでございます。

寅之助。人なみの働きが出來れば結構だ。（金次郎に。）若い者が汗水を垂らしてヤツトウの稽古をしてゐるのだ。お前の社祢は兎も角も、弟には麻の羽織の一枚もこしらへて遣れよ。可哀さうぢやあねえか。

金次郎。まあ、そんなことは家へ歸つてからのことだ。さあ、早く歸つて、涼みながら一杯遣らうぜ。

寅之助。家で飲むのは詰まらねえぢやあねえか。

金次郎。いや、それは又あとの相談だ。どうでこゝまで引揚げて來たのだから、兎もかくも一度は家へ來いよ。

半三郎。（苦々しさうに。）又御酒でございますか。

金次郎。いくら飲んでも、けふはおまへの袴を剝ぐやうなことはしねえ。この通り懐ろは大丈夫だ。

（金次郎は懐ろを叩いて、寅之助と共に笑ひながら行きかゝる。半三郎は困つた顔をしながら附いてゆく。）

幕

第二幕

（一）

第一幕の翌年、慶應四年四月なかばの夕刻。

相馬の金さん

赤坂、田町、若松といふ小料理屋の前。まん中には短い暖簾をかけたる入口、そのなかは沓脱ぎのこゝろ。上のかたは板塀、その中に小庭のあるこゝろにて、見越しの松など見ゆ。入口にも柳の立木あり。下のかたは出窓にて、内には簾がおろしてあり。家の下のかたには、溜池を隔てゝ山王の山が若葉がくれに見ゆ。

（上のかたには色々の荷物を積みたる荷車を卸して、車力ひとりが休んでゐる。町家の若い者と小僧も一緒に休んでゐる。小僧は風呂敷を脊負ひて、灯の無い弓張提灯を持つてゐる。）

車　力。　これから中野まで行つた日にやあ、夜になつてしまひますぜ。

若い者。　勿論、夜になるのは覺悟の前だ。

車　力。　この頃は日が暮れると物騒ですからね。

若い者。　江戸のまん中にゐると猶物騒だ。ちつとも早く逃げる方が無事だよ。（下のかたを見かへる。）それにしても、おかみさん達は遅いことだな。（小僧に。）お前、引返して見て來い。

小　僧。　あい、あい。

（小僧は引返して行かうとする時、下のかたより町家の女房と娘は荷物をかゝへ、女中は風呂敷づつみを脊負ひ、ぶら提灯を持ちて出づ。）

女　房。　お前さん達はよつほど待つたかえ。

若い者。　あんまり遅いので案じてゐました。

娘。　なにしろこんな荷物をかゝへてゐるので、なか〳〵捗取らないのよ。

女　中。　中野まではまだ隨分遠いのでせうね。

女　房。　ちつとぐらゐ遠くても、まあ我慢して行つておくれよ。辻斬や押込みは毎晩のやうに流行るし、なん時どこで軍が始まるか判らないんだもの。江戸にうか〳〵してゐられるものかね。

車　力。　まつたく困つたものですよ。さあ、日の暮れないうちに早く出かけませう。

若い者。　行きませう、行きませう。

（車力は車をひき出せば、若い者と小僧はあと押しをして上のかたへ去る。）

娘。　暗くなると怖いねえ。

女　房。　それだから早くおいでよ。

（女房、娘、女中も急いで車のあとを追つてゆく。それと入れ違ひに、上のかたより錦切れを附けたる隊長一人が先きに立ちて兵士七八人を引連れ、市中を見廻りの體にて出で來る。兵士は銃を荷

相馬の金さん

つてゐる。隊長は下のかたに來りて、どつちへ行かうかと鳥渡思案したるが、兵士をみかへりて向ふへ行けと指圖し、そのまゝ向ふへ立去る。料理屋の暖簾をくぐりて、相馬金次郎が酒に醉つて出づ。金次郎は當時隱居の身の上なれば、武士ともみえぬ風俗、額に月代を生やして、唐桟の袷に半纏をかされ、何か文句を云つてゐるのを、女中がなだめながら送つて出づ。）

金次郎。　えゝ、人を馬鹿にしやあがるな。まともに勘定を拂へば大切なお客樣だ。なんで無暗に追ひ出しやあがるのだ。

女　中。　追ひ出すといふわけぢやございませんが、何分このごろは物騷でございますから、夜は商賣を休むことに致して居りますので……。

金次郎。　だからよ。まだ本當に日が暮れねえぢやあねえか。

女　中。　それでも今頃から火を落すことに致して居りますので……。

金次郎。　何をつべこべ云やあがるのだ。

（金次郎は女中の横つらを毆り倒す。暖簾のうちより文字若が折詰をさげて出づ。）

文字若。　あれ、金さん。そんな亂暴なことをしちやあいけないぢやあないか。

金次郎。　えゝ、引込んでゐろ。此頃はむしやくしやしてならねえから、せめて自棄酒でも鱈腹のんで遣らうと思へば、もう日が暮れますの何のと云つて、無暗に人を追ひ出しやあがる。料理茶屋は夜が商賣だのに、何だつて日が暮れると休みやあがるのだ。

文字若。　そんな理窟を云つたつて、かういふ御時節だから仕方がないぢやありませんか。

金次郎。　その御時節が癪に障つてならねえ。こんな御時節に誰がしたのだ。田舍侍が泥草鞋を穿いてお江戸のまん中へ乘込んで來やあがつて、錦切れを嵩にきて野方圖もなく威張り散らしやあがるから、こんな不景氣な世の中にもなつて來るのだ。

文字若。　（左右をみかへりながら。）往來でそんな大きい聲をして、人にきこえるといけないからさ。

金次郎。　だれに聞えたつて構ふものか。おれは本當のことを云つてゐるのだ。

文字若。　まあ、いゝと云ふのに……。（女中に。）姐さん、まことに濟みませんでしたね。どうぞ堪忍して遣つてくださいよ。

（文字若は女中にむかひて、こゝはわたしが引受けたと知らせれば、女中は會釋して内に入る。金次郎はだん〳〵に醉がまはりて、柳の木に倚りかゝる。）

文字若。　さあ、おまへさん。早く行きませうよ。（空をみる。）日が暮れるの、暮れないのと押問答をしてゐるうちに、ほんたうに薄暗くなつて來たぢやありませんか。

相馬の金さん

金次郎。　暗くなりやどうするのだ。化物でも出るといふのか。化物は江戸中一杯で、百鬼夜行どころか、このごろは夜も晝も見境ひはありやあしねえ。化物が怖くつて、一日でも生きてゐられるものか。ばか〳〵しい。

文字若。　なんでもいゝからさ。まあ兎もかくも家まで歸つてくださいよ。おつかさんが寂しがつて待つてゐるからさ。（折詰をみせる。）

金次郎。　そんな物はどうでもいゝ。犬にでも遣つてしまへ。

文字若。　だつて、勿體ないぢやありませんか。

金次郎。　なに、勿體ねえことがあるものか。（内をみかへる。）こゝの家もこの頃は急に惡くしやあがつた。一つだつて碌に食へる物はありやしねえ。そんな物をおつかあに遣るのは口よごしだ。犬にやれ、犬に遣れ。（折詰を取らうとする。）

文字若。　あれ、いけないと云ふのに……。

金次郎。　（無理に折詰を取る。）吝なことを云ふな。犬に遣らなけりやあ、そこらの溝へでも捨てゝしまへ。（折詰を持つて、よろ〳〵しながら下のかたを見る。）おゝ、來た、來た。はゝ、こりやあ捨てるより優しだ。

（下のかたより錦切れを附けたる兵士二人出づ。金次郎は進み出て、その前に突つ立つ。）

金次郎。　もし、もし、錦切れの旦那。失禮ながらこれを獻上しませう。（折詰を二人の鼻の先へぶら付かせる。）

兵士甲。　えゝ、無禮なことをするな。

金次郎。　失禮は初めから斷つてゐるぢやあねえか。お前さん方に江戸の料理といふのは何ういふ物だか、一つ喰べさせて上げたいから、獻上しようといふのだ。

兵士乙。　貴樣はよほど醉つてゐるな。

兵士甲。　醉つてゐるから免して置くのだ。重ねて無禮を働くと、助けて置かんぞ。

金次郎。　なんで助けて置かねえのだ。物を遣つた上に殺されてたまるものか。かうなりやあ意地づくだ。さあ、邪が非でもこの料理を貰つてくれ。

文字若。　（はら〳〵しながら。）もし、おまへさん。好加減におしなさいよ。（兵士に。）旦那樣、この通り醉つて居りますから、幾重にも御勘辨をねがひます。

（暖簾のうちより以前の女中と料理番らしい男ふたりが覗いてゐる。）

兵士乙。　醉つてゐる者は介抱して、早く連れて歸れ。

相馬の金さん

文字若。　はい、はい。

兵士甲。　この時節に他愛なく醉つてゐるとは、町人とは云ひながら不心得な奴だな。

金次郎。　（呶鳴る。）おらあ町人ぢやあねえ。

文字若。　（一生懸命に。）まあ、默つておいでなさいよ。

兵士乙。　なに、町人でない。（金次郎を見て笑ふ。）丸腰で半纏をきて、いくら江戸でもそんな侍はあるまい。

金次郎。　ところが、あるから不思議だ。貴様達のやうな田舍者にはわかるめえ。

文字若。　（泣聲になつて。）あれさ、およしと云ふのに……。

兵士甲。　なにが田舍者だ。もう一度云つてみろ。

金次郎。　田舍者だから田舍者だといふのよ。鎭守様のお祭ぢやあこんな旨いものは食へねえ。話の種に江戸のお料理を食つてみろと、おれが親切に云つて遣るのだ。さあ、遣るよ。貰つて行け。

（金次郎は折詰を突き付くれば、兵士は堪えかねて叩き落す。）

金次郎。　えゝ、なにをするのだ。

（金次郎は詰め寄らうとするを、兵士は突き倒し、鐵扇にてその額を打つ。金次郎は飛び起きるを文字若は獅嚙み付いて押へる。暖簾のうちよりも男二人と女中が駈け出して、これも金次郎を抱きすくめる。）

兵士甲。　はゝ、馬鹿な奴め。

兵士乙。　江戸にはこんな奴が多いので困るな。

（兵士二人は笑ひながら上のかたへ立去る。金次郎は跳ね起きてそのあとを追はうとするを、人々はおさへ付けてゐる。）

男　一。　この節がら錦切れなんぞに係り合ふと、飛んだ目に逢ひます。

男　二。　およしなさい、およしなさい。

文字若。　それだから、云はないことぢやあない。あら、額から……。

（文字若は紙を出して、金次郎の額の血をふいてやる。金次郎もやうやく鎭まりて、紙にしみたる血の色をぢつと見る。）

女　中。　なにか血どめのお藥を持つてまゐりませうか。

金次郎。　いゝよ、いゝよ。大したことはねえ、もうおとなしくするから、みんなあつちへ行つて呉

相馬の金さん

んねえ。

文字若。　たび〳〵お騒がせ申して、お氣の毒ですね。

女　中。　ぢやあ、お靜かに……。

（女中と男共は内に入る。）

文字若。　おまへさん。痛くはないかえ。

金次郎。　なに、それほどに痛くもねえが……。（かんがへて。）おい、師匠。後生だから幾らか都合してくれねえか。

文字若。　どのくらゐさ。

金次郎。　さあ、一兩でも、二兩でも、三兩でも……。まあ、幾らでもいゝや。

文字若。　此頃はどこの質屋も休み同様だから、あんまり無理を肯いてもくれまいが、頭の物や他所行きを持ち込んだら、ちつとは融通してくれるかも知れない。さうして、そのお金をどうするの。

金次郎。　どうするか、それはあとで云つて聞かせるから、その金の都合が出來たら、すぐにおれの家へとゞけてくれ。

文字若。　あたしの家へ一緒に來るんぢやあないの。

金次郎。　むゝ、これから眞直に歸ることにするから、屹と賴むぜ。

文字若。　なんだか可笑しいわね。なぜ眞直に家へ歸るの。

金次郎。　まあ、兎も角もおれの云ふ通りにしてくれ。金の一件はなるたけ早いがいゝな。

文字若。　（不審ながら。）あゝ、承知しました。お金の出來次第、すぐに屆けに行きますよ。

金次郎。　早く行け、早く行け。

文字若。　あいよ。

（文字若は足早に下のかたへ去る。それを見送りて、金次郎は上のかたへ行かうとする時、上のかたより中間一人が酒に醉ひて出で、金次郎と摺れちがひてゆく。）

中　間。　また降りさうになつて來たか。空までが公方様のやうに泣きつ面をしてるやあがる。あゝ、いやさ。はゝゝゝ。

（中間はよろけながら向ふへ去る。金次郎は立ちどまりて耳をかたむけ、やがて足早に上のかたへ去る。）

相馬の金さん

（二）

青山、長者が丸。相馬金次郎の家。武士の屋敷とは名ばかりにて、殆ど空家かと思はれるほどに住み荒らしたる體。正面の床の間には掛物もなく、壁の破れたのが見えるばかりといふ有様。奥へ出入りの襖も無論に破れてゐる。他は推して知るべし。それでも下のかたには式臺附きの玄關あり。門は二本の丸太を立てたるばかりにて、左右には疎らなる竹垣が頽れかゝり、そこには卯の花が咲いてゐる。庭も荒れ果てゝ、上のかたには竹藪、ほかに樹木や雜草も繁つてゐる。家の外には田畑がつゞいて見ゆ。

（第一場と同じ日の宵。内には薄暗い行燈をとぼし、相馬半三郎は縁先で蚊いぶしを煽いでゐる。遠く題目太鼓の音、蛙の聲きこゆ。下の方より石澤寅之助は小倉の袴をはきて大小をさし、覆面用の黒い巾を持ちて出づ。）

寅之助。（案内も無しに庭口へ通る。）やあ、蚊いぶしか。毎年のことだが、藪蚊には泣かされるな。

半三郎。今年は閏があつたので、取分けて早いやうです。

寅之助。（縁に腰をかける。）なにしろこゝらは寺と畑と竹藪に取りまかれてゐるのだから、蚊の棲家だか人間の棲家だか判つたものぢやあねえ。よくも先祖以來こんなところに住んでゐられたものだ。

半三郎。それでも先祖代々住み馴れた組屋敷だと思ふと、やつぱり離れる氣にはなれないものですね。

寅之助。離れたくないと云つても、どうで長くはゐられめえ。今度はちつと場所を擇んで、藪つ蚊や蛇の出ねえ村に住むことだ。

半三郎。長くはこゝにゐられますまいか。

寅之助。朝臣にでもなつたら格別だが、さうでなけりや遲かれ早かれ追つ拂ひを食ふだらう。安政の地震よりもどえらい大地震がゆり出して、德川の大家臺が一堪りも無しにぶつ潰されてしまつたのだから、その庇の下に住んでゐたおれ達が路頭に迷ふのは當り前さ。

半三郎。殘念なことですね。

寅之助。今さら愚痴を云つても始まらねえ。おたがひに今までは、たとひ小身でも百俵といふ先祖代々の祿が附いてゐたから、貧乏ながらも頤の干上る苦勞はなかつたが、もうこれからは相馬の金さん

俄浪人でうか〳〵しちやあるられねえ。

半三郎。　こつちの組には朝臣になつた人もあるさうですね。

寅之助。　あるさうだどころぢやあねえ。半分ぐらゐは朝臣になつたやうだ。朝臣になれば家屋敷は勿論、家祿も今まで通りに貰れるさうだから、おとなしく降參して朝臣になるのが悧口かも知れねえが、それもあんまり意氣地がねえ。（上の方を指さす。）現に隣の山口も朝臣になつたと云ふぢやあねえか。

半三郎。　（苦々しげに。）さうですか。隣にゐながら些とも知りませんでした。

寅之助。　流石に世間の手前もあるから、なるべく内所にしてゐるのだらう。と云つて、われ〳〵のやうに、脫走も出來ず、朝臣にもならず、唯いつまでも恭順で小さくなつてゐるのでは、差當り食ふことが出來めえぢやあねえか。そこで少し相談に來たのだが、今夜も兄きは留守かえ。

半三郎。　ゆうべから出たぎりで歸つて來ないので、わたしも内々案じてゐるのですが……。

寅之助。　兄きには赤坂の師匠が附いてゐるから、この御時節に悠々と、長火鉢の前にでも脂下つてゐるのだらう。まことに天下泰平のことだ。かうなると情婦のひとりも拵へて置かねえ奴は慘めだな。（少しかんがへる。）それぢやあ今夜も歸るかどうだか判らねえ。おい、半さん。兄きの名代に、おめえ少し手傳つてくれねえか。

半三郎。　どんなお手傳ひを致すのです。

寅之助。　さう眞面目に聞かれると返事に困るが……。實はこれだ、これだ。

半三郎。　（寅之助は覆面を見せ、刀の柄を叩いて見せる。）

寅之助。　（首をかしげる。）それがどうしたと云ふのです。

半三郎。　兄きとは大違ひで、ふだんから野暮堅え男だから、かういふ時には早わかりがしねえで困るな。先づかういふ風にして……。（覆面をして、腕捲りをしてみせる。）金のありさうな町人の家へ押込むのだ。

寅之助。　え、町人の家へ押込む……。强盜に這入るのですか。

半三郎。　人の家へ押込むにやあ限らねえ。途中でも金のありさうな奴をみつけたら、取つ捉まへて嚇しつけるのよ。

寅之助。　（驚きと怒りを取りまぜて。）飛んでもないことを……。

半三郎。　なにが飛んでもねえ。斬取り强盜は武士の習と云ふぢやあねえか。

半三郎。いゝえ、いゝえ、斬取り強盗などは武士にあるまじきことです。まして此の御時節に左様な不埒を働きましては、恭順の御趣意に背くではありませんか。

寅之助。いや、この御時節だから斬取り強盗もしなけりやあならねえ。今もいふ通り、家代々の祿に離れては、おたがひに食ふことが出來ねえぢやあねえか。さあ、惡いことは云はねえから、おれと一緒に來てくれ。さすがに面をむき出しぢやあ拙いから、手拭か風呂敷でおれのやうに覆面をするのだ。

半三郎。（腹立たしげに。）そんなことは出來ません。

寅之助。出來ねえことがあるものか。軍用金を出せとか何とか、凄味の臺詞はおれが好いやうに列べ立てるから、おめえは唯默つてだんぴらを引つこ抜いて、おどしに振りまはして見せればいゝのだ。

（半三郎はだまつてゐる。）

寅之助。うまく行けば一と晩に五十兩や百兩はなんでもねえ。それで當分は寢て暮すのよ。こんな酒落れたことはねえぢやあねえか。

半三郎。なんでもお前さん一人で勝手にお遣りなさい。そんな仲間入りは眞平御免です。

寅之助。どうしても忌かえ。

半三郎。知れ切つたことです。

寅之助。（舌打ちして。）どうも話せねえ男だな。ぢやあ、又出直して來るとしようか。

（寅之助は下の方へ立去る。半三郎は返事もせずに顏をそむけてゐたるが、やがて起つてあとを見送る。）

半三郎。ほんたうに呆れた男だな。いくら兄さんだつて、まさかにそんな仲間入りはしないだらう。

（半三郎は再び蚊いぶしを煽ぐ。蛙の聲、題目太鼓の音、さびしく聞ゆ。向ふより相馬金次郎は貧乏德利をさげて足早に出づ。）

金次郎。（空を見る。）なんだかぽろついて來やあがつた。今年はどうも雨が多いな。（云ひながら内に入る。）

半三郎。お歸りなさいまし。

金次郎。また蚊いぶしか。日が暮れると、毎晩それが一と仕事だつたが、もうこれで年明きだらう。

半三郎。そこらで石澤さんに逢ひませんでしたか。

相馬の金さん

金次郎。　いや、逢はなかつた。あいつにも四五日逢はねえが、どうしてゐるかな。

半三郎。　（兄の顔を見て。）おや、兄さんは顔をどうなすつた。

金次郎。　（額をおさへる。）錦切れの奴等がなぐりやあがつた。

半三郎。　喧嘩でもなすつたのですか。

金次郎。　喧嘩といふほどでもねえ、ちよいと戯つて遣つたのよ。おい、茶碗を持つて來てくれ。

半三郎。　はい、はい。

（半三郎は奥に入りて、茶碗を盆に乗せて來る。）

金次郎。　（手酌で一杯のむ。）そこで、半三郎。今夜のうちに仕度をして、おれと一緒に行け。

半三郎。　え。では、あなたも石澤さんと同じやうに……。

金次郎。　石澤がどうした。

半三郎。　兄さん、そればかりはわたくしが堅く御意見申します。家代々の祿に離れて、たとひ浪々いたしましても……。

金次郎。　なんだ、なんだ。なにを判らねえことを云ふのだ。

半三郎。　いゝえ、判らないことはありません。斬取り強盜は武士の習などとは飛んでもないことです。

金次郎。　えゝ、おれの云ふことをよくも聞かねえで、何を云つてゐやあがるのだ。おれがいつ斬取り強盜をすると云つた。おれの云ふのはそんなことぢやあねえ。おまへと一緒に上野へ行くのだ。

半三郎。　上野へ……。（意外らしく兄の顔をみつめる。）あの彰義隊へ這入るのでございますか。

金次郎。　さうだ。さうだ。

半三郎。　兄さんはほんたうに上野へお出でになりますか。

金次郎。　本當よ。なぜ不思議さうにおれの面をながめてゐるのだ。おれは醉つて云ふのぢやあねえ。本氣で云つてゐるのだ。

（金次郎は重ねて飲む。半三郎はかんがへてゐる。）

金次郎。　上野へ行くのは忌かよ。

半三郎。　いえ、行きたいのは山々ですが……。

金次郎。　それだから一緒に行けといふのだ。

半三郎。　さあ。（まだ考へてゐる。）

相馬の金さん

金次郎。（あざ笑ふ。）命が惜しいか。

半三郎。（屹となつて。）いえ、命が惜いなどとは思ひません。併し公方様は飽までも恭順の思召で、家來一統にも恭順を守るやうにと堅く申渡されて居ります。この場合みだりに立騒ぐものは、主人のからだに刃をあてるも同様だとも仰せられました。

金次郎。（又飲む。）それがどうした。

半三郎。われ〳〵家來の分として、善悪ともに御主君の仰せを守らなければなりません。御主君が戦へとおつしやれば、何時でも戦ひます。上野に楯籠れとおつしやれば、何時でも參ります。しかし御主君が恭順せよと仰せ出されてゐる場合に、われ〳〵が勝手に徒黨を組んで、上野のお山に楯籠るなどとは、甚だおだやかならぬ事と存じられます。兄さんは誰に誘はれて、俄に彰義隊へ這入ることになさいました。

金次郎。だれに誘はれたわけでもねえ、自分ひとりで思ひ立つたのだ。おまへは二口目には御主君といふが、その御主君はどこにゐるのだよ。

半三郎。あらためて申すまでもなく、一旦は上野の大慈院に御逼息あそばされましたが、當月十一日、更に水戸へ御立退きに相成りました。

金次郎。それ見ろ。おれたちの主人といふ公方様は家來どもを置去りにして、自分ひとりで逃げて行つてしまつたぢやあねえか。そんな主人にいつまでも忠義立てをするのは馬鹿の骨頂だ。天下茶屋の芝居ぢやあねえが、もう斯うなりやあ主でねえ、家來でねえ、一本立の安達元右衛門様だ。恭順を守らうが守るめえが俺達の勝手次第で、だれの指圖を受けることもねえ筈だ。

半三郎。でも、兄さん……。

金次郎。えゝ、だまつて聞け。おれがこれから上野へ駈け込まうといふのは、主人の爲でもねえ、忠義のためでもねえ、この金さんの腹の蟲が納まらねえからだ。田舍侍が錦切れを嵩にきて、大手をふつてお江戸のまん中へ乘込んで來やあがつて、わが物顔にのさばり返つてゐる。それぢやあ江戸つ子が納まらねえ、第一にこの金さんが納まらねえ。べらぼうめ、錦切れが何だ。錦切れが怖くつて、五月人形をひやかしに行かれるか。おれは去年神田の質屋へ行つて、蛇を種にして十兩まき上げて來た一件から、役向きの方もたうとう不首尾になつて、まだ若えくせに隱居を申付けられ、弟のおまへが家督を相續することになつた。隱居といへば隱れた身分だから、引込んで小さくなつてゐればいゝやうなものだが、江戸相馬の金さん

つ子の面を泥草鞋で踏みにじられちやあ、隱居のおれでも我慢は出來ねえ。相馬の金さんはヂヤキ〳〵の江戸つ子だぞ。

半三郎。　では、御主君の仰せに背いても、あなたは上野へ行くと仰しやるのですか。

金次郎。　まだわからねえか。おれ達にはもう御主君なんて云ふものはねえといふのに……。江戸つ子のおれたちが田舍者を相手に喧嘩をする、唯それだけのことよ。

半三郎。　それでは却つて御主君に不忠となりはしますまいか。

金次郎。　いつまで同じことを云つてゐやあがるのだ。（じれて呶鳴る。）忌なら止せ、勝手にしやがれ。江戸つ子の面汚しめ。

（金次郎は手酌でぐい〳〵飲んでゐる。半三郎は又かんがへてゐる。薄く雨の音。向ふより常磐津文字若は雨傘を半開きにして足早やに出づ。）

文字若。　（内に入る。）たうとう降り出しましたね。

（金次郎はだまつて飲んでゐる。）

文字若。　あら、みんなだんまりでどうかしたんですかえ。

金次郎。　だれだ、誰だ。（透し視る。）おゝ、師匠か。大層早かつたな。

文字若。　だつて、なるたけ早く屆けてくれと云ふから、大急ぎで駈け付けて來ましたのさ。貞女といふのはまあこんなものさね。（笑ひながら緣に上る。）半さん、今晩は……。

金次郎。　そんな奴に口をきくなよ。まあ、息つぎに一杯のめ。（茶碗をさす。）

文字若。　これで飲むのかえ。

金次郎。　亭主のいふことを肯くのが貞女だ。飲め、飲め。

文字若。　いくら貞女でも茶碗ぢやあ遣切れない。小さいお猪口はないのかえ。

金次郎。　いくぢのねえ女だな。おい、半三郎。猪口を持つて來い

（半三郎は無言で奥へ入る。）

文字若。　おまへさん。兄弟喧嘩でもしたんぢやあないかえ。あんなおとなしい人をいぢめるのはお止しなさいよ。

金次郎。　あんな馬鹿野郎を相手に、喧嘩をする張合もねえや。（奥に向ひて。）やい、やい、早く持つて來い。何をぐづ〳〵してゐやあがるのだ。

文字若。　およしなさいよ。可哀さうぢやありませんか。（金次郎の顏をみて。）おまへさん、額の傷はもう好いんですかえ。

金次郎。　なに、もう何でもねえ。（額をなでる。）飛んだ仁木彈正だ。

（奥より半三郎は猪口を持つて出で、文字若の前に置く。）

文字若。　どうも憚りさま。

金次郎。　そこで早速だが、金の工面は出來たか。

文字若。　御時節柄だから、どこでもなか〳〵無理をきいてくれないのさ。やう〳〵のことで二兩と一分、それでまあ我慢しておくんなさいよ。

金次郎。　いや、大出來、大出來。それだけありやあ大願成就だ。

文字若。　それにしても、そのお金を一體どうするのさ。その入り道を聞かないうちは、うつかり渡すことは出來ませんよ。

金次郎。　そりやあ聞かねえでも話さなけりやあならねえ。さあ、注いでやるよ。

（文字若は猪口を取れば、金次郎は酌をしてやる。蛙の聲。）

金次郎。　それが別れの杯だ。ぐつと飲んでくれ。

文字若。　別れのさかづき……。（笑ひ出す。）あたしは手切れのお金を持つて來たんぢやありませんよ。

金次郎。　いや、冗談ぢやあねえ。本當にわかれの杯だと思つてくれ。おれは今夜のうちに仕度をして、上野の彰義隊へ這入るのだ。

文字若。　（びつくりして。）お前さん、本氣で云ふのかえ。

金次郎。　むゝ、本氣だ、本氣だ。こんな自墮落な人間でも、相馬の金さんは江戸つ子だ。いつまで小さくなつて恭順してゐられるわけのものぢやあねえ。

文字若。　彰義隊なんぞへ這入つて勝てるかしら。

金次郎。　勝つか負けるか判らねえが、先づ十に九つはむづかしいな。

文字若。　そんな危ないところへ飛び込むことは無いぢやありませんか。誰から御褒美をくれるわけでも無し、負ければ死に損、こんな詰らないことはないと思つてゐるのに、お前さんもその仲間入りをする氣かえ。

金次郎。　そりやあお前のいふ通り、いくら働いたところで誰から褒美をくれると云ふ譯でも無し、負ければ死に損、こんな割に合はねえ話はねえ。それは萬々わかつてゐるが、おれの性分でもう我慢が出來ねえから、今さら未練らしく止めてくれるな。おまへに都合して貰つた二兩一分の金で、質でも受け出して身拵へをして、上野の山へ楯籠るのだ。

相馬の金さん

文字若。半さんも一緒ですかえ。

（金次郎はだまつてゐる。）

文字若。（向き直る。）もし、半さん。おまへさんも一緒に行くんでせうね。

（半三郎もだまつて考へてゐる。）

文字若。ぢやあ、おまへさんは行かないんですかえ。ねえ、半さん。はつきりと返事をして下さいよ。兄さんと違つて、お前さんは不斷から講武所で勉強して、劍術が大變によく出來ると云ふのに、そのお前さんが小さくなつてゐて、兄さんが彰義隊へ行くんぢやあ、まるであべこべぢやありませんか。

半三郎。（顏を上げる。）まつたくあべこべかも知れません。ふだんは武士の道を說いて、兄の放蕩を意見してゐたわたしが、この場合に引込んでゐて、兄が彰義隊の仲間入りをする……。どつちが好いのか、惡いのか、わたしにも判らなくなつて來ました。

金次郎。おい、師匠。そんな奴にはかまはねえで、早く金を渡してくれ。このなりぢやあ軍は出來ねえ。第一に幅が利かねえから、すぐに質屋へかけ付けて、色々の物をうけ出して來るのだ。昔ならば忍びの緒を切つて、兜に名香を焚かうといふ所だ。

文字若。どうしてもお前さんは行くのかえ。

金次郎。だれが何と云つても、もういけねえ。さあ、早く金をくれと云ふのに……。

文字若。（仕方なしに金を出す。）かうと知つたら、お金の工面なんぞして來るんぢやあなかつたねえ。

金次郎。（紙につゝみし金をあけて見る。）むゝ、二兩と一分……。ありがてえ、ありがてえ。これで金さんの死花が咲くといふものだ。

文字若。あゝ、こんな貞女にやあなりたくないねえ。（ほろりとする。）

金次郎。お前、泣くのか。

文字若。涙も出るぢやありませんか。（眼をふいて。）ぢやあ、もう、あたしも覺悟しましたから、一生のお別れに、思ひ切つて大きいもので飲ませて下さいよ。

金次郎。ぢやあ、これを遣らう。（茶碗を出す。）

文字若。ちよいと待つて……。

（文字若は起つて、行燈をそばへ持ち來り、かんざしで燈心をかき立てる。）

文字若。おまへさん、よく顏をみせて下さいよ。

相馬の金さん

金次郎。　え、、芝居のやうなことを云ふなよ。飛んだ三の切だ。
（金次郎は茶碗を文字若にわたして、酌をしてやる。薄く雨の音、蛙の聲。文字若は飲み終りて金次郎に茶碗を戻し、酌をしてやる。）

金次郎。　（酒をのみながら。）おつかあを大事にしろよ。

文字若。　おまへさんが彰義隊へ這入るなんて、まるで夢のやうな話だから、阿母さんもさぞびつくりするだらうねえ。

金次郎。　（茶碗を下に置いて。）さあ、夜の更けねえうちに、早く質屋を叩き起して來なけりやあならねえ。（起ちあがる。）

半三郎。　（俄に進み出る。）兄さん。わたしも一緒にお連れ下さい。

金次郎。　おれは質屋へ行くのだよ。

半三郎。　その質屋へ一緒にまゐつて、わたしの物も少し受出して頂きたいのです。

金次郎。　この野郎、蟲の好いことをいふな。貴樣の物なんぞを受けて遣るやうな金ぢやあねえ。

半三郎。　いえ、質屋ばかりではありません。上野へも一緒にまゐります。

文字若。　おまへさんも彰義隊へ這入るのかえ。

半三郎。　もう斯うなつたら理窟を云つてはゐられません。わたしも兄さんに附いて行つて、死ぬときには一緒に死にます。

金次郎。　むゝ。判つた、わかつた。（文字若をかへりみて笑ふ。）おい、師匠。這奴もやつぱり江戸つ子だ。

文字若。　ほんたうに頼もしいねえ。（半三郎のそばに摺りよる。）おまへさん、なるたけ兄さんのそばに附いてゐて、世話をして遣つてくださいよ。

半三郎。　それは確に引受けました。

金次郎。　ぢやあ、行かう。（縁を降りかゝる。）

文字若。　（縁に出て空をみる。）まだ少し降つてゐるやうだ。そこにあたしの傘がありますよ。

金次郎。　それほどのことはあるめえ。

文字若。　まあ、持つておいでなさいよ。（傘を把つて渡す。）

（金次郎は傘をうけ取り、半三郎もそのあとに附いて出ようとする時、下のかたより石澤寅之助再び出づ。）

寅之助。　（出逢ひがしらに。）おい。兄弟揃つてどこへ行く。

相馬の金さん

金次郎。　やあ、いゝ所へ來た。（寅之助の腕をつかむ。）おい、おれ達と一緒に行かねえか。

寅之助。　どこへ行くのだ。

金次郎。　これから仕度をして上野へ駈け込むのよ。

寅之助。　上野へ駈け込む……。

金次郎。　彰義隊よ。

寅之助。　（意外らしく。）むゝ、彰義隊か。そいつは少し考へなけりやあならねえ。

金次郎。　おれの歸るまでに考へて置いてくれ。

（金次郎はつかみし手を放し、傘をさして向ふへ行きかゝる。半三郎も續いてゆく。寅之助は不思議さうにあとを見送る。文字若も緣に立つて見送る。雨の音、蛙の聲。）

――幕――

第三幕

（一）

おなじく五月十五日の朝。

赤坂、新町、常磐津文字若の家。正面の上のかたに緣喜棚。その下は地袋。まん中には奥へ出入りの葭戸二枚。つゞいて茶壁。それに三味線がかけてあり。上のかたは竹窓、下の方は格子戸にて御神燈がかけてあり。表は町家つゞきにて、隣の家の横手が見える。雨の音きこゆ。

（内には文字若の母おとくが稽古の娘およしと、稽古用の本箱を挾んで向ひ合つてゐる。おとくは三味線を前に置き、およしは彈き語りにて小夜衣千太郎の道行を唄つてゐる。）

およし。　（唄ふ。）――ぬるゝ裳の露ならで、こゝろ置く身は雨空に、みだれて渡る雁さへも、もし追手かと驚かれ、ふるふ足もと音を忍ぶ、秋の蛙の聲かれて、田川の水のあさき緣、死ぬる覺悟も癪ゆゑに、あゆみ兼ねてぞ立ちやすらひ――

相馬の金さん

（この淨瑠璃のうちに、下のかたより文字若は湯歸りの體にて、手拭や糠袋などを持ち、傘をさして足早に出づ。）

文字若。（あわたゞしく内に入る。）阿母さん、大變だよ。

おとく。なんだねえ、さうゞしい。おまへの留守におよつちやんが來たから、小夜衣千太郎を浚はせてゐるんだよ。

文字若。小夜衣千太郎どころぢやない。阿母さん、お聽きよ。上野でいよ〳〵軍が始まるとさ。

おとく。上野で……。いよ〳〵軍が始まるのかえ。

文字若。官軍の方ぢやあ夜の明けないうちから繰り出して、下谷と本郷から攻めるんだとさ。酒屋の松さんが見て來たといふので、そこらでもみんなが騒いでゐるのよ。

おとく。成程そりやあ大變だ。それぢやあお稽古どころぢやない。およつちやんも早くお歸りなさいよ。

およし。ぢやあ、御めんなさい。左樣なら。

おとく。（およしは三味線を片附けて、早々に歸つてゆく。）（表をみる。）上野あたりの軍なら、まさかにこゝらが何うなると云ふこともあるまいけれども、さあと云つちやあ間に合はないから、今のうちに些つと荷ごしらへでもして置かうかねえ。

文字若。（文字若はだまつて考へてゐる。おとくは引返して文字若のそばに來る。）

おとく。（小聲で。）ねえ、お前。金さんが彰義隊に這入つてゐるなんて云ふことを、誰にも話しやあしまいね。

文字若。そんなことを誰にいふものかね。

おとく。若しもそれが官軍の耳にでも這入ると、あたし達もどんな係り合ひになるかも知れないから、内所にして置かないといけないよ。

文字若。おつかさん。濟まないけれど、清婦湯を煎じて頂戴な。（額をおさへる。）

おとく。また頭痛がするのかえ。そんなときに朝湯に這入らなければいゝのにさ。今すぐに煎じてあげるよ。

（おとくは奥に入る。文字若は額をおさへて俯向いてゐる。雨の音。小銃の音遠く聞ゆ。）

文字若。（額をあげる。）あ、始まつたよ。

（文字若は俄に起つて門口に出る。小銃の音。向ふより近所の若い者三人、あるひは菅笠をかぶり、相馬の金さん

文字若。　或は頭から桐油をかぶり、跣足又は草鞋ばきにて走り出て、下のかたへ行きかゝる。）

若者甲。　（呼ぶ。）ちよいと、鐵砲の音がきこえるやうですねえ。

若者乙。　むゝ、戰爭だ、戰爭だ。

文字若。　どうせ上野までは行かれまいが、行かれるところまで行つてみる積りさ。

若者丙。　一緒に連れて行つてくれないかねえ。

若者甲。　冗談云つちやあいけねえ。女なんぞにうつかり行かれるものか。

若者乙。　おまけにこんなに雨が降るぢやあねえか。歸つて來て話して聞かせるよ。

文字若。　さあ、行かう、行かう。

（三人は下のかたへ走り去る。雨の音いよ〳〵強くなる。）

（空をみる。）あゝ、あひにくに雨が強くなつて來たねえ。

（向ふより石澤寅之助は町人の姿、頬かむり、尻端折り、はだしにて、番傘をさして急ぎ出で、あとを見かへりながら格子の前に來る。）

寅之助。　師匠。よく降るな。

文字若。　おゝ、石澤さんですか。

（寅之助は頬かむりを取り、からだや足を拭きながら内に入る。文字若も引返して入る。）

文字若。　いくさが始まつたさうですね。

寅之助。　到頭ぽん〳〵撃ち出したやうだ。（表をみかへる。）おい、師匠。ちよいと奥を貸してくれ。誰が來ても、おれはゐないと云ふのだぜ。いゝかえ。

兵士甲。　（云ひすてゝ寅之助は早々に奥に入る。文字若は不安らしく見送る。雨の音、小銃の音。向ふより市中見廻りの兵士二人出で、あたりを見まはしながら格子をあける。）

兵士乙。　これ、これ。

文字若。　はい、はい。（出る。）

兵士甲。　今この家へ町人風の男が入り込みはしなかつたか。

文字若。　いゝえ。

兵士乙。　本當に來なかつたか。

文字若。　だれも參りません。

兵士甲。　（御神燈をみて。）おまへは遊藝の師匠か。

文字若。　はい。常磐津の師匠をいたして居ります。

相馬の金さん

兵士乙。（甲と顔をみあはせる。）それではほかを探してみようか。

（兵士二人はそのまゝ下のかたへ立去る。文字若は門口から見送る。奥より寅之助は文字若の着物を羽織りて窺ひ出づ。）

寅之助。師匠、これだ。（片手で拜む眞似をする。）助かつた。助かつた。

文字若。あなた、どうしたんですよ。

寅之助。此頃のどさくさ紛れに、ちつと荒つぽい仕事を遣つたので、市中見まはりの奴等に眼を附けられて、油斷をしちやあるられなくなつた。

文字若。ぢやあ、何か惡いことでもしたんですかえ。

寅之助。むゝ。あんまり好い事もしなかつたのよ。町人の店を四五軒あらして、往來の奴を五六人おどかしたが、一昨日の晩は新町の酒屋へ押込んで、亭主と番頭を斬つたので、それから詮議が急にきびしくなつて來たらしい。もう斯うなつちやあ仕方がねえ。いつそ上野へでも駈け込まうかと思つてゐると、到頭いくさが始まつてしまつた。

文字若。ねえ、石澤さん。金さんの兄弟は今頃どうしてゐるでせうねえ。

寅之助。まさかに逃げも隱れもしめえ。今ごろは一生懸命に働いてゐるだらうよ。

文字若。さうでせうねえ。（又起つて表をみる。）金さんは劍術は出來ないんでせう。

寅之助。そりやあ侍のことだから、刀の持ち樣ぐらゐは知つてゐるが、あの通りの人間だから勿論上手の方ぢやあねえ。

文字若。劍術なんぞは下手でも構はない。おれは江戸つ子の魂で闘ふのだと云つてゐましたが、いくら江戸つ子でも劍術が下手ぢやあ駄目でせうねえ。

寅之助。この節の戰ひは鐵砲といふものもあるから、劍術の出來るばかりが能でもねえが……。その鐵砲の擊ち方もよくは知るめえな。

文字若。あなたは劍術が出來るんでせう。

寅之助。おれも出來る方ぢやあねえ。まあ金公に些と優しぐらゐのところだ。ちつとぐらゐ優しでも、かういふ時には大變に力になるでせう。（考へながら寅之助のそばに戻る。）ねえ、石澤さん。あなた、後生ですからあたしも連れて行つてくださいな。

寅之助。連れて行つてくれ。（文字若の顔をぢつと見る。）よもや上野へ行く積りぢやあるめえな。

文字若。いゝえ、上野へ行くんですよ。さつきから見物に行く人があるぢやありませんか。

寅之助。物ずきの奴は出かけるやうだが、男は格別、女の行かれる場所ぢやあねえ。芝居の立廻り相馬の金さん

とは譯が違つて、眞劍勝負の斬合ひだ。おまけに鐵砲は飛んで來る。どんな傍杖を食はねえとも限らねえ。

文字若。　そりやあ、あたしだつて知つてゐますけれど、なんだか行つて見たくつてならないんですよ。

寅之助。　そんなにも行つて見てえか。情があるな。

文字若。　情の有る無しは別として、どうもぢつとしてゐられないやうな氣がするんですよ。

寅之助。　行つたところで、逢へやあしめえぜ。

文字若。　大かた逢へないだらうとは思つてゐますけれど、なんだか其近所まで行つてみたいんですよ。

寅之助。　おれも體の置き場に困つちやあゐるが……。（かんがへる。）軍をみかけて飛び込むのは、ちつと氣がねえな。

文字若。　あなたは男のくせに弱いのねえ。

（奥よりおとくは藥茶碗を盆にのせて出づ。）

おとく。　さあ、お藥が出來たよ。

文字若。　どうも有難う。（茶碗をうけ取りて飲む。）

おとく。　（寅之助に。）どうもおさうぐ〳〵しいことでございますね。

寅之助。　（寅之助はだまつて考へてゐる。小銃の音又きこゆ。）

おとく。　（門口に出る。）鐵砲の音がだん〳〵烈しくなるやうですね。こゝらは大丈夫でせうか。

寅之助。　こゝらは大丈夫だらうが……。（これも起つて表をのぞく。）おゝ降る、降る。雨のふる方が彰義隊には都合がよからう。この軍が夜まで續くと、面白いことになるかも知れねえな。

おとく。　どうして面白くなるのでございます。

寅之助。　暗くなればどんな彌次馬が飛び出さねえとも限らねえ。さうなると、寄手もちつと難儀だらう。

おとく。　さうでせうかねえ。

寅之助。　（俄に下のかたを見る。）あ、又來やあがつた。おい、おつかあ。おれのゐる事をしやべつちやあいけねえぜ。

（寅之助は再び奥に隱れる。おとくはきよと〳〵してゐる。下のかたより以前の兵士二人が先に立ち、あとより更に二人附添ひて出づ。）

相馬の金さん

兵士甲。　どうもこゝらへ逃げ込んだらしいが……。

兵士乙。　もう一度、こゝの家を詮議してみようか。

兵士甲。　遊藝の師匠のうちに隱れてゐることもあるまい。はて、どこへ行つたかな。

（四人はあたりを見まはしながら向ふへ立去る。おとくと文字若は内より窺つてゐる。）

おとく。　ねえ、あの人たちは石澤さんを探してゐるんぢやあないかね。

文字若。　あれ、靜かにおしなさいよ。

（奥より寅之助は葭戸をほそ目にあけて窺ふ。）

寅之助。　（小聲で。）もう大丈夫ですよ。（あつちへ行つてしまつたと手眞似で知らせる。）

文字若。　（出る。）これぢやあいよ〳〵油斷は出來ねえ。おれも逃げ道を考へなければならねえな。

寅之助。　（寅之助は不安らしく表をのぞく。雨の音にまじりて小銃の音いよ〳〵烈しく聞ゆ。これにて幕をおろし、すぐに再び幕をあける。）

（二）

おなじ日の午後。雨降りしきる。

根岸、御行の松のほとり。上のかたに不動堂。それにつゞいて御行の松の大樹、その幹には注連を張る。上のかたには上野の森近く、青葉がくれに火の手あがりて見ゆ。

（上野の僧二人と小坊主一人、あるひは荷物を抱へ、或は經卷をかゝへて、素足に草鞋をはき、笠をかぶりて出づ。）

僧　一。　どう辛抱しようにも、あの火の粉ではとても堪らぬ。

僧　二。　吉祥閣が燒かれたので、それからそれへと火になつてしまつた。

小坊主。　これからどこへ行くのでござります。

僧　一。　どこへ行くといふ的もないが、兎もかくも北の方角へ立退くとしよう。

僧　二。　われ〳〵は出家ぢや。誰に逢つても咎められることはあるまい。

僧　一。　（空を見る。）あひにくに強く降ることぢやな。

（三人は急いで下のかたへ立去る。雨の音、小銃の音。上のかたより相馬半三郎はうしろ鉢卷、筒袖に擊劍の胴をつけて陣羽織をかされ、小袴、脚絆、草鞋にて、錦切れの兵士二人と拔刀にて鬪ひながら出づ。半三郎は奮鬪し、兵士等は下のかたへ引いてゆくを、半三郎は追つてゆく。上のかた

相馬の金さん

より相馬金次郎は手負の體にて散らし髪、麻のかたびらに小袴、脚絆、草鞋にて大小をさし、櫻の枝を杖にして出づ。小銃の音つゞけて聞ゆ。金次郎は杖に縋りてあゆみ來り、半三郎のあとを見送りながら、不動堂の前に來てたゝずむ。下のかたより半三郎は引返して出づ。）

半三郎。兄さん、歩かれませんか。

金次郎。どうも意氣地がねえ。

（半三郎は金次郎を介抱して、堂の縁に腰をかけさせる。）

金次郎。半三郎。おれはもういけねえよ。

半三郎。氣の弱いことを云つてはいけません。大丈夫です、大丈夫です。

金次郎。氣休めをいふな。なにしろ肩と股とへ二發も彈を食らつたのだから遣り切れねえ。

半三郎。なに、二發や三發の彈に撃たれても、急所さへ除けてゐれば大丈夫です。氣を落してはいけません。わたしが手を引いても負つてもお連れ申します。

金次郎。今の奴等はどうした。

半三郎。ひとりは斬り倒しましたが、一人は逃がしてしまひました。

金次郎。相手は二人、お前はひとり、加勢をして遣らうにも、おれはこの通りだ。どうなることかと案じてゐたら、ひとりを斬り倒して、ひとりを追拂つてしまつたか。おまへはやつぱり強いな。彰義隊もおまへのやうな人間ばかりだつたら、もう少し持ち堪えたかも知れねえ。

半三郎。なにしろ敵は大勢ですから、殘念ながら何うにもなりません。せめて夜まで持ち堪へられたら、加勢が出て來るかも知れなかつたのですが……。（上のかたを見る。）兄さん、あの通り燃えてゐます。

金次郎。敵の奴め、むやみに大砲なんぞを撃ちやあがつて、卑怯な奴等だ。

半三郎。火の粉と烟をかぶらなければ、もう少し防げたのですが……。まつたく殘念です。

金次郎。ほんたうだ。手前たちの方が大勢の上に、燒撃のやうな目に逢はせやあがる。（上のかたを見返りて罵る。）それで勝つたつて何の手柄になるものか。馬鹿野郎め。

半三郎。併しこんな所にぐづ〳〵してはゐられません。早く行きませう。

金次郎。こゝはどこだ。

半三郎。こゝは根岸……。御行の松です。

金次郎。なるほど御行の松か。（松をみる。）眼が眩んでゐるとみえて、どこだか見當が付かなかつた。（考へる。）それぢやあ丁度いゝ。おれはこゝで腹を切るから、おまへは早く逃げてしまへ。

相馬の金さん

半三郎。　腹を切る……。それは飛んでもないことです。逃げられるだけ一緒に逃げませう。上野が負けても、力を落すことはありません。越後から出羽奥州はみんな徳川方ですから、そこらまで落ちて行つてもう一度戰ひませう。

金次郎。　それだからお前は早く落ちろといふのだ。（苦しい息をつく。）おれはもういけねえ。この松の下で腹を切るから介錯してくれ。

半三郎。　そんな弱いことではいけません。さあ、行きませう。おいでなさい。

（半三郎は介抱して連れて行かうとするを、金次郎は拂ひ退ける。）

金次郎。　いや、いけねえ。權現様は逃げるが勝だと教へたさうだが、逃げられねえものを逃げたつて仕様がねえ。江戸つ子は思切りが肝腎だ。おれはもう歩かれねえ、逃げられねえ。さあ、こゝですつぱりと遣つてくれ。

（金次郎は大小を取りて緣に置き、肌をくつろげると、胸から腹へかけて經文をまいてゐる。）

半三郎。　（困つて。）もし、兄さん、死ぬのはいつでも死なれますから、もう少し我慢して行つてください。

金次郎。　いやだ、いやだ。ぐづ〳〵してゐて敵にでも生捕られてみろ。どんな目に逢ふか判るものか。

半三郎。　いえ、わたしが附いてゐるから大丈夫です。

金次郎。　いくらお前が強がつても、敵が大勢なら仕様があるめえ。それ、見ろ。今さら未練らしいことを云はねえで、素直におれのいふことを肯け。（脇指に手をかける。）

半三郎。　まあ、兄さん……。（脇指に取付く。）

金次郎。　この野郎。强情に邪魔をすると承知しねえぞ。（無理に半三郎を突き放し、櫻の枝をふりあげて無暗に打つ。）もう遣切れねえといふのに、判らねえか。いつまでおれを苦しませて置くのだ。

半三郎。　（決心して枝にすがる。）では、もう仕方がありません。こゝで立派に切腹をなさいまし。わたしが御介錯をいたします。

金次郎。　さうか。（うなづきながら緣にぐつたりとなるを、半三郎は介抱する。）なあ、半三郎。おれも御行の松の下で腹を切りやあ立派なものだ。

半三郎。　（涙ぐんで。）左様でございます。

金次郎。　（肌をくつろげる。）みんなの眞似をして、そこらにあるお經をまき付けて來たが、かういふ相馬の金さん

時の役に立つた。これを取つてくれ。

（半三郎は手傳つて、金次郎の腹にまき付けたる經文をほどく。雨の音、小銃の音。向ふより石澤寅之助は米俵をかぶり、文字若は赤合羽をきて手拭をかぶり、竹の子笠をかざして走り出づ。）

寅之助。　もうこゝらより先へは行かれさうもねえ。

文字若。　もう行かれませんかねえ。

（二人はうろ〳〵しながら上のかたへ行きかゝりて、文字若は不圖みかへる。）

文字若。　あら、金さんが……。金さん、金さん。

寅之助。　やあ、居た、居た。

（二人はよろこんで駈けよる。）

金次郎。　おゝ、師匠と石澤……。どうして來たのだ。

文字若。　あんまり心配だから、いくさの様子を見に來たんですよ。

半三郎。　よくこゝらまで來られましたね。

寅之助。　半分は夢中で、どこをどう廻つて來たか自分にもわからねえが、なにしろこゝでめぐり合つたのは有難てえ。師匠、折角出て來た甲斐があつたぜ。

文字若。　ほんたうに無事でようございましたねえ。

金次郎。　なに、無事なものか。おれはもう定九郎だ。

文字若。　定九郎……。

金次郎。　二つ玉を食らつて半死半生だよ。

半三郎。　兄はもう歩かれないから、どうしてもこゝで腹を切るといふのです。

文字若。　腹を切る……。まあ、どうしたらよからうねえ。

寅之助。　むゝ。（顔をしかめながら訊く。）もういけねえか。

金次郎。　いけねえ、いけねえ。神田の質屋を嚇かした時とは譯が違つて、今度こそは本當に切腹だ。

寅之助。　どうしても切腹か。（半三郎に。）おめえは死ぬのぢやあるめえな。

半三郎。　わたしは兄の死骸を片附けて、これから會津か越後へ脱走する積りです。

寅之助。　おれも江戸にやあゐられねえ體になつてしまつたから、それぢやあお前と一緒に行かうか。

金次郎。　みんな行け、行け。會津でも越後でも構はねえ。どこへでも行つて、おれの代りに威勢よ

相馬の金さん

く遣つてくれ。

文字若。　おまへさんも一緒に行けばいゝぢやありませんか。

金次郎。　それが行かれねえのだから、仕方がねえ。蹴合に負けた軍鶏ぢやあるめえし、いつまでじたばたしてゐられるものか。相馬の金さんはもうこれでおさらばだ。（脇指をぬいて經文をまきつける。）おい、師匠。今までのよしみだ。今年の新盆には迎ひ火を焚いてくれ。

文字若。　情ないことになつたねえ。（泣く）

半三郎。　石澤さん。兄はわたしに介錯しろといふのですが、丁度あなたがお出でになりましたから……。

寅之助。　おれに介錯をしろといふのか。（少し躊躇して。）まあ、仕方がねえ。これも友達の役だ。（金次郎の刀を取る。）

金次郎。　おめえが介錯してくれるか。おれは腹の切り様が下手だらうから、そつちで手際好くぽんと遣つてくれ。

寅之助。　手際好くは些つとむづかしいが、まあ一世一代の積りで遣つてみようよ。

金次郎。　おれも一世一代だ。しつかり頼むぜ。

（金次郎は脇指を腹に突立てる。寅之助は刀をぬいてうしろへ廻る。半三郎と文字若は手をあはせる。雨の音、小銃の音。）

――幕――

水滸傳

昭和二年十二月作。

昭和三年一月。本郷座初演。

初演當時の主なる役割――李逵（市川猿之助）李逵の母（市川紅若）李發（坂東三津五郎）秋芳（中村米吉）朱貴（市川荒次郎）朱富（市川小太夫）劉家村の李鬼（市川八百藏）李鬼の妻（中村時藏）張乙（市川段猿）曹俊（中村吉之丞）など。

登場人物――黑旋風、李逵。旱地忽律、朱貴。笑面虎、朱富。李逵の母。李逵の兄、李發。李逵の妹、秋芳。劉家村の李鬼。李鬼の女房、野花。李鬼の手下、張乙。都頭、曹俊。ほかに、番兵、土兵。捕方。獵夫。農夫。旅の男。酒店の男。商人。往來の男女。小兒など。

第一幕

（一）

支那。宋の徽宗皇帝の宣和年間のこと。時は春の日の午後。

沂州、沂水縣城の西門外。上のかたに大なる立榜ありて、「第一名正賊鄆城縣宋江。第二名賊江州戴宗。第三名從賊沂水縣李逵。捉宋江者、賞一萬貫錢。捉戴宗者、賞五千貫錢。捉李逵

者、賞三千貫錢。」と大書してある。下のかたには榎の大樹、その下に肉包を賣る商人が店を出してゐる。

（往來の男女、小兒など十四五人が立ちどまりて彼の立榜をよんでゐる。門を守る番兵二人は青龍刀を持ち、商人の店に立つて肉包を食つてゐる。小鳥のさへづる聲と共に、どこやらにて簫を吹く聲長閑にきこゆ。）

番兵甲。　いつも云ふことだが、おまへの店では、なぜ酒を賣らないのだ。

商　人。　こゝらにはほかに酒屋が澤山ありますので、わたくし共の店では遠慮して、酒を賣らないことに致して居ります。

番兵乙。　あんまり遠慮する風でもあるまい。そんなことを云つて、おれたちに飲み倒されない用心だらう。怪しからん奴だぞ。

番兵甲。　いや、さうだ、さうだ。いま〳〵しいから今日は腹一ぱい食つてやるぞ。

商　人。　（うんざりしながら。）はい、はい。有難うございます。

番兵乙。　なに、勘定はいつもの通り借りて置くのだ。ぐづ〳〵云ふと、あしたからこゝへ店を出させないから、さう思へ。

商　人。　いえ、決してぐづ〳〵は申しません。どうぞ澤山に召上つてください。

番兵甲。　さう云はれても饅頭では、いくら食つても知れたものだ。

（番兵ふたりは無暗に饅頭を頬張つてゐる。下のかたより黒旋風李逵、旅すがたにて出で、饅頭屋の店を鳥渡のぞいて、こゝには酒はないと見て舌打ちしながら行きかゝり、彼の立榜の前に來て何ごころなく立ちどまる。但し李逵は無學文盲なれば、なにが書いてあるか一字も讀めないと知るべし。）

男　一。　（立榜をみて。）こいつ等はよほど惡いことをしたと見えるな。

男　二。　なんでも人殺しや火つけや强盜や、色々の惡事を働いたといふ噂だ。

男　三。　そんな奴等は早く召捕りになればいゝな。

（李逵はなんだか判らないながらも、人々と一緒に立榜を、うつかり眺めてゐる。そのうちに、男一はあやまつて李逵の足をふむ。）

李　逵。　（呶鳴る。）えゝ、なにをしやあがるのだ。

男　一。　（氣がついて。）これは粗相だ。御免なさい。

李　逵。　一體貴樣が邪魔なところに出しやばつてゐるから惡いのだ。退け、退け。

（腹立ちまぎれに突き退けるはずみに、男二もよろけて李逵の足をふむ。）

李逵。（又どなる。）や、こいつ等。寄つて集つておれに無禮をはたらくな。（男二の胸ぐらを掴む。）

男二。もう料簡がならねえぞ。

李逵。いや、粗相だから堪忍しなさい。

男二。どいつも粗相だ粗相だと云やあがる。よし、よし、なんでも粗相で事が濟むなら、これも粗相だぞ。

（男二の胸ぐらを二三度小突きまはして力まかせに突き倒せば、人々はさわぎ立つ。）

男三。これはどうも亂暴な男だ。

男四。粗相で足を蹈んだものを突き倒すとはなんのことだ。

李逵。それだからおれも粗相だと斷つたぢやあねえか。

男一。おまへのは粗相ではない、わざとしたのだ。

李逵。え、、粗相だ、粗相だ。おれは名代の粗相つかしい人間だから、どんな粗相をするか判らねえぞ。（又もや男一の胸ぐらを引つ掴む。）

一同。（口々に。）この男は氣ちがひだ。氣ちがひだ。

李逵。なに、氣ちがひだ……。さあ、氣ちがひがどんな事をするか、見てゐろ。

（李逵は又もや男一を投げ倒せば、人々はいよ〳〵騷ぎ立つ。番兵や商人も寄つて來る。この以前より旱地忽立朱貴、やはり旅すがたにて下のかたより出で來り、この捫着を窺ひゐたるが、この時つか〳〵と進みよりて李逵の襟がみを掴む。）

李逵。え、、なんだ、なんだ。何をしやあがる。（云ひながら朱貴を見かへりて驚く。）

朱貴。（叱る。）この馬鹿野郎め。又こゝへ來て暴れてゐやあがるのか。もう堪忍して置かれねえぞ。（李逵を二つ三つなぐりつける。）

李逵。（面喰つて。）おい、おい、なにをするのだ。

朱貴。（小聲で。）まあ、なんでもいゝから俺のする通りになつてゐろ。（大きい聲で又叱る。）こいつ實に途方もねえ奴だ。みなさんの見てゐる前で、おれが存分に折檻してやるから覺悟しろ。（又なぐる。）

李逵。おい、おい、兄貴。おまへは氣でも違やあしねえか。

朱貴。え、、氣ちがひといふのは貴樣のことだ。さあ、氣ちがひ野郎、馬鹿野郎。けふはどうしても半殺しにして遣らなけりやあならねえ。

（朱貴はむやみに罵りながら、李逵の襟がみを取って引摺りまはせば、李逵は烟にまかれて抵抗する元氣もなく、おめ〳〵と地に倒れる。）

李逵。　おい、おい、冗談ぢやあねえ。おれをどうするのだよ。

朱貴。　（小聲で。）まあ、默つてゐろといふのに……。（又もや呶鳴る。）皆さん、まあ聽いてください。こいつはわたしの弟分ですが、ふだんから酒をのむ、喧嘩をする。それよりほかには何の取得もない奴で、人間のすたり者といふのは全くこいつのことでございます。こいつの爲には、これまでどんなに恥をかいたか迷惑したか判りません。今もわたしが見てゐないと、すぐにもうこの始末で何とも申譯がございません。さあ、野郎。けふは幾らあやまつても堪忍しねえぞ。ちつと懲りるやうに、貴樣の石あたまを半分ばかり打つ缺いてやるから、さう思へ。

（朱貴はそこらに轉げてゐる手頃の石を把つて振り上げれば、人々も流石におどろいて支へる。）

男一。　まあ、まあ、待ちなさい。それはあんまり兄貴が手暴い。

男二。　そんな奴でも頭をぶつ缺くのは可哀さうだ。

朱貴。　なに、こんな奴にはあたまの缺けを拾はせて遣るのが、後日の見せしめですよ。

（又もや石をふりあげれば、番兵等も見かねて進み出づ。）

番兵甲。　これ、これ。お前も弟に負けない亂暴者だぞ。

番兵乙。　いくら見せしめだからと云つて、その石であたまをぶち割つたら、死んでしまふではないか。

番兵甲。　こゝで人殺し騷ぎなどを遣られては、おれたちが迷惑だ。よせ、よせ。

朱貴。　（俄におとなしくなる。）はい、はい。どうも恐れ入りましてございます。

番兵乙。　さあ、さあ、そんな奴は早く連れてゆけ。

朱貴。　はい、はい。では、皆さん。どうぞこれで御勘辨をねがひます。

李逵。　なに、あやまることがあるものか。ばか〳〵しい。

朱貴。　（小聲で。）まあ、いゝから來い、來い。（番兵に。）どうも飛んだ御厄介をかけました。（朱貴は幾たびかお辭儀をして、不服らしい李逵を無理に引摺つて上のかたへ立去る。人々は見おくる。）

（二）

おなじく門外の酒店。三四ヶ所に卓を置きて、いづれも二三脚の榻に圍まれてゐる。上のかたには横向きに入口。下のかたには臺所のあるこゝろ。前は庭にて杏の花などが紅く開き、一株の柳の大樹あり。そこにも卓や榻を置いてあり。

（こゝの亭主は朱貴の弟で、笑面虎朱富といひ、あだ名の通りにいつもにこ〳〵と笑つてゐる男、入口に近き榻に腰をかけてゐる。臺所より店の男ひとり出づ。）

男。　旦那。お兄いさんはまだお歸りになりませんな。

朱富。　むゝ、まだ歸らない。なにをしてゐるのかな。併しもう歸つて來るだらう。酒や肉の仕度をして、歸つたらばすぐに持ち出せるやうにして置いてくれ。

男。　かしこまりました。

（男は臺所へ去る。朱富は起つて人待顏に表を見てゐる。上のかたより朱貴は先に立ちて、李逵を案内して出づ。）

朱富。　お歸りなさい。

朱貴。　お客をひとり連れて來たぞ。

朱富。　どうぞこちらへ。

（朱富はふたりを請じ入れて、庭さきの卓に着かせ、自分は臺所へゆく。）

朱貴。　こゝはおれの弟の家だ。安心してゆつくりしろ。

李逵。　なにが安心しろだ。（食つてかゝる。）おい、おまへは何でおれをあんな目に逢はせたのだ。

朱貴。　（笑ひながら。）おまへが相變らず馬鹿なことをするからよ。

李逵。　碌々に譯も聞かずに、往來のまん中でおれを叱りつけて、なぐり付けて、あれは一體どうしたのだ。返事に因つては、おれにも料簡があるぞ。（詰めよる。）

朱貴。　それだからお前は馬鹿だといふのだ。あの立榜にはなんと書いてあると思ふ。

李逵。　なんと書いてあるか、おれに讀めるものか。

朱貴。　それみろ。おまへは無學文盲で一字も讀むことを知らないから、平氣であの立榜の前に立つてゐられるのだ。あの榜には宋江明と戴宗と李逵と、この三人を召捕れと書いてあるのだぞ。

李逵。（おどろいて。）え、ほんたうか。

朱貴。むゝ、宋江明をつかまへた者には錢一萬貫、戴宗をつかまへた者には五千貫、李逵をつかまへた者には三千貫の褒美をやるといふのだ。

李逵。（唸るやうにため息をつく。）むゝ、さうか。そんな事が書いてあつたのか。

朱貴。どうだ。おどろいたか。自分の首に繩の付くのを知らないで、その立榜の前にうつかり突つ立つてゐるなぞといふ、そんな馬鹿者が世の中にあるものか。おまけに、そこで詰まらない喧嘩なぞを始めて、どうする積りだ。

李逵。それは些つとも知らなかつた。こゝらにもすつかり觸れが廻つてゐるのか。

朱貴。（呼ぶ。）おい、おい。

朱富。（出づ。）はい、はい。

朱貴。おまへに好い金儲けを教へてやる。あの門外に立榜の出てゐるのを知つてゐるだらうな。

朱富。知つてゐます。

朱貴。あのなかに李逵といふ奴をつかまへた者には三千貫の褒美をやると書いてある。その李逵といふのはこの男だ。早く訴へて褒美を貰へ。

李逵。えゝ、むやみなことを云つてくれるな。そんなことを云つたら、おればかりか、おまへの身の上にもかゝはるぢやあねえか。

朱貴。はゝゝゝゝゝ。慌てるな、あわてるな。これはおれの弟で朱富といふのだ。いくら慾が深くつても、まさかにお前やおれを訴人する氣づかひは無いから、安心しろ、安心しろ。

朱富。では、このお人が李逵とおつしやるのですか。

朱貴。さうだ、さうだ。黑旋風李逵といつて梁山泊でも札附きのわからずやだから、その積りで附合つてやれ。

李逵。では、ほんたうにおまへの弟か。

朱富。どうぞお見識り置きをねがひます。

李逵。人の顏をみて忌にに、やゝしして、なんだか薄つ氣味の惡い男だな。（朱貴に。）どうでおまへの弟だ。碌な奴ぢやあるめえ。

朱貴。さうかも知れないな。今度歸るときには、梁山泊へ一緒に連れて行く積りだ。

朱富。色々お話もございませうが、先づその前に一杯召上つては如何です。

李逵。おれはそれを云はうと思つてゐたのだ。早く酒を飲ませてくれ。肴はあとでもいゝから、

酒だ、酒だ。

朱富。はい、はい。（行きかゝる。）

朱貴。いや、待つてくれ。むやみに酒なんぞを持ち出して來てはならねえ。

李逵。意地の惡いことを云つちやあいけねえ。おれは今朝から一滴も酒を飲まねえ上に、今の騷ぎでいよ〳〵喉が渴いてたまらねえのだ。

朱貴。喉が渴いたら、水で我慢しろ、（朱富に。）この男に水を持つて來てやれ。氣違ひ水ぢやあねえ、ほんたうの水だぞ。

朱富。では、水を持つてまゐります。（臺所へゆく。）

李逵。さつきから聞かうと思つてゐたのだが、おまへは一體なにしにこゝへ來たのだ。弟を迎ひに來たのか。

朱貴。弟のことは二の次で、おれはよそながらお前の樣子を見に來たのだ。

李逵。おれの樣子を見て、どうするのだ。

朱貴。おまへが今度梁山泊を出て來たのは、故鄕にゐるおふくろを迎ひに行くためだらう。

李逵。むゝ。おれも久しく方々をうろ付きあるいて、年を取つたおふくろに孝行らしいこともしなかつたから、梁山泊におちついて何うやら斯うやら人間なみの暮しが出來るやうになつたのを幸ひに、故鄕の百丈村へたづねて行つて、おふくろを引取つて來る氣になつたのだ。

朱貴。（うなづく。）そこがお前の好いところだ。宋江兄いも不斷から云つてゐるには、李逵といふ奴は馬鹿で無學で亂暴で、まつたく箸にも棒にもかゝらない奴だが、正直と親孝行と、この二つがあいつの取得だと……。考へてみると、全くさうだな。

李逵。正直といふのか何だか知らねえが、おれは生まれ落ちるとから、嘘をついたり、曲つたことをするのは大嫌ひだ。また誰に敎へられたわけでもねえが、自分の親が大切だといふ事だけは自然に知つてゐるのだ。

朱貴。それだからお前が今度おふくろを迎ひに行くといふに就て、宋江兄いは澤山の路銀をくれて、早く行つて來いと云つたのだが、おまへの出たあとで又かんがへて、李逵の奴をひとりで出して遣つたのは疎忽であつた。あいつの事だから、途中で大酒をのむか喧嘩をするか、屹となにかの間違ひを仕出來すに相違ない。お前はあいつの故鄕に近い人間だから、蔭ながらあいつのあとを附けて行つて、なにかの事が起つたときには相當の助力をしてや

れと、おれを呼んで云ひ付けたのだ。

李逵。なるほど、それでお前はおれのあとを附けて來たのか。やれ、やれ、それは御苦勞だな。

（笑ふ。）併しおれも子供ぢやあねえから、わざ〳〵送つて貰ふにも及ぶめえよ。

朱貴。子供で無いことがあるものか。現に今も大しくじりを遣らうとしたぢやあねえか。おれが巧く胡麻かしてやらなければ、今ごろは手枷や首枷を嚴重にはめられて、暗い牢屋にぶち込まれてゐるのだ。それ見ろ。自分の馬鹿を棚にあげて、おれの前で威張つた口が利かれるものか。

李逵。（舌打ちして。）さう一々に遣り込めるなよ。それだから小悧口の奴はうるさくてならねえ。口の先ぢやあ迎もお前にはかなはねえが、その代りに、おれの腕をみろ、腕を見ろ。

（云ひながら李逵はあたりを見まはして柳の大樹に眼をつけ、立寄つてその幹を引つかゝへ、二三度強く搖り動かせば、柳はぐら〳〵とゆるぎ出す。）

朱貴。（たち上る。）おまへの力自慢も久しいものだ。よせ、よせ。

李逵。こいつを根こぎにして見せるのだ。

（李逵は又もや柳をゆすつてゐる處へ、臺所より朱富は男に茶碗の水を持たせて出で、これを見てびつくりする。）

朱富。もし、もし、そんな惡戯をしては困ります。

朱貴。もう止せといふのに……。おまへの馬鹿力はもう判つてゐるのだ。

（朱貴と朱富とに支へられて、李逵は澁々ながら止める。）

朱富。なんぼお前さんでもこの大木は拔けますまい。

李逵。なに、もう一息のところだ。

朱貴。この男のことだから遣り兼ねないよ。

朱富。おそろしい力ですな。さあ、水を持つてまゐりました。

（朱富は男に指圖して茶碗を卓の上に置く。）

李逵。（茶碗をみる。）この酒は水のやうな色をしてゐるな。（一口飲んで顏をしかめる。）あ、これは本當の水だ。馬鹿野郎、こんなものが飲めるものか。（飲みかけの水を男のあたまへぶつ掛ける。）

朱貴。初めから水だと云つてゐるぢやあねえか。それを酒だと思つたのはお前の間違ひだ。

李逵。（じれる。）えゝ、何でもいゝから早く酒を持つて來い。（男に。）ぐづ〳〵してゐると叩き殺すぞ。

（男はおどろいて早々に臺所へ逃げてゆく。）

朱富。（笑ひながら。）兄の指圖で持つて來ましたが、水ではまつたくお氣の毒でございます。唯今すぐに本當の酒を持つてまゐります。

李逵。早くしろ。早くしてくれ。おれを焦らすと、承知しねえぞ。

朱富。はい、はい。（引返さうとする。）

朱貴。（よびとめる。）これ、この男に酒を飲ませてはならねえと云ふのに……。

李逵。どうも意地のわるい奴だ。（吃となつて。）では、どうしてもおれに酒をのませねえ積りか。

朱貴。おれが飲ませねえのぢやあねえ。おまへは梁山泊を出るときに、宋江兄いに何といふ約束をして來た。

（李逵はすこしく詰まる。）

朱貴。今度の道中は普通の旅とは違つて、年を取つたおふくろを迎ひに行くのだ。その途中で間違ひがあつてはならない。今度だけは往復ともに禁酒しろと云はれたのを忘れたか。

李逵。（閉口して。）いや、それはおれも確に覺えてゐる。お前にそれを云はれると、おれも少々閉口だが……。（急に笑顔を作る。）おい、なにも友達のよしみだ。宋江兄いがこゝにゐると云ふわけでもねえから、けふの所だけはまあ大目に見てくれ、お願ひだ。お願ひだ。

朱貴。おまへは唯つた今、おれは生まれ落ちるとから、嘘をついたり、曲つたことをするのは大嫌ひだと云つたな。

李逵。むゝ。

朱貴。それほど正直なお前が約束を破つてもいゝのか。一旦禁酒の約束をして置きながら、その人の見てゐない所では酒を飲んでもいゝのか。

李逵。（困つて。）まあ、まあ、さう理窟責めにしてくれるなよ。（朱富に。）兄きは迚も話にならねえ。おまへに頼むから一杯飲ましてくれ。おれはもう喉がぐびゝしして死にさうだ。あゝ苦しい。早く飲ませてくれ。助けてくれ。

朱富。（笑ひながら。）それはお察し申しますが、今のお話をうかゞひますと、お前さんはやはりお飲みにならない方がよささうです。まあ、まあ、我慢おしなさいよ。はゝゝゝゝゝ。

李逵。なにが面白くつてけらゝゝ笑やあがるのだ。一體こゝの家の商賣はなんだ。

朱富。看板にいつはり無しの酒屋でございます。

（李逵は懐ろから銀一両を出して、卓の上に置く。）

李逵。酒屋ならば酒をのませろ。さあ、酒の代はこゝへ置くぞ。

朱富。いえ、酒の代なぞはどうでも宜しいのですが、お飲みにならない方がお前さんのお爲でせう。ねえ、兄き。

朱貴。勿論飲ませちやあならねえ。おい、李逵。おまへの附合ひに、おれも今夜は飲まねえから、それで我慢しろ。

李逵。我慢が出來るくらゐなら頼みやあしねえ。（いよ〳〵焦れて起ちあがる。）もう〳〵こんな所には一刻もゐねえぞ。

朱貴。これ、これ、どこへ行くのだ。

李逵。どこへ行かうとおれの勝手だ。

朱富。やがてもう日が暮れます。これから先の森のなかには、このごろ追ひ剝ぎが出るといふ噂ですから、今夜はこゝに泊つておいでなさい。

李逵。追ひ剝ぎなんぞが怖くつて、道中が出來るものか。兄弟揃つて不人情の奴等だ。おぼえてゐろ。

（李逵は憤然として、足音あらく表へ出でゆく。朱貴の兄弟は顔をみあはせて大いに笑ふ。）

――幕――

第二幕

（一）

劉家村に通ずる森の中。大樹おひしげりて、木の間を洩るゝ月のひかり朧なり。風の音、寢鳥のおどろき起つ羽音をり〳〵にきこゆ。

（下のかたの木立のあひだより李逵出づ。）

李逵。なるべく近道を取らうと思つて、飛んだところへ蹈み込んでしまつた。やつぱり本街道を眞直に行けばよかつたな。今夜はもう何時だらう。

（李逵は空を仰ぎながら行きかゝれば、上のかたの木の間より一人の怪しき男あらはる。男は獰惡なる人相にて二つの大いなる斧を持ち、李逵のゆく手に立ち塞がる。）

男。　これ、待て。

李逵。　なんだ。

男。　こゝを通りぬけるには切手がいるぞ。

李逵。　こんな所に關所が出來たのか。

男。　さうだ。おれが勝手にこしらへた關所だ。この關所を通るものは、切手の代りに金を出すのだ。貴樣は旅の者らしい。さあ、懷ろに持つてゐるだけの路銀を出せ。

李逵。　(笑ふ。)なるほどおれは旅の者で、懷ろには身分不相應の大金をたくはへてゐるが、どうもお前には遣りにくいな。邪魔をしずに通してくれ。

男。　惡くおち付いた奴だな。身分不相應の大金を持つてゐるといふからは、猶さら無事に通すことは出來ねえぞ。命が惜しければ早く出せ。

李逵。　おれは生れてから命が惜しいと思つたことは一度もない男だ。どうしても唯は通さねえといふならば、註文通りに切手をわたして遣る。おれの切手はこれだぞ。(腰刀の柄をたゝいて見せる。)

男。　こいつ些つとばかり武藝のこゝろ得があるので、多寡をくゝつて平氣な面をしてゐるのだな。これ、相手をみて物をいへ。今おれが名乘つて聞かせるから、膽を潰すなよ。

李逵。　むゝ。おまへは何といふ男だ。

男。　おれは天下に豪傑の名の高い、黑旋風李逵といふのだ。

李逵。　(おどろく。)なに、お前が黑旋風李逵といふのか。(相手の顏を屹と見る。)この横着野郎め、おれの名を騙つてゐるな。

男。　おれの名を騙つてゐる……。それでは貴樣は何者だ。

李逵。　おれは黑旋風李逵といふのだ。

男。　(おどろく。)なに、黑旋風李逵だ……。(笑ひ出す。)これ、人の口眞似をして嚇かすのはよせ、よせ。いくら世間が廣くつても、黑旋風李逵といふ男が二人あつて堪るものか。

李逵。　それだから貴樣は騙りだといふのだ。おれが本當の黑旋風李逵だぞ。

男。　えゝ、貴樣こそ僞者だ。この斧をみろ。兩手で二つの斧を一度に使ふものは、黑旋風李逵のほかには無いのだ。

李逵。　旅をするには邪魔だから、おれはそんな物を置いて來たのだ。嘘だと思ふならおれに貸してみろ。自由自在に振りまはして見せるぞ。

（李逵は進み寄る。男は左に持つたる斧をうしろへ投げやり、右の手の斧を兩手に持ち直して、不意に李逵に擊つてかゝる。李逵はその斧をうばひて投げ捨て、彼を手玉に取つて投げ倒し、蹈みつける。）

李逵。さあ、どうだ。どつちが眞者か僞者か、これで判つたらう。強い方が眞者にきまつてゐるのだぞ。さあ、正直に白狀しろ。

男。恐れ入りました。恐れ入りました。

李逵。恐れ入つたらば本名をいへ。

男。わたくしはこの先の劉家村のはづれに住む李鬼といふものでございます。

李逵。なに、李逵だ……。這奴まだおれの名を騙るのか。

男。いえ、おなじ李逵でも字が違ひます。わたくしのきの字は鬼と書くのでございます。

李逵。むゝ、鬼といふ字をかいて李鬼と讀むのか。なるほど鬼のやうな奴だ。

男。あなたのお名前は世間にひゞき渡つて居りますので、わたくしが兩手に斧を持つておれは黑旋風李逵だぞと呶鳴り付けますと、大抵の者はふるへ上つて素直に金や着物をわたして參ります。さういふわけで、別に惡い料簡があつたのではございません。唯わたくしの商賣用にお名前を拜借いたしただけのことでございます。

李逵。貴樣のやうな奴に、大事の名前を拜借されてたまるものか。もう斯うなつたら貴樣にも覺悟があるだらう。さあ、こゝで往生しろ。

男。あゝ、もし、お待ちくださいまし。わたくしは如何やうの御成敗に逢ひましても、自業自得で致し方もございませんが、今こゝでわたくしの命をお取りになりますと、罪のない者がもう一人死ぬことになります。

李逵。罪の無い者がもう一人死ぬ……。それはどういふわけだ。

男。わたくしには年を取つた母がございます。

李逵。むゝ。母があるのか。

男。（泣く。）わたくしも好んでこんな追ひ剝ぎなどを致したくはございませんが、何分にも貧乏の家に生れまして、思ふやうに老母を養ふことが出來ませんので、惡いことゝは知りながら、お名前を騙つて居りましたのでございます。

李逵。では、おまへは年を取つた母を養ふために、こんなことをしてゐるのか。（俄に同情して。）むゝ、さうか、さうか。

男。（いよ〳〵泣く。）それでございますから、今こゝでわたくしがあなたに殺されますと、親ひとり子ひとりの母は見す〳〵飢ゑ死を致さなければなりません。それが悲しうございます。

李逵。（急に涙脆くなる。）さう聞くと、まつたく可哀さうにもなる。實はおれもこれから故郷へおふくろを迎ひに行く途中だ。お前のおふくろは幾つになる。

男。六十……五歳でございます。

李逵。おれのおふくろよりも五つ上だな。ふだんは達者か。

男。近年は兎角に病氣勝ちで困ります。わたくしも晝は一日看病をいたして居りまして、夜だけこゝへ稼ぎに出るのでございますが、かうしてゐる間も母はどうしてゐるかと案じられてなりません。（又泣く。）

李逵。（慰めるやうに。）まあ、泣くな、泣くな。親孝行をする者には天の惠みがある。天に代つておれが惠んでやるから、待て、待て。

（李逵は懷ろから十兩の大きい銀を出して、男に遣る。）

李逵。今までのやうなことをしてゐては、孝行が却つて不孝にならないとも限らねえ。これを元手にして何か商賣でも始めろ。

男。（銀をみて驚く。）こんな大金を頂きましては……。

李逵。まあ、いゝから取つて置け。おまへの命が助かつたのも孝行の德だ。この後も親を大事にしろよ。

男。ありがたうございます、有難うございます。（銀をいたゞく。）今夜かぎりで決してこんな惡い事はいたしません。

李逵。おふくろが待つてゐるだらう。早く歸つてやれ。

男。この金をみせて喜ばせてやります。では、御免ください。

（男は急いで行かうとして、つまづく。）

李逵。これ、氣をつけて行け。おまへは大事な體だぞ。

男。はい、はい。

（男はゆきかけて李逵をみかへり、密にせゝら笑つて上のかたへ去る。）

李逵。（それに氣が付かず。）あいつも見かけによらねえ可愛い奴だ。こゝへ蹈み込んで來たのも損ではなかつた。おれもこれで好い心持になつた。はゝゝゝゝ。

（李逵は愉快さうに大笑して、上のかたへ行きかゝる。）

（二）

森の出はづれの一つ家。室内は土間にて、正面に扉の入口。隅の方には土竈に平釜がかけてあり。ほかに木製の粗末なる榻と卓あり。折廻したる下のかたには窓あり。上のかたは寢間のこゝろにて、入口は扉。家の外には石の井戸、一樹の梨花が白く咲いてゐる。下のかたには立木、森の遠見。

（室内は暗く、卓の上には一本の蠟燭がとぼしてあり。若い女房が竈の下で火を焚いてゐる。梟の聲。）

女房。　忌にさびしい晩だ。今夜は内の人の歸りが些つと遲いやうだねえ。

（女房は不安らしく窓より表を見る。下のかたより李逵出づ。）

女房。　（すかし見て。）おまへさんかえ。

李逵。　いや、おれは旅の者だ。

女房。　旅のお方でございますか。

（云ふうちに、李逵は正面の扉を推して内に進み入る。）

女房。　（怪むやうに。）あなたは何しにお出でなすつたのでございます。

李逵。　別に怪しい者ぢやあねえ。今もいふ通り、おれは通りがかりの旅の者だ。相當の錢を拂ふから酒を飲ませてくれ。

女房。　（冷やかに。）こゝの家は酒屋ではございません。

李逵。　それにしても内の者の飲む酒がたくはへてあるだらう。賴むから飲ませてくれ。

女房。　（迂散らしくぢろ〳〵見る。）あなたはどちらの方角からお出でになりました。

李逵。　城の方から來たのだ。

女房。　城の方には酒屋がございましたらうに……。

李逵。　むゝ、酒屋はあつたが、色々の邪魔が這入つて飲むことが出來なかつたので、むやみに喉が渴いてならねえ。いや、おれの渴きを止めるのは水ぢやあいけねえ。どうしても酒でなければいけねえのだ。濁り酒でも何でもいゝから飲ませてくれ。おれはもう病氣になりかかつてゐるのだ。

女房。　病氣に……。

李　逵。　いや、その病氣も酒さへ飲めば、すぐにけろ〳〵と癒るのだから心配することはねえ。さあ、早く飲ませてくれ。

女　房。　折角でございますが、主人は下戸でございますので、酒のたくはへはございません。

李　逵。　ほんたうにねえのか。やれ、やれ。（がつかりして榻に腰をおろす。）けふのやうに運の惡い日はねえものだ。

女　房。　まことにお氣の毒でございます。

李　逵。　（竈の火をみる。）そこで飯を焚いてゐるのか。

女　房。　はい。

李　逵。　それではせめて飯を食はせて貰はう。實はまだ夕飯も食はねえのだ。

女　房。　それはおひもじい事でございませう。御飯ならばもうすぐに出來ますから、しばらくお待ち下さい。（竈の前にゆく。）

李　逵。　なるたけ早く賴むぜ。おれは意地の惡い友だちを持つたために、飲ます食はすといふ酷い目に逢つたのだ。

女　房。　では、お連れさんがあるのでございますか。

李　逵。　連れといふわけでもねえ。向ふから勝手に附いて來たのだが、途中で喧嘩をして別れてしまつて、ひとりでこの森を越えて來たのだ。

女　房。　ひとりでこの森を越えて……。（李逵のそばへ來る。）誰にもお逢ひになりませんでしたか。

李　逵。　（曖昧に。）むゝ。逢はなかつたよ。

女　房。　まつたく誰にもお逢ひになりませんでしたか。

李　逵。　なぜそんなことを聞くのだ。

女　房。　この頃こゝらの森のなかに追ひはぎが出るといふ惡い噂がございます。そこを無事に通りぬけてお出でになつたのは、よく〳〵御運がよいのでございませう。（竈の前へ引返して、釜の蓋を取つてみる。）

李　逵。　まだ飯は出來ねえのか。

女　房。　まだ少々お手間が取れます。

李　逵。　やれ、やれ。（卓にうつ伏す。）

女　房。　あなたはお酒が飲みたいと仰しやいましたね。

李　逵。　むゝ。さつきから幾度も云つてゐるぢやあねえか。

女房。それでは御飯の出來るあひだに、村の酒屋へ行つて買つて來てあげませうか。

李逵。そんなら早くさう云つて吳れゝばいゝのに……。是非賴むから、早く行つて來てくれ。賴む、賴む。

（懷ろからあわてゝ銀を掴み出すはずみに、大小の銀がざら〳〵と土間に落ちるを、女房は横眼に見てゐる。）

李逵。（一つの小さい銀をわたす。）さあ、これで賴むよ。大急ぎだ、大急ぎだ。

女房。では、こゝの火を見てゐてください。

李逵。よし、よし。

（女房は棚より壺を取りおろして、足早に下のかたへ出てゆく。李逵は落ちたる銀を拾ひあつめる。）

李逵。これでやう〳〵酒に有り付くことになつたが、どう考へても今日は惡い日だ。飲まず食はずで、全くがつかりしてしまつた。

（李逵は再び卓にうつ伏してゐる。遠寺の鐘きこゆ。道具は半廻しになりて、外にはおぼろ月。下のかたより前の場の追ひ剝ぎの男が女房と連れ立ちて出づ。）

男。（小聲で。）それぢやあ本當の李逵がおれの家に來てゐるのか。

女房。どうもさうらしいよ。

男。そいつは困つたな。そら涙をこぼして、嘘八百をならべ立てゝ、うまくあいつを欺したのだが、こゝで顏を合せては些つとまづいな。

女房。あいつはなか〳〵お金を持つてゐるのを、わたしはちらりと睨んで置いたから、何とかして捲きあげる工夫をしようぢやないか。

男。しかし腕づくぢやあ迚もあいつには敵はねえからな。

女房。むやみに酒を飲みたがつてゐるから、わたしは買ひに行く振をして出て來たんだが、どうだらう、内にある酒のなかへ蒙汗藥を入れて飲ませたら……。

男。むゝ。成程。

女房。いくら眞者の黑旋風だつて李逵だつて、蒙汗藥ならころりと參つてしまふだらうぢやないか。さうして、先づ懷ろの金をまき上げてしまつて、それから又訴へて出れば、別に御褒美が貰へるぢやないか。

男。さうだ。黑旋風李逵をつかまへれば、三千貫の褒美をやるといふお觸れが出てゐる。あいつを蒙汗藥でまゐらせて置いて、懷ろの金をぶつたくつた上に、又訴へる。さうすりやあ

女房。二重の儲け仕事だ。おまへは旨いことを考へたな。

男。ね、それが一番好いだらう。

女房。いゝとも、いゝとも。それに限る。

（この相談のあひだに、李逵は窓から首を出して窺つてゐる。）

男。それぢやあわたしが先へ歸つて、うまく胡麻かして飲ませるから、お前はそこらに隱れて見ておいでよ。

女房。萬事おまへに賴むぜ。併しそいつが確に本當の李逵かしら。念のためにちよいと覗いてみよう。

男。覺られないやうに氣をおつけよ。

女房。大丈夫だ、大丈夫だ。

（ふたりは囁き合ひながら上のかたへ來かゝる時、入口の扉をあけて李逵出で來り、無言で夫婦のまへに立塞がれば、二人はぎよつとして立竦む。）

李逵。（どなる。）貴樣はさつきの追ひはぎ野郎だな。こゝは貴樣の家か。

男。（よんどころなく。）はい。

李逵。六十五歳になる病人のおふくろと云ふのは、どこにゐる。

男。え。

李逵。貴樣はおれをだましたな。（女に。）お前はこいつの女房か。

女房。（これも據ろなく。）はい。

李逵。夫婦揃つて不埒な奴等だ。貴樣たちの惡い相談は大抵おれの耳へもきこえたぞ。さあ、おれに蒙汗藥を飲ませてみろ。

二人。え。

李逵。さあ、おれを訴へて三千貫の褒美を貰へ。

二人。え。

李逵。この惡黨め等、唯は置かねえから覺悟しろ。

（男はもう堪らなくなつて逃げかゝるを、李逵は刀をぬいて追つてゆく。そのあひだに女房は內へ逃げ込み、あわてゝ入口の扉をしめ、窓をしめる。道具は元へ戻りて、李逵は下のかたより引返して出で、扉の外から叫ぶ。）

李逵。あけろ、あけろ。

（女房は内でうろ〳〵しながら、水瓶の水を汲んで（竈の火を消してゐる。李逵はしきりに扉を叩く。）

李逵。明けろ、明けろ。明けないと戸をぶち毀すぞ。

（女房はいよ〳〵恐れて蠟燭を吹き消し、上のかたの寢間へ逃げ込みて、内より扉をしめる。李逵はじれて、入口の扉をばら〳〵と叩きこはして跳り込む。）

李逵。さあ、隱れるな。出て來い。

（竈の火も消え、蠟燭の火も消えてゐるので、李逵も少しく當惑し、榻につまづき、卓に突き當つていよ〳〵焦れる。）

李逵。女の猿智慧であかりを消しても、こんな狹い小屋のなかだ。家探しをするのは譯はねえぞ。

（李逵は探りながら奥へ行かうとする時、女房は寢まきをかぶつて寢間の扉をあけ、拔き足をして表へ逃げ出さうとすれば、李逵は覺つて探りながら追ひまはす。女房は寢まきを取つて投げかけると、それが恰も李逵の頭をすつぽりと包んでしまふので、李逵はかきむしりながら拂ひ退ける。ここに面白い立廻りあつて、道具はまた半廻しになると、表は矢はりおぼろ月。女房はやう〳〵に表へ逃げて出ると、李逵も追つて出で、井戸のまはりを追ひまはして遂に女房を取つて押へる。）

李逵。さあ、どうだ。こいつ思ひのほかに骨を折らせやあがつた。

女房。御免ください、おゆるし下さい。わたくしは女でございます。

李逵。女でも男でも、狸でもむじなでも、惡い奴が免せるものか。（刀を突きつける。）これ見ろ。これには貴樣の亭主の血が附いてゐるのだぞ。

女房。え。

李逵。亭主は疾うに殺してしまつた。今度は貴樣の番だから、さう思へ。

女房。では、わたくしの夫は……。

李逵。殺してしまつたと云ふのに、わからねえ奴だな。あんな奴をやすめてしまふのは狗ころ一匹をぶち殺すよりも譯はねえのだ。

女房。それでわたくしも安心いたしました。

李逵。（少しおどろいて。）なんだ。貴樣の亭主は殺されたといふのに、何が安心だ。

女房。それですから安心だと申すのでございます。まあ、お聽きください。實はわたくしには六十五歳になる母がございます。

李逵。また六十五歳か。貴樣もおれをだます氣だな。

女房。いえ、ほんたうでございます。

李逵、嘘をつけ。いくら俺でも、もう其手は食はねえぞ。

（李逵は立ちかゝるを、女は遮る。）

女房。まあ、兎もかくも仕舞までお聽きください。あなたに殺されたわたくしの夫と申すのは、こゝらでも評判の惡者でございます。それがわたくしに眼をつけまして、邪が非でもおれの女房になれ、忌だといへば貴樣のおふくろを殺してしまふと云つて嚇すのでございます。

李逵。あんな奴のことだから、そのくらゐの無法は云ひ兼ねねえ。そこでどうした。

女房。わたくしとしましては、あんな惡者に連れ添ふこゝろは微塵もございませんが、もし不承知を申しましたら、大事の母がどうなりませう。（泣く。）わたくし一人ならばいつそ殺された方が優しだとも思ひますが、母の身の上に萬一のことがございましては……。

（女房は聲をあげて泣きくづれる。李逵もだん〳〵に氣が折れて、泣いてゐる女の姿をぢつと眺める。）

李逵。それでよんどころ無しに、あいつの女房になつたのか。

女房。何事も親の爲と辛抱して、わたくしは身を切られるよりも辛い思ひを忍んで、たうとうあの男に連れ添ふことになつたのでございます。あの男はあなたに向つて、どんなことを申上げたか知りませんが、わたくしの母を自分の母のやうに詐つて、口から出まかせのことを列べ立てたに相違ございません。

李逵。（うなづく。）そんなことかも知れねえ。どうもあいつは惡い奴だ。

女房。まつたく惡い奴でございます。現に唯今もあなたに蒙汗藥をのませろと勸めまして、いくらわたくしが斷つても承知しませんので、困り果てゝしまひました。

李逵。あいつが蒙汗藥をのませろと云ひ出したのか。恩を仇で返さうとする畜生め。

女房。さういふわけでございますから、あの男があなたのお手にかゝりましたのは、わたくしに取つては勿怪の幸ひでございました。あの男がこの世界から消えてしまへば、わたくしは勿論、母もどんなに喜ぶか知れません。

李逵。むゝ、さうか。さうと知つたら、もつと早く來て、あいつを押片附けてしまへばよかつたな。

女房。それでも今夜來て下すつたので、これから先の長い月日が助かります。あなたはわたくし

李　逵。　共の命の親でございます。神さまよりも佛様よりも有難いお方でございます。（伏拜む。）（懐ろより十兩の銀を出す。）この金はあいつにだまされて、さつき惠んで遣つたのだが、おれの金をおれが取返すのに仔細はねえから、あいつをぶち殺したときに懐ろから取戻して置いたのだ。改めておまへに遣るぞ。

女　房。　この上にそんなお惠みを受けましては、あまりに勿體なうございます。

李　逵。　遠慮せずに貰つて置け。亭主が死んだらば早く家へ歸つて、おふくろと一緒に仲好く暮せ。

女　房。　はい。（泣きながら銀を受取る。）

李　逵。　實はおれもこれからおふくろを迎ひに行くのだ。おれの故郷には兄きがゐるから別に間違ひはあるめえと思ふが、こんな話を聞くと、おれも何だかおふくろの事が案じられて來た。これからすぐに行くとしよう。（起ちあがる。）

女　房。　もう夜が更けましたから、穢いところではございますが、今晩はこゝにお泊りなさいまして、明日早く御出立なされては如何でございます。

李　逵。　なに、もうこゝからはそれほど遠くもねえから、急いで行けばあしたの午頃には着くだらう。おれの家はこの先の百丈村といふところだ。

女　房。　百丈村……。それにしてもまだ餘ほどの道程でございます。（心ありげに摺り寄る。）たとひ惡者でも夫に別れまして、今夜はわたくし一人でさびしうございます。お願ひでございますから、一と晩お泊り下さいまし。

李　逵。　（無頓着に。）いや、泊つてゐては遲くなる。おれの荷物を取つて來てくれ。

女　房。　それではせめて御飯を召上つて……。

李　逵。　飯もいらねえ。おれは早くおふくろの顏が見たいのだ。

女　房。　はい、はい。

（女房は引返して内に入り、探りながらに窓をあければ、月のひかり流れ入る。それをたよりに、女房は李逵の包みを拾ひて表へ出で來る。）

女　房。　どうしてもお立ちでございますか。

李　逵。　むゝ。（包みを取らうとする。）

女　房。　でも、この先には虎が出ると申します。

李　逵。　（じれて包みを引つたくる。）虎でも追ひはぎでも何でも來い。そんなことを恐れるおれぢやあねえ。

（李逵は足早に向ふへ立去る。女房はあざ笑ひながら跡を見送り、やがて懐ろより小さい呼子の笛を出して吹く。下のかたより子分の悪者張乙出づ。）

女房。　おまへはどこにゐたんだね。飛んでもないことになつてしまつたぢやあないか。内の人が殺されたよ。

張乙。　兄いが殺された。

女房。　そこらに死骸がありさうなものだが、氣が付かなかつたかえ。あいつめ、川へでも蹴込んでしまつたかも知れない。わたしも危なく殺されさうになつたのを、好い加減にだまして助かつたのさ。

張乙。　さうして、殺した奴は誰だ。

（女房は張乙の耳にさゝやく。）

女房。　それだから早く訴へて、内の人のかたき討をしておくれよ。

（張乙はうなづいて下のかたへ走り去る。）

女房。　（李逵に貰つた銀を出してみる。）これつぱかりの金で亭主の命が買はれるものか。ほんたうに口惜しいねえ。

（山風の音。梟の聲。）

第三幕

（一）

百丈村。李逵の兄李逵の家。貧しげなる農家にて、正面に古びたる家、下のかたに毀れかゝりたる物置小屋ありて、庭の入口には扉もなく、形ばかりの低い疎籬が結つてあり。庭には桃の花など咲きて、上のかたには菜の花の咲きたる畑あり。鶏の小屋あり、家の外には矢はり菜の花の畑を隔てて、森または山などみゆ。

（第二幕の翌日、晴れたる日。李逵の妹秋芳、田舎娘のすがたにて、鶏に餌をあたへてゐる。鶏の聲きこゆ。向ふより李逵出づ。）

李逵。　やれ、やれ、さすがのおれも少し草臥れた。（あたりを見まはす。）幾年經つても故郷のけし

幕

きは些とも變らねえな。相變らず穢ねえ家ばかりだ。

（籬の外より内をうかゞふ時、秋芳は餌を遣り終つて引返し、表に立つてゐる李逵に眼をつけて、恐るゝやうに内へ逃げ込まうとする。）

李逵。（聲をかける。）おい、おい。

秋芳。（不安らしく。）はい。

李逵。おまへは妹ぢやあねえか。

秋芳。え。

李逵。（すゝみ入る。）おれを見忘れたか。兄きの李逵だ。

秋芳。（兄の顔をぢつと見て。）おゝ、兄さんでしたか。

（秋芳はなつかしさうに近寄れば、李逵もなつかしさうに其肩に手をかける。）

李逵。大きくなつたな。途中で逢つたら見違へるくらゐだ。

秋芳。兄さんもお達者で結構でございます。

李逵。おふくろも大兄いも無事だらうな。

秋芳。内の兄さんも達者で、けふも早くから起きて裏の畑へ行つてゐます。

李逵。大兄いは達者で……。おふくろはどうした。

秋芳。阿母さんは……。（云ひ淀む。）

李逵。阿母さんは……。どうかしたか。

秋芳。からだは丈夫ですが……。（聲を曇らせる。）去年の春頃から兩方の眼が……。

李逵。（おどろく。）兩方の眼が……。潰れたか。

秋芳。あい。

李逵。どうして潰れたのだ。

秋芳。おまへがお尋ね者になつて姿を隠してから、三年も五年も便りがないので、よるも晝も泣いてばかり……。

李逵。それでたうとう泣き潰したか。（ため息をつく。）それでも達者だといふのが切めてものことだ。早く逢ひたい、逢はせてくれ。

秋芳。あい、あい。今こゝへ連れて來ます。

（秋芳はいそいで奥に入る。李逵はそこらを懐しさうに眺めてゐる。やがて奥の扉をあけて、秋芳は母の手をひいて出づ。母は六十ばかりで、盲目である。）

母。　李逵が歸つて來たといふが、どこにゐる、何處にゐる。

李逵。（かけ寄つて母の手を把る。）阿母。李逵はこゝにゐるよ。

母。　おゝ、李逵か。よくまあ無事で歸つてくれた。久しぶりでお前に逢はれるしるしか、ゆうべもお前の夢をみた。

李逵。（涙をはら〳〵と流す。）阿母。堪忍してくれ。長いあひだ色々の苦勞をかけて、濟まなかつた。濟まなかつた。なにしろ庭先ぢやあ話は出來ねえ。さあ、奥へ行かう。

母。　（躊躇して。）勿論奥へ通してやりたいが……。なあ、秋芳。

秋芳。　さあ。（これも躊躇してゐる。）

李逵。　（不審さうに。）内へ這入つては惡いのか。

母。　大兄いの李發がふだんからお前のことで腹を立てゝゐるのでな。

秋芳。　（悲しさうに。）親や兄に迷惑や嘆きをかける李逵のやうな憎い奴は、決して門端をも蹈ませてはならない。萬一うか〳〵戻つて來たら、すぐに逐ひ出してしまへと、不斷から堅く云ひ渡されてゐるのでございます。

李逵。　おれが戻つたらすぐに逐ひ出してしまへ……。なるほど正直一圖な兄きの氣性では腹を立てるのも無理はねえ。（かんがへる。）併しもう心配することはねえ。おれは近ごろ運が向いて、立派な役人になつたのだ。

秋芳。　え、おまへが立派なお役人に……。

母。　（探りながら取付く。）これ、ほんたうか、本當か。

李逵。　本當だ、ほんたうだ。そこで、今までの不孝のおわびに、おれは阿母を迎ひに來たのだ。おれと一緒に來れば、屹と一生安樂に暮させるよ。（秋芳に。）かう見えてもおれは懷ろに大金を持つてゐるのだから、おまへにも好い着物をたんと買つてやるぞ。

母。　それはまあ夢のやうな話だが、お前はほんたうにお役人になつたのかえ。

李逵。　おれの正直は阿母も知つてゐるぢやあねえか。なんで嘘をつくものか。

秋芳。　それが本當なら、こんな嬉しいことはありません。内の兄さんもさぞ喜ぶでせうねえ。

母。　ふだんは何と云つてゐても、そこは兄弟の人情で、弟の出世を屹とよろこぶに相違ないよ。

（このあひだに、兄の李發は農夫の姿、鍬を持ちて上のかたより出で、三人の話を聽いてゐたるが、この時つか〳〵と進み出づ。）

李發。　阿母さん、天氣が好いと云つても、あんまり表へ出てゐては惡い。早く内へ這入りなさい。妹も奥へ行け。

秋芳。　でも、李逵の兄さんが久しぶりで歸つて來たので……。

李發。　その歸つて來たのが惡いのだ。（李逵に。）おまへには云ふことが澤山あるが、今更かれこれ云ふのも無益だ。（呶鳴りつける。）默つてこゝを出て行け。

母。　まあ、さう喧嘩腰になつては惡い。李逵も今度出世して、立派なお役人になつたさうだから、その積りで挨拶をしたらよからう。

李發。　（あざ笑ふ。）眼のみえない親はだましても、眼の見える兄を欺すことは出來ないと思へ。立派な役人になつたお前が、ひとりの供をも連れないで、そんな姿でたづねて來ると云ふことがあるものか。嘘も好加減にしろ。人殺しの大泥坊め。

秋芳。　もし、兄さん。

李發。　えゝ、おまへも默つてゐろ。（李逵に。）かうなつたら云つて聞かせるが、貴樣は先年人殺しをして、おれに一方ならぬ迷惑をかけたのを忘れたか。それから方々を飛びあるいて、碌なことは一つもしない。殊に此ごろは梁山泊の强盜共と徒黨を組んで、人ごろしをする、附け火をする、强盜をはたらく。いやもうさん〳〵の亂暴狼藉で、黑旋風李逵を捕へたものには三千貫の御褒美を下さると、こゝらまでもお觸れが廻つてゐるのだ。そこへうかうかと歸つて來たら親が難儀をするか。兄妹が迷惑するか。積つてみても知れたことでは無いか。貴樣の惡い噂をおふくろの耳へ入れまいと、朝に晩に氣を痛めてゐる、おれの苦勞がわからないか。さあ、これだけ云つて聞かせたら、流石の貴樣ももう一言もあるまい。默つて歸れ。早く立去れ。

李逵。　いや、さう云はれると全く一言もないが、過ぎ去つたことはまあ堪忍してくれ。察しの通り、立派な役人になつたといふのは嘘で、實は梁山泊へ這入り込んで、今は一人前の頭領株になつてゐるのだ。就ては今までの罪ほろぼしにおふくろを引取つて、出來るだけの孝行をしたいと思つて、かうしてわざ〳〵尋ねて來たのだ。おふくろばかりぢやあねえ。兄きや妹も一緒に來る氣があるなら、屹とおれが世話をして安樂の月日を送らせてみせる。どうだ、おまへ達も一緒に來ねえか。

李發。　この通り貧乏はしてゐるが、おれは正直潔白の人間だ。貴樣のやうな奴を弟に持つたのさへも、世間に對して申譯がないと思つてゐるのに、貴樣と一緒に梁山泊へ行つて、泥坊の

仲間入りが出來るものか。馬鹿も休み〳〵云へ。

李　逵。　兄きは相變らず氣むづかしいな。それぢやあ仕方がねえ、おふくろだけを連れて行かうよ。

李　發。　おれたちは勿論だが、おふくろだつて貴樣なんぞに渡してやられるものか。これはおれが大事の親だぞ。

李　逵。　（少しく激して。）お前ひとりの親ぢやあねえ、おれに取つても大事のおふくろだ。おれの親をおれが連れて行くのに不思議があるものか。むやみに兄き風を吹かせるな。

母。　まあ、おたがひに喧嘩をしては困る。なんとか穩かに相談の仕樣がありさうなものではないか。

李　逵。　おれは穩かにする氣でも、兄きの方から喧嘩を賣つて來るのだから仕方がねえ。さあ、誰でも邪魔をしてみろ。おれは腕づくでも自分の親を連れて行くのだぞ。

李　發。　腕づくでも連れて行く……。では、おれが邪魔をしたら、貴樣はどうするのだ。

李　逵。　（じれて。）邪魔をする奴は、どいつでもかまはねえ。みんなぶち殺してしまふのだ。

李　發。　むゝ。よく云つた。（地に坐る。）さあ、李逵。おれをぶち殺して、おふくろを連れて行け。

李　逵。　え。（少しく困る。）

秋　芳。　（李發に縋る。）お前まあそんな短氣なことを……。

李　發。　いゝから打つちやつて置け。（李逵に。）さあ、おれを殺さないか。貴樣は人殺しには馴れてゐる筈だ。ぶち殺すとも、蹈み殺すとも、勝手にしてくれ。

李　逵。　そんな無理を云つておれを困らせるなよ。なんぼ俺だつて、現在の兄きをぶち殺せるものか。

李　發。　それでもぶち殺すと云つたではないか。

李　逵。　それは賣り詞に買ひ詞で、もとより本氣で云つたわけぢやあねえ。まあ、起きてくれ、起きてくれ。（李發の手を把つて引き起さうとする。）

李　發。　（ふり拂ふ。）いやだ、いやだ。早く殺せ。

李　逵。　（いよ〳〵困る。）おい、兄貴。おれが惡かつた。あやまるから堪忍してくれ。

李　發。　吃とあやまるか。

李　逵。　むゝ、吃とあやまるよ。惡かつた、恐れ入つた。

李　發。　（起ちあがる。）恐れ入つたらば、おれの云ふことを肯いてすぐに立去れ。

李　逵。　え。

李發。それともやつぱり俺を殺すか。

李逵。（持てあまして。）おまへは弟泣かせだな。

李發。自分の親泣かせ、兄妹泣かせを棚にあげて、弟泣かせとは何のことだ。さあ、素直に立去れば好し。左もなければお尋ね者の黒旋風李逵がこゝの家に來てゐることを、村中へ呶鳴つてあるくぞ。

李逵。（おどろいて。）馬鹿なことを云へ。

李發。そんならすぐに出て行くか。

李逵。（よんどころなく。）むゝ、出て行くよ。

李發。ぐづ〳〵してゐると呶鳴るから、さう思へ。思ひもよらない惡魔が舞ひ込んで來て、飛んだ暇つぶしをしてしまつた。さあ、阿母さんも妹も内へ這入るがいゝぞ。

母。李逵はもう歸るのかえ。

李發。まあ、お這入りなさい。

（李發は妹に眼で知らせて、無理に母の手を取らせ、追ひ立てるやうにして自分も一緒に奥へゆく。取殘された李逵は忌々しさうに舌打ちする。）

李逵。やつぱりおれの兄きだけに、なか〳〵強情だな。どうしたらよからう。

（李逵はあるきながら思案し、懐ろより五十兩の大銀を取出して紙につゝみ、家の入口の閾の上に乘せ置きて、自分はそつと物置小屋にかくれる。鷄の聲。奥の扉をあけて、李發と秋芳出づ。）

李發。あんな奴に大事のおふくろを渡せるものか。

秋芳。（あたりを見まはす。）もう何處へか行つてしまつたやうですよ。

李發。あいつも流石に閉口して、思ひ切つて立去つたとみえる。

秋芳。（彼の紙包に眼をつける。）おや、こゝにこんなものが……。（拾つて檢める。）あら、こんな大きいお金が這入つてゐました。

李發。（取つてみる。）これは五十兩の大銀だ。こんな物がこゝらにある筈がない。屹とあいつが置いて行つたに相違ないぞ。

秋芳。なぜ置いて行つたのでせうねえ。

李發。おれは貧乏だから、金の顔をみたら心が柔ぐとでも思つたのだらう。なんにしてもこんな物を受取つては係り合ひだ。どうであいつの持つてゐる金だから、出所の怪しいのは知れ切つてゐる。早く追つかけて行つて、突つ返して來なければならない。

（李發は銀を持つて表へ出て、足早に向ふへ追つてゆく。秋芳も表へ出て不安らしく見送る。物置小屋より李逵忍び出で、ぬき足をして家の奥に入る。秋芳は向ふを見ながら内へ引返して來る時、出逢ひがしらに李逵は母の手をひいて出づ。）

秋芳。　あれ、兄さん……。

李逵。　靜にしろ、靜にしろ。

母。　兄に斷らないで行つてもよからうか。

李逵。　斷れば不承知にきまつてゐるから、さあ、今のうちに早く逃げ出すのだ。

秋芳。　でも、むやみに阿母さんを出してやると、わたしが兄さんに叱られますから、まあ待つてください。

李逵。　えゝ、待つてゐられるものか。兄きが歸れば又一と騷動だ。さあ、阿母。早く……早く……。

（李逵はあわたゞしく母の手を取つて引立つれば、秋芳も母の手を取つて引き戻さうとし、たがひに捨臺詞にて爭ふ。盲目の母はうろ〳〵してゐる。李逵はじれて秋芳を蹴倒し、母を背負ひながら下のかたへ逃げ去る。秋芳は起きようとして又倒れる。向ふより李發は引返して出づ。）

李發。　あいつめ、馬鹿に足の早い奴だ。ひよつとすると、そこらに隱れてゐるのではないかな。

（李發は足早に引返して來て、倒れてゐる秋芳を見ておどろく。）

李發。　これ、どうした、どうした。

秋芳。　おまへの出て行つたあとへ兄さんが忍んで來て……。

李發。　さては案の通りだ。それからどうした。

秋芳。　阿母さんを連れて行きました。

李發。　（足ずりして。）泥坊野郎め、到頭おふくろを盗んで行つたか。して、あいつはどつちの方へ行つた。

秋芳。　阿母さんをかゝへて、あつちの方へ……。（下のかたを指さす。）

李發。　眼の不自由なおふくろを抱へて遠くは行くまい。直に追つかけて取返して來る。

（李發は行きかゝるを、秋芳はひきとめる。）

秋芳。　お前、追つかけて行つて、もしや怪我でも……。

李發。　なに、大丈夫だ。大丈夫だ。

（李發は妹をつき放して、下のかたへ駈けてゆく。）

（二）

沂嶺の山中。まん中に古りたる山神廟ありて、正面に金甲の山神の像を安置し、その前に白木の小さき卓を据ゑて香爐を置く。入口の扉はあけ放してあり。左右には古木おえしげりて、下のかたへ降りてゆく坂路あり。

（第二幕に出でたる一つ家の女房と張乙とが身輕にいでたちて、木の根に腰をおろしてゐる。水の音。）

張乙。姐御は強いね。この山路を平氣であるき通したには驚いた。

女房。こゝらに住んでゐる者が山路を恐れてゐてどうなるものかね。おまへは男のくせに意氣地がないね。

張乙。なんと云はれても仕方がねえ。まつたく少し草臥れて來た。

女房。百丈村といふのはまだ遠いのかえ。

張乙。この山を越してしまへば眼の下だが、行きつく頃には日が暮れるだらう。

女房。もう捕方が廻つたらうか。

張乙。わつしが訴へて出ると、すぐに手が廻つた筈だが、李逵といふ奴もなか〳〵手剛いから、うまく取ッつかまへて呉れゝばいゝが……。

女房。わたしも何だか不安心だから、かうして樣子を見とゞけに來たのだが、いくら李逵だつて四方八方を取卷かれては、所詮逃げ路はあるまいよ。あいつがうまく捉まつてくれゝば、亭主のかたき討をした上に、御褒美が貰へるといふわけだから、どうしてもあいつを捉まへさせなければならないのさ。（空をみる。）ぐづ〳〵してゐると、日が暮れる。さあ、行かうよ。（起ちあがる。）

張乙。（よんどころなしに起つ。）そこで李逵が捉まつて、御褒美を貰つたらおまへさんはどうするね。

女房。亭主にわかれて、あんな所にひとりで暮してもゐられないから、町へ出て何か商賣でも始める積りさ。

張乙。商賣をはじめるにしても、男の手が無くつちやあ困るだらう。

女房。困るかどうだか、まあ遣つてみようよ。

張乙。わつしが手傳ひに行つて遣らうか。

女房。（笑ふ。）おまへもなか〳〵親切だね。

張乙。いくら氣が強くつても、女ひとりぢやあ屹と困るよ。兄いが死んだからと云つて、すぐにお前さんを見放しちやあ、どうもわつしの義理が濟まねえ。

女房。（笑ひながら張乙の肩を叩く。）お前はまつたく旨いことを云ふね。まあ、そんな相談はあとのことさ。

張乙。いゝかえ。わつしは屹と手傳ひに行くぜ。

女房。漆ッ濃い人だね。そんなことを今云つてゐたつて仕様がないぢやあないか。（嚇すやうに。）日が暮れると、こゝらには虎が出るよ。

張乙。（ぞつとして見かへる。）ちゑえねえ。虎に出られちやあ堪らねえ。早く行かう。

女房。（笑ふ。）色氣よりも命の方が大切だからね。

張乙。なにしろ不氣味だ。（あたりを見返りながら。）早く行かう。

（山風の音。張乙はいよ〳〵急き立てる。）

張乙。さあ、さあ、行かうぜ。

女房。お前が詰まらないことを云つて、ぐづ〳〵してゐるんぢやあないか。

（女房は先に立ち、張乙は氣味惡さうに見かへりながら上のかたへ行かうとして立ちどまる。）

女房。あ、ちよいとお待ちよ。

張乙。（ぎよつとして。）虎かえ。

女房。虎ぢやあないが……。向ふから來るのはどうも李逵らしいよ。

張乙。李逵が來た……。あいつ無事に逃げて來たのかしら。（上のかたを見る。）年寄りを連れてゐるやうだね。

女房。おふくろを迎ひに行くと云つてゐたから、屹とあいつだよ。（かんがへる。）なにしろこゝで逢つちやあ面倒だから、隱れて樣子を見るとしよう。

張乙。むゝ、見付かつちやあ危ねえ。

（ふたりは首肯き合ひて、山神廟のうしろに隱れる。山風の音。上のかたより李逵は母に木の枝をつかせ、手をひいて介抱しながら出づ。）

李逵。こゝが峠だ。これからは下り坂で、骨の折れることはねえから安心だ。

母。わたしには判らないが、こゝが峠かえ。何年にも通つたことはないが、隨分嶮しい山路の

やうだね。わたしを負つたり、手をひいたりして、お前こそ骨が折れたらう。梁山泊とやらはまだなか〳〵遠いのだらうね。

李逵。なに、些つとぐらゐ遠くつても、村へ出たら馬をやとひ、町へ出たら轎をやとひ、樂々と道中をさせるから、この山を出るまでの辛抱だ。日の暮れないうちに早く行かうよ。（母を引立てる。）

母。これ、待つておくれ。わたしは喉が渴いてならない。そこらに水はあるまいか。

李逵。水が欲しいのかえ。そこらの谷川へ行つて汲んで來てあげよう。

母。後生だから一杯飲ませておくれよ。

李逵。水はあるが、汲んで來るものがねえ。（あたりを見まはして廟のなかに眼をつける。）むゝ、こゝに好いものがある。

（李逵は廟内に入りて香爐を持ち出して來る。）

李逵。こゝで香爐をみつけたから、灰をぶちまけて綺麗に洗へばいゝだらう。では、こゝに待つてゐなさい。（母を扶けて木の根にかけさせる。）どこへも行つちやあいけねえぜ。

母。わたしは眼が不自由だから、どこへも行かれる筈がない。

李逵。では、すぐに行つて來るよ。

（李逵は香爐を持ちて、下のかたの木立のうちに入る。廟のうしろより女房と張乙が忍び出で、李逵のゆくへを見送り、いつそ引返して訴へ出ようかと手眞似にてさゝやき合ふ。この時、山風いよいよ烈しく、二人は上のかたを見かへりて俄にうろたへ騷ぎ、あわてゝ廟内に逃げ込みて、内より扉をしめる。上のかたの木立のあひだより一匹の小虎あらはれ出で、母のそばへ狙ひ寄る。その足音に氣がついて母はみかへる。）

母。李逵が歸つて來たのかえ。

（虎は低く唸る。）

母。（おどろいて飛びあがる。）あ、虎だ、虎だ。これ、李逵はゐないか。虎が出た、虎が出た。

（虎は唸りながら近寄る。母は枝を杖にして探りながら逃げまはり、顚けつ轉びつ上のかたの木立のうちに入る。虎は追つてゆく。山風の音。下のかたの木立のうちより又もや一匹の大虎あらはれ出で、これも身を跳らせて母のあとを追つてゆく。廟の扉をあけて、女房と張乙がそつと窺ふ。）

張乙。たうとう虎が出て來たぜ。あの婆さんは啖はれるだらうな。

女房。とても助かるものかね。わたし達も見つかると大變だよ。

（ふたりは再び扉をしめる。李逵は香爐に水を汲んで出づ。）

李逵。おや、おふくろが見えねえぞ。あれほど云つて聞かせて置いたのに、ひとりで何處へ行つたのだらう。おい、阿母……阿母……。はてな。

（李逵は香爐を下に置いて、氣づかはしげに走り廻り、しきりに母を呼んでゐると、下のかたより又もや一匹の小虎出づ。）

李逵。（みかへる。）この獸もの、貴様等の餌食になつてたまるものか。黑旋風李逵を知らねえか。

（李逵は空手にて虎と闘ひ、遂にこれを毆り殺す時、又もや一匹の大虎跳り出で、咆哮して李逵に飛びかゝる。）

李逵。又來やあがつたか。畜生め。

（李逵は大虎を相手に奮闘、遂にこれをも毆り殺し、一息つきながら香爐の水をのむ。）

李逵。（俄に叫ぶ。）むゝ、わかつた、判つた。おふくろは虎に遣られたのだ。それにしても、どつちの方角へ啣へて行かれたかな。

（李逵は狂氣の如くにそこらを見まはしながら、上のかたの木立のうちに跳り入る。廟の扉をあけて、張乙は窃と表をうかゞひ、二匹の虎の倒れてゐるのを見て、わあと驚いて、又もや扉をしめる。

山風はげしく、上のかたより以前の大虎と小虎が走り出づるを、李逵は刀をぬいて追つて出づ。）

李逵。畜生、親のかたきだ。逃がすものか。

（李逵は二匹の虎を追ひまはして闘ひ、先づ小虎を斬り殺し、次に大虎を仕留め、流石にがつかりして地に坐る。）

李逵。あゝ、飛んだことになつてしまつた。殘念だ、殘念だ。

（上のかたより李發出づ。）

李發。おゝ、李逵ではないか。

李逵。おゝ、兄きか。

李發。（虎の死骸をみて。）やあ、こゝに四匹の虎が倒れてゐる。これはどうしたのだ。皆んなおまへが殺したのか。

李逵。むゝ、殺しは殺したが……。（聲をあげて泣く。）兄貴、堪忍してくれ、堪忍してくれ。

李發。おふくろはどうした。

李逵。それだからあやまるのだ。堪忍してくれ、堪忍してくれ。（つゞけて泣く。）

李發。（ぎよつとして。）では、もしや虎に啖はれたのではないか。

李　逵。　おふくろが水を飲みたいといふので、谷川へ汲みに行つてゐる留守に、虎の畜生めが啣へて行つたのだ。その木のあひだに血がこぼれてゐるので、それを傳つて探しに行くと……（二匹の虎を指さす。）こいつ等がもう大抵喰つてしまつた所だ。

李　發。　さうか。（嘆息する。）おれのおふくろが虎の餌食にならうとは、今朝までも思ひ付かなかつた。おれがもう一足早く來たら……。えゝ、情ないことになつたな。（これもがつかりして地に坐る。）

李　逵。　（這ひよる。）これもみんなおれが惡かつたのだ。梁山泊へ連れて行つて、親孝行をしようと思つてゐたのに、その孝行が却つて不孝になつてしまつた。こんな虎を何匹ぶち殺したところで、どうなるものか。おれもいつそ虎に喰はれて死んでしまへばよかつた。

李　發。　（李逵は地に俯して慟哭す。李發も泣く。）（涙をぬぐひつゝ。）こゝでもう一度兄弟喧嘩をしても仕方がない。おれは何事も諦めた。せめては虎が啖ひ殘しの骨でも拾ひあつめて、一刻も早く埋葬するより外はあるまい。おふくろの死んでゐるところへ案内してくれ。

（李發は力なげに起ちあがれば、李逵も悄々として起ち、兄を案内して上のかたの木立のうちに入る。廟の扉をあけて、女房と張乙出づ。）

張　乙。　さすがの李逵もおふくろを啖はれて、ひどく弱つてゐるやうだね。

女　房。　その弱つてゐるのがこつちの附目さ。おまけに四匹の虎を殺して、あいつも隨分疲れてゐるやうだから、いつものやうに暴れることも出來まい。おまへは早く行つて村の人を呼んでおいでよ。

張　乙。　村の奴等ばかりで好いだらうか。

女　房。　村の奴でも獵夫でも何でもかまはないから、なるたけ大勢呼びあつめておいでよ。わたしはこゝに殘つて見張つてゐるから。

張　乙。　よし、よし。

（張乙は引返して下のかたへ去る。女房は上のかたを窺ひて、再び廟内にかくれる。李發と李逵はうつむき勝に出づ。）

李　發。　死骸のありかが判つたらそれで好い。おれひとりの手ではどうにもならないから、これから引返して村の人たちの加勢をたのんで來よう。

李　逵。　おれも手傳つて運ばうよ。

李發。　おまへはお尋ね者だから、人に顔を見られてはよくない。こゝはおれに任せて早く歸れ。

李逵。　でも、これで別れてしまつては氣が濟まねえ。

李發。　（叱る。）わからない奴だ。さつきもおれの云ふことを肯かないで、こんなことを仕出來したのではないか。なんでもいゝから、おれに任せて早く行けといふのに……。おれはおふくろを無くなしただけでもう澤山だ。この上に弟の首に繩の付くのを見てゐられると思ふか。

李逵。　（泣く。）なぜお前はそんなにまで俺に苦勞をかけたいのだ。

李發。　（泣きながら兄の手を把る。）もうなんにも云はねえ。堪忍してくれ、堪忍してくれ。判つたら早く行つてくれ。おれも早く行かなければならない。

（李發は把られし手を力なげに振拂ひて、上のかたへ立去る。李逵は何か云ひたさうに、そのあとを追はうとして又躊躇し、立木に倚りかゝつて思ひに沈んでゐる。廟の扉をあけて、女房出づ。）

女房。　もし、あなた……。

（李逵はだまつてゐる。）

女房。　（進みよる。）もし、あなた……。どうも飛んだことでございましたね。

李逵。　（みかへる。）誰だ……。おゝ、お前か。どうしてこんな所にゐるのだ。

女房。　百丈村の親類をたづねて歸る途中、向ふの森から虎が出て來るのを見ましたので、あわてて この廟のなかに隱れてゐました。

李逵。　それは運が好かつたな。それではさつきからの樣子を知つてゐるか。

女房。　はい。（涙をぬぐふ。）まことにお悼はしいことで、なんとも申上げやうがございません。

李逵。　察してくれ。おれはもうがつかりしてしまつた。

女房。　お察し申します。さぞお力落しでございませう。

李逵。　まつたく力が拔けたやうだ。（再び木の根に腰をかける。）お前はこれから獨りで歸るのか。

女房。　だん〳〵に日が暮れかゝつて參りますし、怖ろしい虎がまた出て來ては大變だと思ひますと、もう跡へも先へも行かれなくなりました。甚だ勝手なことを申すやうでございますが、山を降つて里へ出ますまで御一緒にお連れ下さいますまいか。

李逵。　どうでおれも下るのだから、一緒に連れて行つて遣りたいが、おふくろに死なれた上に、四匹の虎と鬪つたので、流石のおれも疲れてしまつた。おれはもう少し休んで行くから、おまへはまあ先へ行つてくれ。

女房。　いくらあなたでも、さぞお疲れでございませうね。

李　逵。　むゝ。こんな筈はないのだが、今日ばかりはひどく疲れた。

女　房。　（笑ふ。）そんなに疲れてゐるところへ、敵が來たらどうなさる。

李　逵。　敵とは、虎か。

女　房。　虎ばかりではございますまい。

李　逵。　（かんがへる。）では、捕手か。

女　房。　捕手のほかにも……。

李　逵。　（不審さうに。）捕手のほかにも……。

女　房。　かういふ敵がゐるぢやあないか。

（女房は隠し持つたる短劍をぬいて、不意に突いてかゝれば、李逵は身をかはして其手を捉へる。）

李　逵。　えゝ、なにをするのだ。

女　房。　亭主のかたきを忘れたか。

（女房はふり拂つて又突いてかゝるを、李逵は二三度遣り違はして捻伏せる。）

李　逵。　いくら疲れてゐても、女に殺されるやうなおれだと思ふか。むゝ、それではゆうべの話はみんな嘘だな。

女　房。　知れたことだ。

（女房は又跳ねかへして突いて來るを、李逵は一刀に斬り倒す。）

李　逵。　こいつもおれを欺してゐたのか。女は虎よりも怖ろしい。

（下のかたにて銅鑼や角笛を吹く聲きこゆ。）

李　逵。　や、あの響きは……。虎狩か。それとも若しや……。（下の方をみる。）むゝ、誰か來たやうだ。

（李逵は女の死骸を木かげへ押遣りて廟内に入る。下のかたの坂路より張乙は先に立ち、弓矢を持ちたる獵夫、武器を持ちたる捕方、棒などを持ちたる農夫など大勢出づ。）

張　乙。　（虎を指さす。）これ見ろ。李逵を生捕れば御褒美のほかに、この四匹の虎もおれたちの物になるのだ。

大　勢。　李逵はどこにゐる、どこにゐる。

張　乙。　兄きと一緒にあつちの方へ行つた筈だが……。

（張乙は上のかたを指させば、獵夫や捕方の一部は上のかたへ行きて見まはす。）

張　乙。　それにしても姐御はどうしたか。（廟のまへに來る。）おい、姐御。すつかり手くばりをして

來たよ。おい、姐御……。

（張乙は何ごころなく扉をあければ、李逵は内より一刀に斬り倒す。）

大勢。　わあ、こゝにゐた、こゝにゐた。

（大勢はわや〳〵云ひながら、獵夫は矢をつがへ、捕方や百姓は得物を把り直して左右より取り圍む。李逵は刀をふりあげて身構へする。山風の音烈しくきこゆ。）

これにて幕をおろし、山風の音にてツナギ、道具の出來次第に再び幕をあける。

（三）

沂水縣城に至る街道。上のかたに小さき橋ありて、その下に細き流れあり。正面には畑を隔てゝ村落みゆ。所々に柳の立木ありて、草青みたり。

（第三幕の翌日の午後。朱貴と朱富の兄弟は酒を賣る男にいでたち、荷ひの桶を置きて、柳の下に休んでゐる。蛙の聲。水の音も薄くきこゆ。）

朱富。　兄き。おれたちの待つてゐる人は、もう來さうなものだな。

朱貴。　もうそろ〳〵こゝらへ來る時刻だが……。道が違やあしめえな。

朱富。　一本路の街道だから、旨が歩いてもこゝを通るより外はない。

朱貴。　（起つて向ふをみる。）それにしては些つと遲いな。なにしろ李逵の奴め、飛んだことになつてしまつた。

朱富。　若しやこんな事があるかも知れないと思つて、蔭ながら兄きを附けて遣したのは、流石に宋江明先生の眼は高いな。

朱貴。　さあ、それだから彼奴をおめ〳〵と召捕らせては、山塞へ歸つて皆んなに合せる顔がねえといふものだ。おれもこゝで腕を揮つて、一と芝居打たなけりやあならねえのだから、お前も片棒擔いでしつかり遣つてくれ。

朱富。　（笑ふ。）むゝ、おれはこんなことは大好きだから、今朝から樂しみにしてゐるのだ。

朱貴。　あんまり道樂氣を出して、遣り損じてくれるなよ。

朱富。　大丈夫だよ。はゝゝゝ。

朱貴。　おまへはよく笑ふ奴だな。何がそんなに可笑しいのだ。かう見えても、おれは一生懸命だぞ。

朱富。併しけふの芝居は笑ふ奴が勝だ。むづかしい顔をしてゐては、相手が油斷しないからな。

朱貴。それもさうだが、おまへは些つと笑ひ過ぎるぞ。

朱富。それぢやあ笑ふのを止して、一つ歌はうかな。

朱貴。まあ、よせ、よせ。

朱富。でも、なんだか歌ひたくなつて來た。（歌ふ。）

『ぬしは遼陽わたしは都、
風のたよりもあらばこそ。
合歡の花さく窓の外、
けふも情なく暮れかゝる。』

朱貴。それはなんだ。誰かの詩らしいな。

朱富。白樂天よ。

朱貴。むゝ。白樂天か。李逵も無學だが、おれもあんまり學問のある方ぢやあねえから、そんなことは一向わからねえ。

（向ふより旅の男ひとり出づ。）

朱貴。もし、もし。

旅の男。はい、はい。

朱貴。お前さんはこゝへ來る途中で、科人を送つて來るのに逢ひませんでしたかえ。

旅の男。科人には逢はないが、牛の子を十六匹送つて來るのに逢ひましたよ。

朱貴。牛の子……。そんなものはどうでも好いのだ。

旅の男。それからね、懷姙の女を馬にのせて行くのに逢ひましたよ。あんな大きな腹をかゝへてゐる者を馬なぞにのせて、若し轉げ落ちでもしたら大變だと、わたしはひや〳〵しながら見て通りました。

朱貴。（舌打ちして。）懷姙の女なんぞは、死なうが生きやうが構ふものか。

旅の男。いや、まだある。爰へ來る川端でね。大きい蛙が蛇を呑まうとしてゐました。ねえ、おまへさん。蛙が蛇を呑むといふのは逆さまではないか。

朱貴。（顏をそむける。）もういゝ、もういゝ。そんな話は聞きたくないのだ。

旅の男。聞きたくなければ、呼び止めないがいゝではないか。こつちも先を急ぐのだ。

（旅の男はぶつ〳〵云ひながら上のかたへ立去る。）

朱富。　はゝゝゝゝ。牛の子に懐姙の女はよかつたな。はゝゝゝゝ。

朱貴。　なに、好いことがあるものか。蛙が蛇をのめば何うするのだ。ばか〳〵しい。

朱富。　（向ふをみて、俄に兄の袖をひく。）おい、兄き。今度こそはほんたうに來た、來た。

朱貴。　（おなじく見る。）むゝ、來た。來た、確にあれだ。

（ふたりは橋の下に隱したる劍をあらため、元の木かげに戻りて、何氣なく休んでゐる。水の音し向ふより縣の役人曹俊が先に立ち、士兵二十人が李逵を護送して出づ。李逵は首枷をかけられて嚴重に縛られ、檻車に乘せられてゐる。）

曹　俊。　春と云つても、日盛りはもう暑いくらゐだな。

士兵一。　それに今日は馬鹿に天氣が好いので、急いで歩くと、汗が出ます。

曹　俊。　むゝ、おれも少し汗が滲んで來たやうだ。

士兵二。　どうでせう。こゝらで些つと休ませて頂くわけには參りますまいか。

曹　俊。　おれも休みたいのだが、なにしろ大事の囚人を送つて行く途中だからな。

士兵三。　それでも今朝から歩きづめで、隨分くたびれてしまひました。

一　同。　休ませて下さい、休ませてください。

曹　俊。　困つた奴等だな。併し城まではもう遠くもないのだから。そんなに急ぐこともあるまい。こゝで少し休ませて遣らうか。

一　同。　ありがたい、ありがたい。

（一同は地に坐る。曹俊も腰をかける。それと見て朱貴すゝみ出づ。）

朱　貴。　旦那。お酒は如何でございます。

曹　俊。　むゝ、酒か。おれも息つぎに一杯飲みたいのだが……。けふは大事の役目を云ひ付かつてゐるのだからな。

朱　貴。　しかしこれは白酒でございますよ。

曹　俊。　白酒でもやつぱり醉ふからな。まあ、止さう。

朱　貴。　（士兵等に。）旦那がいけなければ、皆さんは如何でございます。

士兵一。　酒と聞いては堪まらないな。

士兵二。　一杯幾らだ。幾らだ。

曹　俊。　これ、これ、むやみに酒などを飲んではならぬぞ。くどくも云ふ通り、大事の囚人を送つて行く途中ではないか。おれでさへも飲みたいのを我慢してゐるのだ。貴樣達に飲ませて

堪まるものか。

朱貴。一體その大事の囚人といふのは何者でございます。

曹俊。それは當時梁山泊に楯籠つてゐる賊徒の一人で、黒旋風李逵といふ奴だ。

朱貴。それでは此のごろ世間に噂の高い、梁山泊の賊でございますか。どんな奴か、面をみて遣らう。

（朱貴は李逵の前に來て、顔をみあはせる。）

朱貴。なるほど、見るから人相のよくねえ、太々しい野郎だ。こいつが黒旋風李逵といふのですかえ。むゝ、どう見ても可愛くねえ面だ。惡黨面とか獄門面とかいふのはこれだらうな。

李逵。やかましい。默つてゐろ。

朱貴。いや、默つちやあゐられねえ。今も聞いてゐる通り、貴樣を送つて行くために、旦那方はおれたちの酒を飲んでくれねえと云ふことになると、貴樣のおかげでおれ達が商賣を仕損ふわけだ。この野郎、繩附きになつてまでも人の商賣の邪魔をするとは、よく〳〵世間に祟る奴だ。

李逵。えゝ、引込んでゐろ。こいつ調子に乘つて、いつまでも憎まれ口を利いてゐやあがると、

踏み殺すぞ。

朱貴。やい、やい、何でおれの顔を睨みやあがるのだ。（今に助けてやると眼で知らせる。）いくら大きな眼玉をむき出しても、怖いことは些つともねえぞ。えゝ、見れば見るほど癪に障る野郎だ。（曹俊に。）もし、旦那。こいつを二つ三つなぐり付けても好うがすかえ。

曹俊。馬鹿をいへ。いくら罪人でも、むやみにお前達になぐらせると云ふことが出來るものか。

朱貴。どうで遲かれ速かれ首の飛ぶ野郎だ。ちつとぐらゐ毆り付けても好さゝうなものだが、いけませんかえ。

曹俊。いけない、いけない。いつまでも罪人にかゝり合つてゐると、お前も飛んだ引合ひを食ふぞ。

朱貴。（びつくりして。）えゝ、飛んでもねえ。こんな奴の引合ひを食つてたまるものか。やれ、やれ、怖ろしい。怖ろしい。

（朱貴は再び李逵に眼くばせして、早々に元のところへ戻ると、入れ代つて朱富が笑ひながら進み出づ。）

朱富。（曹俊に。）もし、旦那。今日は御苦勞でございます。

曹　俊。　おまへは誰だ。

朱　富。　わたくしは西門外の酒屋で、毎度御贔屓にあづかりまして有難うございます。

曹　俊。　むゝ、酒屋の亭主か。

朱　富。　あなたはたび〳〵飲みにお出で下さいまして、醉ひが廻るといつでもお歌ひになります。ぬしは遼陽わたしは都――わたくしも今あれを歌つてゐたのでございますが、あなたは見かけによらない粋なお聲でございますね。

曹　俊。　大勢の前で詰まらないことをべら〳〵しやべるな。おまへは立派な店を持つてゐながら、こんなところへ稼ぎに出るのか。

朱　富。　このごろは梁山泊の泥坊めらが無暗にそこらをあらし廻るので、世間がすつかり不景氣になつてしまひまして、迚も店の方だけでは遣切れませんから、かうして往來へ稼ぎに出てゐるのでございます。併しまあ旦那方のおかげで、悪い奴等もかうしてだん〳〵に縄つきになりまして、追々に世間の景氣も直ることでございませう。まことに有難いことでございます。

曹　俊。　今にみろ。そいつばかりではない。梁山泊の奴等なぞは片つ端から皆んな珠數つなぎにしてしまふのだ。

朱　富。　どうかさう願ひたいものでございます。就きましては、旦那方がかうして悪黨共を召捕つて下すつたお禮……と申しては失禮でございますが、まあ世直しの前祝に、こゝで一杯召上つて頂くわけには參りますまいか。

曹　俊。　今も云つたことだが、大事の囚人を護送の途中で、酒をのむのは良くないからな。

朱　富。　わたくしがお禮ごころに差上げるのでございますから、勿論代金を頂戴するわけではございません。（笑ひながら一同をみかへる。）皆さんは如何ですな。

土兵一。　それでは只で飲ませるといふのか。

朱　富。　こゝにあるだけの白酒をみんな御馳走いたしますよ。

土兵二。　ほんたうに只で飲ませてくれるのか。

土兵三。　それはありがたい。早速一杯御馳走にならうではないか。

一　同。　早く呉れ、早く呉れ。

曹　俊。　どうも仕様のない奴等だな。では、大目に見てやるから、たんと飲むなよ。

一　同。　はい、はい。さあ、早く呉れ。

朱　貴。（朱富と朱貴は白酒の桶を持ち出して、瓢を二つに割りたる盃を十個ほど配りあるく。）器が足りませんから、順廻しにねがひます。

（水の音。蛙の聲。ふたりは柄杓にて酒をついで廻れば、一同はよろこんで飲む。）

朱　富。（曹俊に。）旦那もいかゞでございます。

曹　俊。おれか。（飲みたいのを堪へて。）おれは少し困るな。

土兵一。まあ、飲んで御覽なさい。めつぽう好い酒ですぜ。

朱　富。旦那が一杯召上つて下さらないと、ほかの人たちも思ひ切つて飲むことが出來ますまい。まあ、どうぞ一杯……。（大きい瓢を差しつける。）

曹　俊。どうも困るな。それでは折角だから少し注いでくれ。少しだぞ。

朱　富。はい、はい。（なみ〳〵と酒をつぐ。）

曹　俊。（一口飲んで。）うまいな。

朱　富。お口にかなひましたら、何杯でも召上つてください。

朱　貴。さあ、皆さんも御遠慮なしにお飲み下さい。

土兵二。では、遠慮なしに飲ませて貰はう。

土兵三。おれにも注いでくれ。

土兵四。おれにも頼むぞ。

朱　富。（曹俊に。）旦那ももう一つお重ね下さい。

曹　俊。では、もう一杯貰ふかな。（一同に。）貴様たちは羽目をはづして飲むなよ。（曹俊は又飲む。一同もつゞけて飲む。李逵は羨ましさうに見てゐる。）

李　逵。（たまり兼て。）おい、おい、酒屋。おれにも少し飲ませてくれ。

朱　貴。なに、おれにも飲ませろ……。えゝ、巫山けたことをいふな。こいつ何處までづう〳〵しいか數の知れない野郎だ。だれが貴樣なんぞに高い酒を飲ませる奴があるものか。

李　逵。それでも右や左で旨さうに飲んでゐるを見せ付けられると、おれも涎が出るからな。

朱　貴。涎が出ようが、涙が出ようが、それをおれの知つたことか。

李　逵。さう云はずに一杯のませてくれ。お願ひだ、お願ひだ。

朱　貴。えゝ、じれつてえほどに判らねえ野郎だな。（幾たびか眼で知らせる。）これは貴樣のやうな惡い奴に飲ませる酒ではないのだ。（左右をみまはす。）それほど飲みたければ、おれが今そこの溝川の水を掬つて來てやるから、それでも飲め。

（朱貴は瓢を持って上のかたへ行き、水を掬ふやうに見せかけて、橋の下に隠してある二本の劍を取り出し、うしろに隠しながら一同の様子をうかゞつてゐる。そのうちに、一同は次第に醉が廻つて來る。）

朱富。（曹俊に。）旦那。もう一杯如何でございます。

曹俊。いや、もう止さう。空腹に飲んだせるか、馬鹿に醉が廻つて來て、頭がぼゝぼうとして來た。（一同に。）さあ、みんなも好い加減にして、立て、立て。（云ひながら起ち上らうとして、べつたりとなる。）これはいけない。身體がなんだか痺れて來たやうだ。（一同に。）さあ、立て、立て。

一同。はい、はい。

（云ひながら起ち上らうとして、一同も身體が利かなくなり、幾たびか起たうとして又轉ぶ。朱富は朱貴と顔をみあはせて微笑む。）

曹俊。これはをかしいぞ。いよ〳〵手足が痺れて來た。（起たうとして又轉ぶ。）

朱貴。（一本の劍を朱富に渡しながら。）みなさん、どうしたのでございます。

朱富。はゝゝゝゝ。

朱貴。叱つ、まだ笑ふのは早いぞ。

朱富。もうおれには我慢が仕切れない。はゝゝゝゝ。

曹俊。どうも不思議だ。（一同に。）早く立て、立て。

一同。はい、はい。（云ひながら一同は又轉ぶ。）

（朱貴は弟に眼くばせすれば、朱富は李逵のそばに寄りて、繩を解き、首枷をはづしてやる。）

李逵。（起ちあがる。）やれ、やれ、助かつたか。

朱貴。それだから、油斷するなと云ふのだ。こゝらの百姓同様の奴等に生け捕られるとは、なんたるざまだ。

李逵。ふだんならばこんな奴等の五十人や百人は蹴散らしてしまふのだが、おふくろを虎に啖はれて、力の抜けたところを取り卷かれたので、飛んだ馬鹿を見てしまつた。（倒れてゐる一同をみまはす。）こいつ等、おれをひどい目に逢はせやあがつて、いま〳〵しい奴等だ。片つ端から蝦蟆のやうに蹈み殺してしまはう。

朱貴。（支へる。）まあ、詰まらねえ殺生をするなよ。こいつ等を蹈み殺したところで何うなるものか。邪魔の無いうちに早く行かうぜ。

李逵。それにしても一杯飲みたいな。

朱富。大方さうだらうと思ひまして、別に用意して來ました。

朱貴。あんまり可哀さうだから、けふだけはお慈悲で飲ませてやるよ。

（朱富は柳のかげより一つの大きい瓢を持つて來る。）

李逵。ありがてえ、ありがてえ。併しこれは大丈夫か。

朱富。（笑ふ。）安心してお飲みなさい。

曹俊。扨はこいつ等、おれたちに蒙汗藥を飲ませたな。おのれ……。（劍を拔かうとして又倒れる。）

朱貴。（笑ふ。）はゝ、察しの通りだ。蒙汗藥だから命にかゝはるやうなことはねえ。自然に醒めるまでそこに寢ころんでるろ。

朱富。この頃は日が長いから、夕方までには正氣になるだらうよ。はゝゝゝ。

（李逵は立ちながら、瓢の口から酒をのんでゐる。）

朱貴。（李逵の肩をたゝく。）さあ、行かう。

李逵。まあ、待つてくれ。（瓢を振つてみる。）もう少しだ。

朱貴。そんなに飲みたければ、あるきながら飲むことにしろ。

（曹俊をはじめ、一同は正體もなく倒れる。薄く水の音。雲雀の聲。）

朱貴。（空をみる。）好い天氣だな。

朱富。どこかで雀雲がしきりに啼いてゐる。

朱貴。なんと云つても、一年中ではやつぱり春が好いな。

（ふたりは倒れたる者どもを見も返らず、肩をならべて話しながら向ふへゆく。李逵は瓢の酒を呷りながら、そのあとからぶらぶらと附いてゆく。）

――幕――

雁金文七

大正十三年二月作。
昭和三年三月。明治座初演。

初演當時の主なる役割――雁金文七（市川左團次）雷庄九郎（市川壽美藏）ほての市右衞門（市川荒次郎）あんの平兵衞（助高屋高助）極印千右衞門（市川權十郎）越前屋武右衞門（市川左升）番頭傳兵衞（市川米左衞門）手代幸八（市川左近）河内屋の手代彦次郎（市川莚升）文七の母お石（市川紅若）遊女清川（市川松蔦）など。

初演當時は第一、第二の二幕のみにて、第三幕を上演せず。

登場人物――雁金文七。かみなり庄九郎。あんの平兵衞。ほての市右衞門。極印千右衞門。喧嘩屋五郎左衞門。とんびの勘右衞門。因果の清兵衞。三つ引治兵衞。からくり六兵衞。かひたての吉右衞門。越前屋武右衞門。武右衞門の娘おそよ。雁金屋の番頭傳兵衞。雁金屋の手代幸八、おなじく長助。雁金屋の女中およし。文七の母、お石。新町の遊女清川。備前屋のお玉、おなじくお紋。うどん屋與助。ほかに雁金屋の職人、安藏、喜七、彌吉。町役人。捕手。夜番。町内の男。駕籠屋。髮結ひ。ぞめきの客など。

第一幕

大阪、奈良屋町（今の阿波座通り一丁目）の染物屋、雁金屋の店さき。
上のかたに張り出したる二重屋體。正面の壁には註文帳などをかけ、よきところに帳場格子あり。

下のかたは土間にて、正面には奥へ出入りの暖簾口あり。そこは仕事場のこゝろにて、商賣用の藍壺澤山あり。店の軒には結び雁金を染め出したる暖簾をかけたり。

（元祿十四年の春の末。仕事場には職人安藏、喜七、彌吉の三人、あるひは長床几に腰をかけ、あるひは立つてゐる。店さきには町内の男六七人が腰をかけてゐる。）

安藏。（向ふをみる。）どうも遲いことぢやな。

喜七。ほんにおそい。もうやがて四つ半であらうに、なにをしてござるかなう。

彌吉。今朝たしかに下渡すといふ御沙汰があつたからは、今更間違ひもあるまいが……。

安藏。そりや間違ひのないには決まつてゐるが、かう遲いと何だか不安にも思はれる。いつそ途中まで行つて見て來ようか。

男一。いや、いや、案じることはない。

男二。屹と戻つてくるに相違ござらぬ。

男三。まあ、おちついて待つてゐさつしやれ。

（正面の暖簾口より文七の母お石、五十歳ぐらゐ。紋附の小袖をきて出づ。）

お石。倅はまだ戻りませぬか。

喜七。それでわたし達も心配してゐるのでございます。

お石。なにかの故障があれば、誰かひとりは引返して來て知らせる筈。それがなければ屹と無事に戻つてくることゝ思つてはゐるものゝ、倅の顏をみるまでは、どうも心が落ちつかぬ。

男一同。（近所の人達に、）よもや間違ひではございますまいな。

お石。大丈夫ぢや、大丈夫ぢや。

男一同。大丈夫でございませうな。

（云ひながらもお石はまだ不安らしく向ふをながめてゐる。職人共も立つて向ふをみる。）

彌吉。おゝ、谷町の叔父さまが見えた。

安藏。おゝ、店の幸八も一緒ぢや。

男一。ほんに武右衞門殿が戻つて來られた。これで樣子はわかるに違ひない。

（みな〳〵向ふを見つめてゐるところへ、文七の叔父武右衞門、雁金屋の手代幸八を連れて出づ。）

職人等。お歸りなされませ。

男一同。御苦勞でございました。

武右衞。（近所の人達に。）いや、皆さまこそお忙しいところを有難うございました。おかげさまで文

七めは今戻つてまゐります。

お　石。　文七はほんたうに戻つて來ますか。

武右衛。　すぐにあとから戻つてくる。決して案じることはない。文七めは御牢内から曳き出される と一旦御白洲へよび出されて、御役人様から何か色々の御諭しがあつたらしい。それが濟んでからの御引渡しで、思つたよりも些と暇取つたが、ほかに心配するやうなことは何んにもなかつた。まあ、まあ、安心するがよい。

お　石。　それでやう〳〵落ちつきました。倅めは長い牢舍で、よつほど弱つてゐるやうでございましたか。

武右衛。　おれも顏をみたばかりで、くはしいことは判らなかつたが、見たところでは顏の色つやも良し……。

お　石。　おゝ、色つやも良し……。

武右衛。　からだもむく〳〵と肥りかへつて、むかしよりも却て頑丈さうな男になつたやうぢや。

お　石。　（安心したやうに。）おゝ、さうでございましたか。

幸　八。　（向ふをみる。）あれ、あれ、もう若旦那のお駕籠がみえます。

お　石。　おゝ、さうか、さうか。

（お石は前に出る。みな〳〵進み出る。向ふより町役人ふたりが先に立ち、文七をのせたる駕籠をかかせて出づ。あとより雁金屋の番頭傳兵衛と手代の長助も附いて出づ。）

お　石。　みな様、御苦勞でございました。

町役甲。　息子どのは無事にうけ取つて來ました。

町役乙。　先づ〳〵これで安心といふものぢや。

傳兵衛。　ちつとも早く御無事の顏をおふくろ様にお見せ申しませう。

長　助。　さあ、若旦那。こゝがお家でございます。

（駕籠屋は垂簾をあげると、かりがね屋のせがれ文七、廿八歳、今日出牢したる體にて、髭や月代をのばしてゐる。お石はあわてゝ進みよる。）

お　石。　おゝ、文七。よくまあ無事で戻つて來ました。なるほど叔父御のいふ通り、長い牢舍の苦をしやつても、顏の色もよし、肉づきも好し、ちつとも衰へたやうな樣子もみえぬ。やれ、やれ、これでほんたうに安心しました。着がへの着物はちやんと拵へてあるが、なにしろ早く髮月代でもせいでは……。これ、誰か行つて町内の髮結どのを呼んで來てたもれ。

彌　吉。　あい、あい。（下のかたへ走りゆく。）

文　七。　（駕籠を出る。）みな様。いろ〳〵御心配をかけまして何ともお禮の申様もございませぬ。ありがたうございます。（町嚮に挨拶する。）

男一同。　やれ、やれ、おめでたうございた。

町役甲。　さてかうして無事に引き渡せば、もうわたし等の用も濟んだといふものぢや。

町役乙。　では、これでお暇申しますぞ。

お　石。　いづれあらためてお禮にうかゞひます。かへすがへすも御苦勞様でございました。

町役甲。　おふくろ殿もこれで安心。

町役乙。　文七殿もゆつくりと休まつしやれ。

文　七。　御免くださりませ。

傳兵衞。　（町役人二人は挨拶して立去る。傳兵衞は駕籠屋に銀をやる。）

駕籠屋。　さあ、これは御祝儀ぢや。

ありがたうございます。

（駕籠屋二人は空駕籠をかつぎて去る。近所の男共も顔をみあはせる。）

男　一。　文七どのが戻られたら、わたし等ももうお暇としようかの。

男　二。　なにかと取込みのところに、いつまで邪魔をしてゐるでもあるまい。

男一同。　歸りませう、歸りませう。

男　一。　では、文七どの。また逢ひませうぞ。

（文七は默禮する。人々はゆきかゝる。）

お　石。　あゝ、もし、みな様。せがれも無事に戻りましたれば、今晩は手前の内方で心ばかりの祝ひ事をいたしたいと存じます。御迷惑でもございませうが、夕六つまでにお揃ひくださりませ。

男　一。　そのやうな御心配ではお氣の毒ぢやが、お祝ひとあれば伺ひませう。なう、皆の衆。

男一同。　まゐります、まゐります。

お　石。　屹とお待ち申してをります。

男一同。　あい、あい。（打連れて去る。）

武右衞。　やれ、やれ、これで落ちついた。（店に腰をかける。）

文　七。　をぢ様にも一方ならぬ御苦勞をかけまして、申譯もございませぬ。これからは屹と性根を

入れかへまして、みな様にも御恩報じをいたしませう。髪月代でも濟ませましたら、なにを措いてもおやぢ様のお墓へまゐりまして、不孝のお詫をいたして來ようと存じます。

武右衛。　それがよい、それがよい。お上へ不孝の願ひをして、おまへを牢屋へ送つたのも、所詮はお前をまことの人間に生まれ變らせたいと思ふ親の慈悲ぢや。かならず親父どのを恨んではなりませぬぞ。

文七。　それはよく判つてをります。何事もみなわたくしの不孝から起つたことでございますれば、おやぢ様を恨むどころか、唯今も申した通り、早速にお墓へ參つて、くれぐもお詫を致してくる積りでございます。いや、死んだおやぢ様ばかりではございませぬ。（お石に。）おふくろ様。おまへ様にも不孝のあるたけを盡しましたこの文七、なんとお詫を申してよいか判りませぬ。どうぞ御料簡くださりませ。

お石。　はて、その挨拶はあとでゆつくり聽きませう。なにしろそんな姿を大勢にみせては惡い。早く奥へ行つて新しい着物と着かへたがよい。

文七。　なに、これで結構でございます。

お石。　なんの結構なことがあるものか。さあ、さあ、早く奥へ來や。

武右衛。　おふくろがあゝ云ふのぢや。兎もかくも行つて着かへて來やれ。

文七。　はい。（まだ躊躇してゐる。）

お石。　はて、をかしな子ぢや。何をいつまで遠慮する。こゝはおまへの家ではないか。（お石は文七の手を取れば、文七は武右衛門に會釋して、母にひかれて奥に入る。）

武右衛。　これ、長助、幸八。

二人。　はい、はい。

武右衛。　おまへ達は何か用事もあらう。こゝには構はずに奥へ行きやれ。

二人。　では、御免くださりませ。（奥に入る。）

彌吉。　（下のかたより彌吉は髪結を連れて出づ。）髪結どのをすぐに連れて來ました。

髪結。　今日はおめでたうございました。

傳兵衛。　若旦那は奥にござる。さあ、わたしが案内しませう。

武右衛。　いや、番頭どのは些と待つてくだされ。これ、彌吉、おまへが髪結どのを案内してやれ。

彌吉。　あい、あい。

（彌吉は髪結を案内して奥に入る。）

武右衛。（他の職人に。）けふは仕事も休みの筈、奥へ行つてなにかの用でも手傳つてくれ。

安　藏。ほんに今夜のお客の支度もございます。

喜　七。今のうちに水でも汲み込んで置きませうか。

（安藏と喜七は早々に奥に入る。）

武右衛。番頭どの、こつちへ寄らつしやれ。

傳兵衛。はい、はい。（店に腰をかける。）

武右衛。今のおふくろの様子を見さつしやれたか。

傳兵衛。若旦那がお戻りになるといふので、おふくろ様はゆうべも碌々おやすみにならなかつたくらゐ。まして御當人の顔を御覽になりましては、あのやうに飛び立つてお喜びなさるも無理はござりませぬ。親子の情合はまた格別でござりますな。

武右衛。さあ、その情合が文七めの身の毒ぢや。自分の兄を褒めるでないが、死んだ主人の文五郎どのは、商人なれども性根の屹と据つた男、奈良屋町のかりがね屋といへば、大阪中でもきこえた老舗の、屋臺骨を踏まへてゐただけあつて、生みの子なれど身持放埒の文七めを見限つて、お上へ不孝の届けを出された。

傳兵衛。あまりさつぱりした思ひ切りやうで、わたくし共もびつくり致しました。

武右衛。そこが兄きぢや。わし達も一旦はおどろいて、せめては勘當ぐらゐで好ささうなものと意見したら、兄きはすぐに頭を振つて、いや、いや、それは理窟が違ふ。世間の親の勘當は、わが子が博奕するか、おやま狂ひするか、あり金持ち出して使ひ捨て、親に迷惑かくればこそぢや。文七めは博奕も打つ、おやま狂ひもするばかりか、まだ其上に喧嘩を買つてあばれあるく無法者、たとひ勘當したればとて、あいつが此世にあるかぎりは、世間の人々の迷惑難儀は絶えぬ。勘當で濟むことなら勘當する。濟まねばこそ勘當に輪をかけて、お上へ不孝の届けを出し、あいつを暗いところへ封じこめて、世間に迷惑をかけまい用心、かならず無慈悲と思ふなと、誰が止めるのも耳にもかけず、奉行所へその通りに届けて出たれば、文七めは不孝の科ですぐに入牢、隨分思ひ切つた仕置であつたよ。

傳兵衛。それから足かけ二年目の先月五日に大旦那様は御病死。たとひ赤の他人を養子にしてこの身代をゆづるとも、文七めは決して連れて戻るなといふ、堅い御遺言ではございましたが、なにを申すも唯つた一人の御相續人、是非にといふおふくろ様のお嘆きを、どなたも

御もつともと思召され、あらためてお上へおねがひ申して、やう〳〵御赦免に相成りましたれば、流石の若旦那もこれに懲りて、屹とおつゝしみなさるでござりませう。

武右衛。　かりがね屋のひとり息子、文七が戻らねば家が斷えまするとお慈悲をねがつて連れては來たが、あしかけ二年の牢舍の苦が流石にあいつの骨身にこたへて、どうか眞人間になつてくれゝばよいが……。さつきからの樣子では、よほど神妙らしくも見ゆるが、それが當座か長くつゞくか、まだ〳〵滅多に油斷はならぬ。所詮は母親のあまやかしが過ぎたればこそ、あのやうな暴れ者に育てあげたのぢや。これからは猶さら大事、おまへもそばで氣をつけて、再びあいつを暗いところに遣つてくれるな。おふくろにもこの中よく〳〵云ひ聞かせて置いたが、例のあまやかしが心もとない。死んだ親父のやうに嚴しいも如何ぢやが、あまやかしは猶惡い。くれ〴〵も氣をつけるやうに賴みますぞ。

傳兵衛。　かしこまりましてござります。及ばずながらわたくしがおふくろ樣と若旦那への御意見番、それで支へがなりませぬ時には、おまへ樣までお知らせ申して、お力添へをねがひます。

武右衛。　かならず隱さずに知らせてください。

傳兵衛。　承知いたしました。

（下のかたにて「喧嘩ぢや、喧嘩ぢや。」と大勢の叫ぶ聲。）

武右衛。　あゝ、また喧嘩か。

（ふたりは起つて下のかたをみる。雷庄九郎、廿五六歳、かみなり漬屋の息子、血のつきたる脇差をぬき持ちて走り出で、かりがね屋の店さきへ來て前後を見まはし、その脇差を藍壺のなかへ投げ込み、悠々として上のかたへゆきかゝる。）

傳兵衛。　もし、もし。

庄九郎。　なんぢや。

傳兵衛。　おまへはこゝの仕事場へ何を投げ込んで行きなされた。

庄九郎。　なにを投げ込んでゆくものか。

傳兵衛。　いや、いや、さうは云はさせぬ。あの藍壺へ光つたものを……。もし、あれはなんでござるな。

庄九郎。　えゝ、意地のわるい詮議をするな。このかみなりの顏を知らぬか。

傳兵衛。　こなたはかみなり漬屋の庄九郎どの。それはよく知つてゐますが、こゝの店へあのやうな

ものを投げ込まれては甚だ迷惑、持つて歸つてくださりませ。

庄九郎。（のれんを指さす。）番頭どの。あれはなんぢや。あれに染めてあるのは何ぢや。

傳兵衛。こゝの屋號のかりがねでございます。

庄九郎。これをみろ。（左の腕をまくると、二の腕に雁金のほりものがある。）

傳兵衛。おゝ、やつぱり雁金のほりものが……。

庄九郎。こゝの店では屋號か知らぬが、おれたちに取つては仲間のしるしぢや。こゝの息子の文七を頭にする雁金組の相印ぢや。その仲間の庄九郎がこゝへ來て、なにをしようと詮議は無用、だまつて通すが仲間の作法ぢやと思へ。（云ひすてゝ行きかゝる。）

傳兵衛。（追ひかけて袖をつかむ。）かりがね組のことなぞは知りませぬ。堅氣の商人の店さきへ刃物をなげ込んでゆかれては、後日のかゝり合がむづかしうございます。是非に持つて行つてくださりませ。

庄九郎。持つてゆかれるほどならば、初めから投げ込むものか。わからぬことを云ふな、云ふな。

（庄九郎は傳兵衛をつきのけて又行きかゝる時、奥の暖簾口より文七は月代を剃りて髪をゆひ直し、着物を着かへて出づ。）

文七。かみなりか。

庄九郎。おゝ、かりがね。いつ戻つた。近いうちに戻されると云ふ噂は聞いてゐたが、もう歸つてゐようとは知らなんだ。知つてゐたら皆んなを誘つて、出迎ひに行かうものを……。

文七。上のお慈悲でやう〳〵戻されて來た文七、貴様達のやうなあばれ者に、迎ひに來られて堪るものか。

庄九郎。なにしろ、よくまあ達者でゐてくれたな。若いものが些との喧嘩や道樂をしたればとて、親の口から不孝を云ひたてゝ、わが子を地獄へ突き落すとは、鬼にました雁金屋の因業おやぢめ。おのれ、今に氣が狂うて首でも吊るか、牡丹餅が喉につかへて頓死でもするかと、こゝの店のまへを通るたびに、いつも横眼で睨み付けてゐたところ、おれの思ひが闇魔の廳へも通じたやら、業つく張りのおやぢめも先月の初めにころりと往生。やれめでたいと、おれ達も手を拍つて喜んでゐたら、つゞいてお身が戻つてくる。いよ〳〵これは目出たいだらけぢや。

文七。えゝ、やかましい。おのれには親がないか。人の前でその親のわる口、憎て口を、子として聽いてゐられうか。もう一度云つてみろ。おのれ、唯は置かぬぞよ。

庄九郎。　え。（やゝ意外らしく文七の顔をみつめる。）

文　七。　おれでさへも恨まぬおやぢ様を、おのれらに恨まるゝ覺えはない。それもみんなおれの心得違ひから起つたこと。おのれらのやうな無法者を友達にして、かりがね組の何のとあばれあるいたが一生のあやまりぢや。今までの雁金文七は二年まへに死んでしまつて、けふから生れ變つた文七は堅氣の町人、五間間口の店のあるじぢや。喧嘩仲間の附合も作法も知ることか。やい、庄九郎。おのれは喧嘩して相手に疵をつけ、後の證據とならぬやうに、その血刀をこゝの店の藍壺に投げ込んだな。番頭もいふ通り、そんなものを置いてゆかれては迷惑ぢや。早く拾ひ出して持つてゆけ。

庄九郎。　え。（躊躇してゐる。）

文　七。　えゝ、早く持つてゆかぬか。むかしの文七と思ふたら間違ふぞ。

庄九郎。　その藍壺へ、どうしてこの手を突つ込めるものか。いかにも庄九郎は、となり町で喧嘩して人を突いたが、かうなれば意地づくぢや。たとひなんと云はれても、投げ込んだ刃物を持ち出しては行くまい。それで惡くば、縄をかけて突き出してくれ。（店さきに腰をかける。）さあ、突き出してくれ。かみなり庄九郎を縄附きにして、こゝの店から突き出してくれ。

（この以前よりお石は暖簾口に出てうかゞひゐたるが、この時つか〳〵と進み出づ。）

お　石。　これ、これ、庄九郎どの。けふは文七が戻つて來て、めでたいと祝つてゐる最中に、縄附の何のと聞くも忌はしい。こなたのやうなあばれ者に店を塞がれては迷惑、なにを投げ込んだか知らぬけれど、その詮議はあとのことにして、早くこゝを立去つてくだされ。

庄九郎。　おれは元よりその積りぢやが、こゝで引きとめるから止まつたまでよ。そんならおふくろ、このまゝ行つても仔細はないな。

お　石。　おゝ、ちつとも早く行つてくだされ。

庄九郎。　むゝ。（たち上る。）

文　七。　後にあらためて祝ひにくるぞよ。くどくも云ふ通り、おれは昔の文七でない。喧嘩商賣のおのれらは再び門端を踏んでくれるな。

（庄九郎はあざ笑ひながら上のかたへ立去る。先刻より默まつて見物してゐたる武右衛門は初めて口をひらく。）

武右衛門。　あれがかみなり漬屋の野良息子ぢやな。

傳兵衛。　店の看板を肩書に、かみなりと名乗つてあばれ歩くのでござります。

武右衛。　まだそのほかにも鍛冶屋の倅、桂庵の倅、船頭の倅ども、揃ひも揃つて大阪中の持扱ひものぢや。（文七に。）云ふまでもないことぢやが、あんな奴等が誘ひに來ても、向後決して友達附合をしまいぞよ。

文　七。　勿論でござります。今もあいつのさばり様、あんまり腹に据ゑ兼ねましたので、つかみ挫いでやらうかと存じましたが、いや、いや、こゝで喧嘩しては元の文七、こゝが堪忍の仕どころと、ぢつと辛抱してをりました。

お　石。　さうぢや、さうぢや。おまへの生まれ變つたことは、をぢ様もわたしも見とゞけました。

武右衛。　ほんたうに生まれ變つてくれよ。

文　七。　唯今もおやぢ様の御位牌のまへで、堅く誓つてまゐりました。

お　石。　かうなつたら若い者には早く身を固めさせねばならぬ。なう、をぢ様。かねて約束のあのおそよ殿も、文七の入牢から一旦破談にはなつたれど、かうして無事に戻るからは、撚りを戻して元々通りに……。

武右衛。　さあ、その相談は追つてのことぢやが、兎もかくもおそよめは、いづれ後ほどお祝ひながらお手傳ひによこしませう。

お　石。　きつとよこして下さりませ。

武右衛。　では、わたしも一旦戻つて、また出直して來るとしませう。

傳兵衛。　色々ありがたうござりました。

武右衛。　文七。外にはいろ〳〵の惡魔が網を張つてゐる。當分は迂濶に出あるくなよ。

文　七。　これからお墓へまゐりまして、その後は當分自宅に謹慎、めつたに出あるきは致しませぬ。

武右衛。　その約束を忘れてくれるな。

（武右衛門は一同に會釋して下のかたへ去る。）

お　石。　をぢ御も安心して歸られた。わたしも安心、皆も安心、こんなめでたいことはない。これ、文七。お墓まゐりにはお前ひとりでも行かれまい。誰を供に連れて行きますぞ。

傳兵衛。　誰彼と云はうよりも、わたくしがお供いたしませう。

文　七。　いや、おまへは今日は忙がしからう。（お石に。）長助か幸八を連れてまゐります。

お　石。　それもよからう。それでは早く御飯をたべて行きや。もう支度が出來てゐる筈、ちよつと行つて見て來ませう。